

昭和二年三月廿八日印刷
昭和二年三月一日發行

卷第二號 (隔月一日發行)

GEKI

人形芝居號



三
月
號



1927.3

Vol II-No. 2

ルービヒサア ルービ黒ヒサア ンロトシンボリ



お断り

本號は印刷所の不注意より御覽の通り、期日もおくれ、印刷、紙質その他一切が甚だ不体裁でこのまゝでは本誌の面目にも關しますので、改版に附する決心をしましたが、已に全部出來上つた上でもありますので、取敢えず、定價を**金參拾錢**に引下げ、いさゝかその不体裁の責めを補ひたいと存じます。何卒今號だけは御寛容の程を伏して願ひ上げます。

次號こそは御期待に添ふべく努力いたします。

三月五日

編輯者

劇

(第二卷第二號)

昭和二年三月號

脚

ほとの花嫁 (人形芝居、四幕)……小寺 融吉 (23)

明るい座敷 (一 幕)……森田 信義 (2)

ある瞬間の横顔 (一 幕)……川口 尙輝 (14)

毆られ同志 (一 場)……モルナル作 鈴木善太郎 譯 (23)

闇の中に (一 幕)……豊岡佐一郎 (45)

本

人形淨瑠璃の生れるまで……………木谷 蓬吟 (60)

人形淨瑠璃と泉州堺……………石割松太郎 (63)

淡路の人形芝居の思ひ出……………中山 鏡夫 (56)
リチャード・テシユネルのスタヂオ片影……………倉橋 巖二 (7)

社會意識と劇……………坪内 士行 (79)

◆劇壇無禮講座……………(82)

◆海を越えての名著……………(59)

◆ゲーテと人形芝居……………(58)

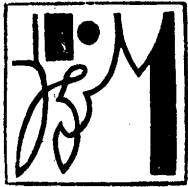
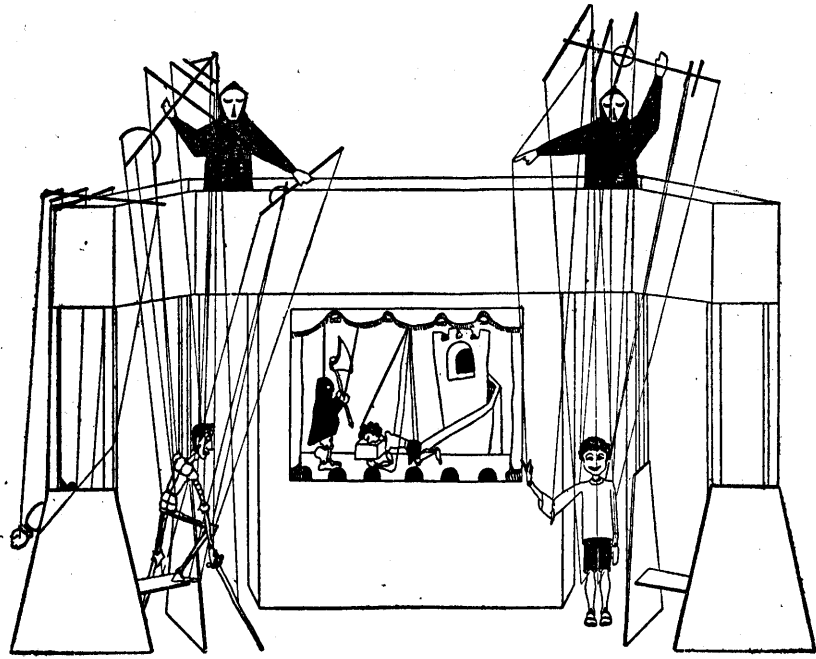
◆シラノ・ド・ベルヂユ
ラックク猿を斬る……………(78)

◆「戯れ」國民座上演……………(65)

◆歐米戯曲翻譯總覽正誤……………(101)

イタリーの人形芝居……………山田松太郎 (71)

日本人形芝居略史……………山下 良三 (84)



三 月 號

第 二 卷 第 二 號

春の御新装を
お寫しになりますには

結城寫眞館

お氣に召すまで幾度
でもお寫しするのが
本店の特色で御座います

大阪市東區道修町五丁目角

電話本局一二三八番

明るい座敷 (一幕)

森田 信義

人 物

主人
ふさ子
ちあき

四月
午前

真向きに日差しを受け入れた、目眩しいばかりに明るい座敷。
奥はウエランダ風に幅廣く造られたる縁側。硝子戸。樹木の植はつた稍廣き庭。
座敷には毯を敷きて、腰椅子、船底椅子、背高椅子、喫煙卓等の洋式家具が配置しある。

縁側にも坐心地よげな脇突椅子が二脚、卓を挟んで置きある。
出入は縁側の右手のはづれ、左手の壁つゞきの唐紙。

主人 (書家。四十位。巻煙草を啣へ、着流しの帯に兩手を突込んで、右手から飄然と入り來り、縁側の卓の上の吹殻容器に煙草を突差し、椅子に踞ける。暫くして、新しい分に點火して連りに喫す。書材に就きて思考を纏めんと試みる容子)

ふさ子 (モデルの娘。十九歳。晴れやかな明るい聲。左手の部屋にて、問ひ試みるやうに) 先生? そこにあらつしやるのは……先生?

主人 (思考をつゞけながら) あ。

ふさ子 お歸んなさい。——好いお天氣でせう、そとは。

主人 ……

ふさ子 ……暖いでせう、随分。

主人 (しばらくして、獨りで頷く) うん。うん。

ふさ子 (しばらくして) なにか仰しやつて?

主人 ナイン。

ふさ子 え?

主人 なんにも云やあしない。

ふさ子 さう。……なにか仰しやつたかと思つて……。

主人 (懐を探つて寫生帖を取り出し、眺め且つ思念する。——それをつゞけながら、しばらくして) おい。

ふさ子 はい。

主人 おまいそこで何をしてゐるんだ。

ふさ子 わたし……ちよつと……。

主人 (帖を閉じて卓の上に置き、しばらく煙草を喫す。漸く思索から解放される) おまい何をしてゐるんだ。

ふさ子 いま、ちよつと……。思ひ違つて、急に慌てた聲で) あら、今こちらへいらしちやあいいけないわ。

主人 馬鹿だなあ。(聲を立て、哄ふ)

ふさ子 (氣まり悪く) あら。——いゝえ、ね。さつきお出掛けになつてから、お湯を頂いたので……。いま、ちよつと……。だもんだから……。

主人 馬鹿だなあ。

ふさ子 もうちよつとなんですけれど……。もうすこ

し……。

主人 婆やは何處かへ出掛けたのか。

ふさ子 さあ、さうですか。——おませんでしたか、あちらに。——さつきまではゐたんですけれど……。しばらくして) 何か御用?

主人 (餘所事を考へてゐたが) あ。いや、珈琲が飲みたくなつたもんだから……。

ふさ子 珈琲……ですの。ちよつと待つててくださいれば、わたしが直ぐ……ちよつ。(舌打をする)

主人 さうしたんだ。

ふさ子 いゝえ、あの……まみ毛……が、ね……さうも……なんだか……。すみましたわ。——お待ち遠うさま。直ぐに入れて來ましてよ……。さう云ひながらもぐずぐずしてゐる容子。間の唐紙をするりと明けて其處に立つ。さちらかと云へば小柄なれども、手足が非常にしなやかで、容貌もすぐれて美しいと云ふではなく眼な寧ろ沈んだ深い表情をた、へてゐる。唯齒は大變に美しい。舉止は地は飽くまで淑やかであるのを、故意に努めて晴々しく小兒ばく振舞つてゐるらしく感じられる。しかし、その不自然さは厭惡な感じを伴はないで、寧ろ可憐な感じを感ぜさせる。片手で軽く頬を押へてゐる。)

主人 (突然叫ぶやうに) あ。待った。その儘。動くな。

(凝視する)

ふさ子 (意を悟りて動かす)

主人 (凝視をつゞける)

ふさ子 (姿態を保ちつゞける)

主人 (表情あり。舌打をする。いらいらした良^{きび}しい調子で) なせ動くのだ。

ふさ子 (表情あり)

主人 (間。平靜な聲に戻りて) よし、よし。もう好い。

もう好いせ。おい。

ふさ子 もうよろしいんですか。

主人 うん。

ふさ子 漸く姿態を崩す。そろそろ近づきながら) わたし……あの……動きまして。

主人 うん。いや……。煙草を喫し、ものを案づる目付きをする) さう……ちよつと、ね。ちよつと……。 (考

事に氣を奪られる)

ふさ子 (表情あり)

主人 (猶ものを案づる目付きをつゞけながら。ゆつくりと) また、あしたから……。いや、けふの午後から、爲事を始める……。かも知れない。 (平常に戻る) その積りだね。好いかい。

ふさ子 え、え……。今の姿態^{がた}ですの。主人 いや……。 (またものを案づる容子。しばらくして) とにかく始める。

ふさ子 (卓の傍に立つ。表情あり)

主人 (見逃さず、訝る色あり)

ふさ子 わたし嬉れしいのですの。

主人 む。嬉れしいかい。

ふさ子 (力を籠めて) え。だつて……。さう云ふでせう、わたし、三日も四日も臺に立たない日がつゞくと、かう……。なんだか、かう……。氣分が……。體も……

さう云ふんでせう……。 (適切な辭を索める表情)

主人 よし、よし。判る。判つてゐる。本當におまい好い子だ。

ふさ子 まあ。

主人 (相對する椅子を指差す) 踞けろよ。

ふさ子 え。でも、珈琲を……。

主人 あ、さうか。まあ好い。好いから……。話をしよう。

ふさ子 よござんす? (云ひながら踞ける)

(兩人しばらく黙す)

主人 (煙草を味はひつゝ喫す)

ふさ子 (主人の何か云ひ出すを待ちをる。すこし待ち

遠ほしげなる色あり)

主人 おまいけふは眉毛の引き方がすこし拙いねえ。

ふさ子 あら。さうですか、やつぱり……。 (そつと手で

眉毛を押へて隠すやうにする)

主人 口唇もすこし赤過ぎたね。

ふさ子 あら。さうしたのでせう。(指尖にて口唇を擦り消さんとする。脚を卓の下部の渡板に乗せんとして、

過つて主人の足尖を踏む。おぼろいて曳つ込める。赫くなる) あら。わたし……。 (まだ口唇を擦つてゐる)

主人 馬鹿だなあ……。 まつたくおまいは不思議な子供だよ。

ふさ子 子供……ですの?

主人 さうさ。不服かね?

ふさ子 だつて、それあ……。 すこし——すこしだけ、不

服ですわ。

主人 それは、それは。

ふさ子 あら。

主人 いや、さうだよ、さうだよ。他人の云ふことを聞かないで齒が痛くなるまでミルクチョコレートを食べたりなんぞしたことはないしね、鉢植の薔薇の花瓣をむしり取つて、そこらに撒き散らして悦んだりなんぞしたこともないしね……。

ふさ子 あら。だつて……。 あれは……。

主人 さうとも、決してそんなことしないよ、おまいは。

ふさ子 あら。

主人 (口眞似する) あら。

ふさ子 まあ……。

主人 (俄かに考える容子) はてね……。 (凝然と視る) 主人 (俄かに……。 (怪しむ色)

主人 (凝視をつゞける。俄かに) こいつは愉快だ。すばらしいぞ。む。 (獨り有頂天になつて) こいつは愉快だ。

おい。

ふさ子 ……。

主人 おい。おまい、ミチイを知つてゐるだらう。ミチイ——寫眞を見たことがあつたね、たしか。

ふさ子 (あやふやに) ミチイ? 活動寫眞の役者ですの?

主人 そんなもんぢやあないよ。ほら、俺の若い時分の分のアルバムに入つてゐたぢやあないか。思ひ出せない?

ふさ子 え、なんだか……。 よく……。

主人 よくつて、馬鹿だなあ。あるぢやあないか、ほら、手をかう組み合はせて、泣面^{なみ}をかいてゐるやうな、しがつめ面をした女の寫眞が。

ふさ子 え、え、え。
主人 あつただらう。あれがミチイだ。おまいだ。

ふさ子 あら。さうして、わたしが……。
主人 おまいだよ。おまいがそっくりあの子だよ。今發見したのだ、はつきり。

ふさ子 まあ。

主人 實はおまいを始めて見た時から、いつか何處ついで出逢つた少女のやうな気がしてゐたんだが——、たしかそんな意味のこと話したことがあつたつね——、そしたら、おまいが、さつき、ほら、あらだつて——とか何とか云つて、かう口をまんがらせたらう。あの表情ですつかり、はつきりと記憶が醒めたのだ。

ふさ子 まあ……そんなに、似てゐまして。

主人 似てゐる段か。顔や何か、片方は西洋人だから、何だけれど、おまいがよくやる——ちよいとさうかした時の表情や何か……。いや、それより第一……なんど云ふかなあ——気分だ。気分——明るくなつたり急に暗くなつたり、ばかに變化の多い気分なにか、似てゐる以上だ。

ふさ子 ミチイ……さん？

主人 うん、ミチイにさ。これあ愉快だ。さうしてけふまで気がつかなくなつたかなあ。

ふさ子 さんな方ですの？ そのミチイさん。

主人 さんな？ ミチイ？ 俺が若かつた頃、一夏來て呉れてゐた子さ、無論あちらでね。モデルとしては極素人だつたけれど——恰度おまいみたいに——しかし、素晴らしい娘だつたよ。あいつあれで俺にとつては恩人だよ。俺が一足飛びに世間に飛び出すことが出来たのも、半分以上あいつの力だつたからな。(追想するやうに)よく描いたなあ、あの頃は。……素晴らしく。

まるで熱に浮かされてゐるやうな状態で、さんさん爲事が出来たつね。俺の藝術の眞夏だつたのだなあ。なにしろ、まるでものに憑かれてゐるやうな鹽梅で、描いてゐる傍から傍から新しい刺激を感じるんだ。衝動が起るのだ。云つて見れば、なんのことはない、恰度けふ此頃のやうな具合に……。はたと語を切る。心中に醒覺した想念に愕然とする。瞑目してふさ子を見詰る。

ふさ子 (思ひ沈む氣色)

主人 (疑ひ惑ひ糺さんと試みるごとく、愈々凝然と見詰む)さうすると……。さてね……。

ふさ子 (愈々思ひ沈む容子。ひそかに溜息をつく)

主人 (獨り)む……。これは大切なことだぞ。

(玄關にて鈴の音)

ふさ子 あら、さなたかいらしやうですわ。(立つて右手に去る)

主人 (見送る)

(間)

ちあき (主人の妹。三十二三歳。あちらにて)こちら？

……(入り来る。外出着。主人を見て)こんにちは。

主人 やあ……。一人？

ちあき え？

主人 小僧は？

ちあき 置いて來ましたの。それに、なんだか二三日前から、すこし風邪氣味なものですからね。(この科白のうちを踏む)

主人 そりやあいかなあ。よくそれでも黙つて納得したねえ。

ちあき さうして、さうして。困つたのよ。

主人 さうだらう。さうして、何は？ 兄貴の方は？

ちあき 勝？ これは元氣。けふも遠足だつて大騒ぎを

して、朝早くから出掛けましたわ。ちいさい方が羨ましがりましたね。

主人 さうだらうとも。……おつかさんは丈夫？ (云

ひながら硝子戸を一二枚繰る)

ちあき え、尤もこないだらうちよつと悪くて四五

日寝てなすつたけれど……。

主人 ほう。ちつとも知らなかつた。

ちあき もう癒いんです、すつかり。

主人 すつかり？ そりやあよかつた。

(ちよつと會話が切れる)

ちあき この頃大變御勉強の容子ねえ。

主人 俺かい。うん、描いてゐる。

ちあき 結構だわ。(思ひ出して)あ、さうさう、今度展覽會の審査員におんなすつたのですつてね。おめでたう。

主人 やあ。

ちあき 夫はわが事のやうに自慢して悦んでゐますの

よ。(云ひ云ひ包物を解く)

主人 やあ。

ちあき (包から洋酒の瓶を出す)これ。

主人 む、こいつは上等だ。ありがたう。

ちあき 他家から何したんだけれど、夫が全然頂かない

でしよ。だから……。

主人 結構、結構。また頼むせ。

ちあき あれだ。

ふさ子 (珈琲を運んで出る)さうぞ……。去る)

ちあき あの子？ 兄さんのお自慢の子は。

主人 あの子だ。さう？ なかなか好い子だらう。
ちあき え、好い子だわ、なかなか。十八九ね、小柄
だけれど。わたし、兄さんのお話では十六七位かと思
像してゐたわ。

主人 ところが、暫く傍に置いとくと直ぐ判るが、気分
や何かはその位なのだそこが好いところなんだ。

ちあき おやおや。(珈琲を掻き廻す)

主人 さうだ、氣に入つた？

ちあき 何が？ あの子？ え、氣に入つたわ。すこ
しなんだわ、モデルの娘には勿體ない位よ。

主人 おいおい。

ちあき おや、失禮。でも、結構だわ、好い娘さんが見
付かつて。

主人 結構以上だよ。

ちあき 變な云ひ方ね。

主人 何しろあいつ、二度と再度廻つて來まいとあきら
めてゐた眞夏を持つて來て呉れたのだからね。

ちあき 愈々變な云ひ方だわ。まあ何しても、氣に入つ
たモデルが見付かつて、お爲事がさんさん出來て結構
だわ。

主人 ありがたう。

ちあき (笑ふ)

主人 だから、今も云ふやうに、とに角にも何にも、と
んな積りもないんだ。それだけさ。

ちあき ぢやあ……つまり……全然、意志がない、の。

主人 ない。すくなくとも、當分は。

ちあき 當分つて？

主人 當分さ。

ちあき 困るわねえ。

主人 さうして？ 困るところはないぢやあないか。

ちあき 困るわ。おつかさんは勿論だし、大きい兄さん
だつて、夫だつて心配してゐるものを。(指尖で額を支
へ、思案をするらしき容子) 兄さん、あなた來年おい
くつにおんななるか知つて、？

主人 自分の歳を知らない奴があるものか。くだらない。

ちあき 來年は四十よ。……だから……。

主人 もう廢さうぢやあないか。いくら話し合つて見た
ところと同じさ。俺には——尠くとも當分は——その
意欲がないのだから、さうなるものぢやあない。

ちあき ……。

主人 とに角、とに角さ……俺は畫描きで、畫さへ描い
てゐれば、それで好い筈だ。

ちあき そりやあさうですけれど……でも……。

主人 それで仕舞ひ。

主人 (訝る)

ちあき ……だつて、兄さんたら。(笑を收めて) そりや
あさうとして……、あのう……、手紙お受取りくださ
つて？

主人 手紙？ ……あ、。

ちあき (念を押す) お読みになつて？

主人 讀んだよ。

ちあき さう……。ぢやあ、さう……あのこと？——お
つかさんが、それは苦に病んでね、云ひ暮らしてゐる
のよ、それはつかりが苦だつてね。だもんだから……
實は、わたし、けふそれで來たのよ。さう……？

主人 さうつて……結婚のことかい。

ちあき え、さう。……さうよ。——さう云ふお積
り？

主人 さう云ふ……たつて、別にさう云ふ積りもないさ。

ちあき さうなのよ、きまつて。——でも、困るわ、そ
れぢやあ、本當に。

主人 困るつて誰がかい。困るのは俺の方ぢやあないか。

ちあき い、え、さうぢやあないのよう。……困るわ
ねえ、まつたく、そんな調子で聞かれるのぢやあ……
ぢやあ、とに角……さうなの？ さう云ふお積りな
の？

ちあき (主人の容子を窺ひ窺ひ) あのね、あなた、もし
や——こりや僅んのわたしの想像だけよ、想像だけだ
けれど……、あなた、もしや、あの娘さん——ふうち
やんて子ね、あの子と結婚なさらうと、い、えあの子
となら結婚しても好い位に考えてゐらつしやるんぢや
あないこと？

主人 (惻りして眼を丸くする) おいおい、おまい眞面目
な話かい。

ちあき (きつぱりと) え、さう。

主人 おさうくなあ、これはまつたく。これはさう
も……。

ちあき い、え、本當に。

主人 (聲を立て、笑ふ)

ちあき 笑ひ事ぢやあないわ、決して。

主人 おいおい。……馬鹿だなあ、おまいは。

ちあき お株よ。兄さん、まあもうちよつとね、はぐら
かさないでね……好いこと？ わたしのさう訊ねた譯
はねえ……。

主人 廢せよ。俺はとてども眞面目には聞かれなから。

ちあき (嘆息する)

主人 もつと何か他の話をしようよ。え。

ちあき 困るわねえ。——ぢやあ、おつかさんには、と

ちあき ……。

主人 ……。

主人 ……。

主人 ……。

主人 ……。

主人 ……。

主人 ……。

主人 ……。

主人 ……。

んな風に云つときませう。

主人 好いやうに。安心させるやうに云つとくんだなあ、おつかさんには。

ちあき そんなこと云つたつて……安心させるやうなんで云ひやうがないわ。

主人 そこは委せる、おまいに。おまい巧いぢやないか。

ちあき 人を。ぢやあ、わたしもう失禮しますわ。(歸り仕度をする)

主人 歸る？ いやに現金だな。(笑ふ)

ちあき あら。兄さんにかゝつちやあ……。では、さよなら。

主人 あ。さよなら。小僧によろしく云つてくれ。病氣が癒つたら遊びに來いつて、伯父さんが好いものをやるからつて。

ちあき え、え。(笑ひながら去る)

主人 (見送つて出る)

(間)

ふさ子 (珈琲の器物をさげるために出る。盆の上に整頓してゐる)

主人 (愉快な顔付をして戻つて来る。背後から) おい、ミチイ。

白いことを云ふのだけ。

ふさ子 ……?

主人 俺がおまいを可哀がつて、あすこに行つても、しよつちうおまいの噂ばかりするだらう。そこへ、けふ始めておまいに逢つて、おまいが想像してゐたより年とつてゐることを知つたもんだから、俺はおまいと結婚をする積りぢやあないかつて訊ねるのだ。(おもしろげに) おまいと結婚を、さ。

ふさ子 (眼を瞪る) まあ……。感動のために身を固くする)。

主人 おや……。これは不思議だ。こいつはすてきだ。……む、……。こいつはすてきだ——おい、おまいがそんな眼付きをする、ますますあいつそつくりだぜ。

ふさ子 (もの憂く) あら、だれに……?

主人 (愉悅禁せざるごとくに) あの女にさ。さつき話したミチイにさ。不思議なくらゐる。なんだか變な氣がするくらひだ。——おまいどうして今まで、そんな表情を見せなかつたのだい?

ふさ子 (表情あり) あら、だつて、わたし……。

主人 む、おそろくくらゐるだ。なんだか、變な氣がする。——む、よし。その姿態(急がしく寫生帖を取り上げる)。

ふさ子 (振返る) あら。

主人 (通りすがりにその頬を指尖で軽く一つ喰はして置いて、もとの椅子に戻りて居ける)

ふさ子 すぐにお歸りになりましたのねえ。

主人 うん。いつもあ、だ。あの女は、なかなか綺麗だらう。

ふさ子 (力を入れて) え、とても……。

主人 (上氣嫌) とても、か。俺學生時代には自慢の妹だつたんだ。せんには——せんだつてまだ子供の時分のことだが、俺はあいつの類はつかり描いてゐた頃があつたつて。

ふさ子 (つゞましく微笑む)

主人 妹のやつ、おまいがひびく氣に入つて、しきりに讚めてゐたぜ。

ふさ子 あら、わたし……。

主人 (微笑) なかなかだの、随分だのと云ふ言葉でね。

——モデルに使ふには勿體な過ぎるなぞつてね。

ふさ子 まあ、そんなこと……。

主人 (うつかりと餘事を考えつ) いやいや、おまいにはさんな謙辭を受けても好いだけの價値があるよ。

ふさ子 (眼を瞪る) まあ。

主人 (急に聲を立て、笑ひ出す) それからね、こんな面

ふさ子 (急に両手で顔を掩ふ)

主人 (おそろく。怒氣を含んで) おや。おい。駄目ぢやあないか。

ふさ子 (両手のうちから、歌歌り上げながら、とぎれとぎれに) ひ、ひ、おそろい……わ、わたし……。

主人 さうしたんだ、一體……。え。おい。さうしたんだ。

ふさ子 いえ……いえ……なんでも……ないの。

主人 (不安になる。椅子から立つ) おい。——おいつたら……。近づく)

ふさ子 (拒む身振り。急に椅子に身を投げかけ、肘掛に伏す。歌歌をつゞける)

主人 (茫然とふさ子の肩のあたりを眺め盡す。咳く) さうも、おそろいた。(しばらくして) さあさあ。もう廢した。好い子だから、ね。さあさあ。(優しく肩に手をかけて抱くやうにして、起き直らせる) さあさあ、この手も(手を顔から離させる)

ふさ子 (すなほに従ふ)

主人 よしよし。そうれ、見ろ。顔が臺なしになつちまつた。馬鹿だなあ。(手巾を與ふ) それ。拭いた。(椅子に戻る) おそろかされるせ、おまいには、時々。

ふさ子 (手巾で顔を拭く)

(間)

主人 さうしたのさ、一體。云つて御覽。

ふさ子 (表情あり)

主人 おやおや。

ふさ子 (こらへて) いゝえ、もう泣きませんわ。(徐かに椅子より立つ) わたし、もう行かせて戴きます。

主人 (おさろく) おい、おまい。突然に、そんなこと……さうしたと云ふのだ。全體、俺には何が何だか、ちつ も判らん。

ふさ子 ……。

主人 え。

ふさ子 だつて……。 (泣き出しさうになるのをこらへる) ……だつて、先生は……わたしが、お厭なのですもの。

主人 え？

ふさ子 先生は、わたしがお厭なのです。

主人 變だなあ。

ふさ子 わ、わたし、もう辛抱が出来ませんの。——先生はわたしを、おもしろがつてばかりいらつしやるんですわ……本當には、ちつとも愛してくださらないで。

主人 ……。

ふさ子 お氣に入らうとすればするほど、おもしろがつ

ていらつしやるのですもの……。わたし……。でも、

わたし待つてゐましたの……。 (聲を願はず) でも、や

つぱり……。口唇を噛む)

主人 變だなあ、さうも……。——まあ、とに角お賭け。おい。

ふさ子 ……ミチイ——でせう。わたしミチイちやあありませんわ。ふさ子ですわ。

主人 ふさ子だとも。だがやつぱりさうも……。俺には、よく判らない、さう云ふことを云つてゐるのだから。

ふさ子 (凝視する) では、先生は本當に。わたしを、こんなわたしだと信じ切つてゐらつしやるの？ こんな……

主人 (おさろく憫れてゐる)

ふさ子 わたしは、ことし十九にもなる娘ですわ。

主人 はてね。

ふさ子 はてね——ですつて？

主人 ……。

ふさ子 わたしは十九の娘ですわ。でも、わたし何日かは乾隆十九のわたしを愛してくださる日が来るかも知れないと思つて、辛抱して來ましたの、けふまで。

主人 ……。

ふさ子 もうあかん坊の眞似にはほどほど疲れちまいましたわ。それに、もう甲斐がない努力だと云ふことも

判りましたし、今は。

主人 ……。

ふさ子 行かせてくださるでせう。

主人 (突然に) 待つた、おい。

(兩人眼を見合はせる)

主人 よろしい。行かなくつても好い。よろしい。おまいは十九の娘だ。

ふさ子 平凡な……。

主人 平凡な。

ふさ子 ちつとも無邪氣でない……。

主人 む。無邪氣でない。

ふさ子 (凝視する。感動して) まあ……。 (両手で顔を掩ふ)

(間)

ふさ子 でも……。先生、あのう……。わたしが平凡な、

十九の娘になつても……。お爲事差支へません？

主人 ナイン。差支えるものか。

ふさ子 本當に？ 描けます？

主人 描けるとも——おまいが行つて了ひさへしなきやあ。

ふさ子 まあ……。 (熱した溜息、笑)

主人 (情熱的に) 馬鹿だなあ、おまいはやつぱり。

ふさ子 えええ。わたしは馬鹿ですわ。(熱し輝いた顔)

—幕—

ある瞬間の横顔

(壹幕)

川口 尙輝

人物

幾造(潜水の仕事に没頭する男)

幾次郎(その弟、兄の仕事の助力者)

お絹(幾造の情婦)

舞臺は一面に海である。

潜水の仕事をする和船が一艘、中央に浮いてゐる。

船の中には真中に、潜水機が据え置かれる。船べり

から水中へ、梯子が下ろされてある。

上手に、遠く岸頭を見せ、小さい燈臺がある。

峽灣に近い海といふ感じ。

宵闇の迫る頃である。

波の音は断えず。

(幾造は、三十七歳で既に世に望みを失つた困難した神經質な男である。潜水服のまゝ、今や海底から上つてひと休みといふ様子。その傍に、幾次郎、三十歳ぐらゐ、強い肉體を何にも役立てることを好まぬ男。二人の間に、兄弟を等分に見守るやうにつとめてゐるお絹、この女は二十七歳、豊麗な兩乳と兩腕を露はにしてゐる。

三人共、稍疲れてゐる。)

幾次郎 兄さん、もうやめたらさう。もう大部暗くなつて来たやうだから。

お絹 ほんと。いつもよりはすうつと今日は遅いんですよ。

幾造 まあ、もうすこしやらうぢやないか。まだ燈臺に灯が入らないんだ。

幾次郎 でも、明日にすりやい、ぢやないか。

お絹 あたしも今日はひさく草疲れちやつたんだから。

幾造 俺はもう一邊入りたいたいんだよ。

幾次郎 兄さんは入りたくつたつて……。

お絹 さうよ、歸へりませうよ。

幾造 もう一度だ。……頼む……こんどこそは確かに上げて見せるから、ね、實際、もう一寸といふところなんだ。手を突込めば、すぐにも引きづり出せるところまで漕ぎつけてあるんだから。(獨言のやうに)もうわけやあない。

お絹 だつて、明日にしませうよ。

幾造 明日? 明日は此處にもう用はない。今一息といふのに、わざわざ明日また来るにも及ばないからね。

一年の苦辛惨憺も、水の泡ぢやなかつた。

幾次郎 兄さんの云ふことは、僕はもう信ぜられなくなつたんだ。同じやうな文句を、耳にしたこの出来るほど聴かされたからな。

お絹 全くねえ。

幾造 だがこんどこそ本統だよ。今までだつて嘘なんか云やしないがね。こんどといふこんどこそ目的物にありついたらんだ。これで最後だよ。

幾次郎 最後、最後つて何度も最後があるんだからな。

お絹 あたしもいつもさうは思ひながら、ひよつとしたり、こんどこそ本統なのかもしれないと思つたりして……。

幾次郎 一攫千金の夢をみてゐる人間の弱いところだね、全く。

幾造 そりやさうだよ。

幾次郎 兎に角、兄さん、今日のところは思ひきつて、これで歸へることにしようぢやないか。

幾造 いやだ。

幾次郎 さうしてさ。

幾造 折角、もう一息といふところまで来てゐるんだから……、何んだ彼だ云はないで手傳つてくれよ。たつた一度ぎりいでいと云つてるんぢやないかね。こんなこと云つてるまにすぐ時間が経つちまふ。な、さうだ、い、本統にたつた一邊ぎりなんだ。

お絹 まるで子供みたいだわね。

幾造 こないだから見えてゐたんだが、箱を引き出すことが、さうしても出来なかつたんだ。そいつが今日やつとさうにか引きづり出せるやうになつてるんぢやないか。こんど入らうもんなら、もう三分とは手間を取らせないつもりだ。

幾次郎 本統に最後かね。自信があるんだね。こんど出

て来て、さうにもその…なんていやなこつたからね。

幾造 いや大丈夫だ。
幾次郎 あやしいもんだ。兄弟の間柄で兄さんを疑るのはいけないこつだが、この一年ばかりの間に、すっかり兄さんといふ人は變つたからなあ。こんな調子だったら、近い内に兄さんを狂ひ扱ひにしなければならなくなるからな。

幾造 狂ひ扱ひにだ。

幾次郎 うん。だつて、兄さんは餘りにドリーマーだからね。まるで子供のやうなもの。サンタクロースのお爺さんが、大きな袋を背負つて、煙突から這入つて来るこいふことを本統だと信じてゐる子供みたいだからね。

お絹 さうよ、さうよ。

幾造 さうかね。おまへにはさうみえるのかね。だが、この海の底に確かに沈んでゐる金塊のことも、そんなお伽噺のやうに思へるのかね、おまへには。

幾次郎 半信半疑だから。

お絹 ちつとも嘘をみせないんだもの。

幾次郎 兄さんは水の底で何か別のものを探してゐるんだらう。金塊なんかやなくつて別のものを。何んて云ふか、何かこゝろ眼には見えないものを探してゐるんぢや

ないかい。

幾造 別なものつて、何をだ。

幾次郎 兄さんには、水の底に入つてゐるつてことだけで既に楽しいのぢやないかい。そして水の中で、心ゆくばかり幻想してゐるのがうれしんだらう。さうぢやないかい。さうも僕にはそんなやうに思へてしようがないがな。

幾造 そんなことはない。そりや成程、水の中は、俺達が今まで住んで来たやうな塵境…塵境たあまるで違ふにお違ふがね。だが、水の底で、一年といふ長い日をおまへの思つてるやうなくだらないことにお使つちやぬないよ。

お絹 それもさうね。

幾造 命がけの仕事だからな。

幾次郎 でも兄さんは、水の中は面白いと口癖のやうに云つてるぢやないか。俺達が息をしてゐる陸では到底見出せなかつた變つた美しい魅力があるさ云つてたぢやないか。

お絹 さうよ、毎日入つてゐると段々慣れて来て、面白いものが見えてくるのかもしれないわ。こんなこいふと又笑はれるかもしれないけれど、龍宮の乙姫さんなんぞが……。

幾造 馬鹿なことを。俺は、水ん中へ入つたら、それこそその瞬間から血眼だぞ。金塊をみつけるまでは、一生かかつて、探しあてねば止めないつもりでかかつた仕事だ。そんな呑気な話さこゝろぢやない。はなのうちには、幾度も幾度も、もうあきらめやうか、さあもうあきらめやうか、さ何度気が挫けさうになつたか少しあしない。でも俺あ止めなかつた。そしてたうとう最後にぶち當てた。

幾次郎 あはは、そのぶち當てた。そいつがあやしいといふんだよ。

幾造 それを疑ふんぢやしようがない。

お絹 あたしなんかまだ現物を見ないんだからねえ。

幾次郎 さうだ、まあ拜まして貰つてからにしようよ。

幾造 見てから驚くなよ。

幾次郎 世の中に、當てにやらんことを當てにして、しかも鯨と働いてゐるくらの馬鹿氣たことはないからな。最後だこいふんだから、今日一邊だけは我慢するが、明日からはもう本統に願ひ下げだ。

お絹 あたしも明日からはもう断るわよ。

幾造 しつこい奴等だ。これつきりださ云つてるのに。

お絹 それでいゝぢやないの。

幾次郎 それで、兄さん、一體どんな具合になつてるん

だ。幾等なんでも、そんな多額な金塊が入つてゐる箱なら、一人ぢや持ち上げられまい。

幾造 心配せんでもいゝ。一人で樂に持てる。今だからぶちまけていふが、俺はおまへ達を眞から喜ばしてやらうと思つて、實は勿體をつけてゐたんだ。實はね、いゝか、驚いぢやいけないう、もう引きづり出して、ちやあんど、(海の底を指して)この眞つ下にそのまゝにして置いてあるんだ。

お絹 まあ。

幾次郎 ようん。(晴々しくなつて)開けてみたかい、兄さん。

幾造 いや、まだ開けてはみんよ。

お絹 木の箱なの。

幾造 木の箱だよ。

幾次郎 箱が腐つちやぬなかつたかい。鍵がかかつてるんだらう。大丈夫開くかい。

幾造 さうせきこむなよ。

お絹 だつて、幾さんの氣持ちになれば、無理はないと思ふわ。あたしだつてさうだもの。やつと思ひが達したのだものね。もつと早く喜ばしてくれたいわん。だわ。長い間、身内にこんな苦勞をさして置いてさ。

幾次郎 兄さん、何んでもいゝから、さ、早くしようせ。

幾造 現金な奴だな、おまへは。

幾次郎 (周囲を見廻して) 暗くなつちやつた。

幾造 大丈夫だよ。手探りでも判るんだから。このまゝすうつと沈んで行くと、眞つ下にちやあんど置いてあるんだつてばさ。

お絹 ちや、一刻も早く喜ばしておくれよ、さ。

幾造 さう云はれると、もつとゆつくりしてゐたいやうな気がしてくる。まあ、もう一服してからね。いゝだらう。何にしろ、もうさつちへ轉んでも四分か五分、せいせい經つて十分の後には、俺は急に、このせち辛い世の中を、大手を振つて歩ける身分になれるんだ。明日からは大道を、ふんぞりかへつて歩いてやるぞ。生まれて三十七年、ろくな芽をみなかつた俺にも急に運が拓けたんだからね。

幾次郎 兄さん、そんなこと云つてるより……。

幾造 まあ俺の愚痴も聴いどくもんだ。俺達がこの灣の入口で、去年、この仕事を始め出した時から、この町の奴等あ、みんな俺達を狂ひださばかり思つてやがるんだ。馬鹿野郎共、狂ひか狂ひでないか、明日になつて驚くな。

お絹 あなた

幾造 あゝ、愉快だ、愉快だ。

(燈臺に灯がつく)

幾造 おや、灯がついたな。あの燈臺の番人も、長い間

俺達を毎日輕蔑してやがつたんだ。ざまあみる。この下に沈んでゐる船も、その頃はあんな燈臺がなかつたからこそだ。さう云や、俺も永年、小つぼけなトロール船の船長で、この沖を通つてゐたもんだものなあ。

幾次郎 兄さん、もういゝよ。早くしてくれないか。

幾造 まあ待て。小學校の教師なんかしてゐたせいか、

おまへは気が小さくていかん。小人はかういふ時に値打ちが判つちまふ。落ち着け、落ち着け。

お絹 でもあなた……。

幾造 貧乏だつた三十七年間の總勘定をしてるんだ。貧乏に左様ならのぐ挨拶をしてるんだ。暫らく我慢してゐてくれ。町の貧乏人ども、びつくりするな。……何かもつと痛快なことを、せいせいするやうに云ひたいのだがなあ……まあいゝや、何にしてもありがたいことだ。ありがたい、ありがたい。

お絹 さあ、そんなにありがたがつてゐないで、早くお金持ちにして欲しいわ。

幾造 おまへ達にも随分苦勞をさせたが、苦勞甲斐があつたといふもんだね。命がけの仕事だつたからなあ。こんな服を着て、こいつを頭からすつぽり冠つて、……

幾次郎 ……。

お絹 幾さん。

幾次郎 何んだね。

お絹 あゝ云つてるけれど、あたしはさうしても本統には思へないのよ。

幾次郎 こんどは本統らしいよ。

お絹 さうかしら。

幾次郎 さうだよ。

お絹 話ばつかし聴いてゐたつて、ちつとも見當がつかないんだもの、一邊こん中へ入つてみたいものだけ。

幾次郎 こんどこそめついたらしいから、もうそんな必要はないよ。これで僕も無駄ではなかつた。この下の船が沈没した當時の新聞に書いてあつたことは嘘ではなかつたんだ。

お絹 それで幾さんは幾等貰ふ約束をしたの。

幾次郎 二割。

お絹 二割ばつち。

幾次郎 二割だつて大きいよ。

お絹 それつぼちちやつまらないことよ。

幾次郎 もし新聞の記事のあれが事實だとしたら、それでも大したもんだ。

お絹 幾さんは人が好いのね。もつと貰つたつていゝん

……實際、こいつを冠つたが最後、その瞬間から、俺の生命はおまへ達に預けるんだからな。こんな危い商賣つてもものありやしない。おまへ達だからこそ、俺は生命までも安心して預けるのだ。だが、もう一邊入りさへすりや、もう二度とこんな危つかしい仕事は、しないでもいゝのだ。

幾次郎 兄さんのいふその信用の最後のつとめを早くしようせ。

お絹 (空を仰いで) 星があんなに一杯。

幾造 では、そろそろ、俺も水の中の星を拾ひに行かうかな。

幾次郎 頼むよ、兄さん。

お絹 しつかり掴んで来るんだよ。

幾造 もうわけやないんだよ、あはゝはゝ。

幾次郎 ちや用意をしよう。

幾造 ひとつ頼まふ。

(幾次郎が潜水機へつく。その間に徐々に、お絹が幾造に冠をかぶせる。幾次郎は空氣を入れる仕事に着手する。お絹も、片一方の手の方を押して空氣を入れる。幾造は静かに梯子を降り始める。水面から姿が消える。幾次郎とお絹とは一定の調子で断えず努力する)

お絹 幾さん。

だわ。

幾次郎 兄さんはあれでなかなか欲張りだからなあ。

お絹 餘りだわ、それぢや。

幾次郎 まあいゝさ。

お絹 夢さん。

幾次郎 何んだね。

お絹 相變らずぶくぶくやつてるわね。

幾次郎 やらなかつたら大變だよ。

お絹 かうしたらさう。

幾次郎 さう。

お絹 さうつてわかつてるぢやないの。

幾次郎 何を。

お絹 こなひだ云つたことは、あれは嘘なの。

幾次郎 兄さんを置き去りにして逃げる話かい。

お絹 さう。

幾次郎 そりやあの時はね。

お絹 では今はあけないと云ふの。

幾次郎 今はそんなこと云つてる擧合ぢやないぢやないか。

お絹 今だから云ふんだわ。

幾次郎 さうしてさ。

お絹 さうしてさつて、今が一等いゝ時だわよ。望みが

ないと思つてゐた時には、逃げるつもりだったの。二割ぼつちの分け前が貰へさうになつて來たので、急に元氣づいちゃたのね。あなたといふ人はそんな人だったのね。薄情だ。

幾次郎 さうぢやない。

お絹 では、こなひだの話を本統にしてみせてくれる？

幾次郎 さういふ具合にさ。

お絹 さうもかうもありやしな。判つてる辭に。

幾次郎 手をゆるめやうつてんだね。

お絹 さうよ。この手をこのやうに離せばいゝんだわ。

(お絹が、ハンドルの手を離す)

幾次郎 危い、危い、危いつては。

(幾次郎は、支へるために二人分の力を入れる)

お絹 離さないの、離さないつては。

幾次郎 今、そんなことしちや駄目だ。

お絹 意地地なし、臆病者。

幾次郎 兄さんが可愛相だ。

お絹 可愛相なのは始めから判つてるぢやないの。

幾次郎 危いからやつておくれ。

お絹 嫌だわよ。あたしは嫌だわよ。可愛相だなと感ふ

くらゐなら、何故こなひだあんなこと云ひ出したんだと。

幾次郎 頼むから動かしておくれ。

お絹 幾さん、あたし怨むわよ。最初から慰みものにするつもりだったのね、あなたは。

幾次郎 いや、そんなことはない。

お絹 何んてつたつて駄目。もう行くところまで行つち

まつてるのに、さうしようもありやしな。手を

離さないのなら、さうしてもさうなら、それでいゝわ。

幾次郎 そんなことしたら……。

お絹 頼みやしないわよ、もう。

幾次郎 さう云はれると僕が……。

お絹 だからいゝわよ。

幾次郎 怒つたのかい。

お絹 怒らなくつてさ。

幾次郎 が、僕の身にもなつて……でも離れたら、折角

の金塊が元も子も取れないぢやないか。よく考へてご

覧、後からだつて遅いといふことはないよ。

お絹 いや、いや、今のうちだ。殺すのなら今のうちだ。

誰も見てゐる者はありやしな。

幾次郎 (獨言のやうに) 怖ろしい女だ。

お絹 臆病者。

(お絹は幾次郎に接近して、彼に、作らない妖婦の本能的な魅力を發揮する。幾次郎はその誘惑から逃れ

やうご努力する。しかし無言の間に段々引きづり込まれて行く。)

お絹 こないゝ機會はないよ、幾さん。勇氣をお出し、勇氣をお出し、ね。

(幾次郎はお絹の腕を離さうと漢搔くので、この時には既にハンドルを離してゐる)

お絹 幾さん、あたしは誰のものでもない、おまへものだのに。

(お絹は憂鬱になつて船板の上に急に坐る。間、轉て病的に啜り泣く)

幾次郎 (ある決心を抱いて突然叫ぶやうに) おまへの……おまへの……云ふ通りにしよう。

(幾次郎、一二歩前進して、遠くを凝視してゐる)

お絹 (顔を上げて) おや、もう動かかしちやあなかつたの

ね。それでいゝんだわ、それでいゝんだわ。

(お絹、水面を凝視する、可なり長い間の沈黙)

お絹 ……あゝ、早いもんだ、もうおしまひだ。

幾次郎 泡が消えたか。

お絹 えゝ。

幾次郎 あッ。

(幾次郎、喰ひしはるやうに苦悶を押さへる)

お絹 これからは二人つきりよ。

幾次郎 ……。

お絹 (船縁へ手をかけ水の中を覗き込み) たうとうおしまひ。

(暫らくして、ぬうつと幾造が水面へ現はれる。極めて静かに、しかしグロテスクな感じを與へるやうに、梯子を昇つて船中へ移り、樺切れのやうに突立つてゐる)

お絹 あれツ。

(幾次郎は威壓されたやうに、さうしてもしなければならぬことをするやうに、幾造の冠を取る。幾造の横顔は眞青で慄慄な色である。彼は右手に大きな石を、大切さうにしつかり持つて、自分の胸に押しつけてゐる)

幾次郎 (幾造の前に跪いて) 兄さん、兄さん。

幾造 ……。

(お絹は何も云ひ得ず慄え乍ら、船縁にしがみついてゐる。幾造は、その石を前へ突き出して、異様な硬張つた微笑を洩らす)

幾次郎 (石を指して) 兄さん、光つてゐるよ。光つてゐるよ。海の底にあつた美しいものだ。ただの石ころぢやない。美しいものだ。美しいものだ。

お絹 (急に) いえ、違ひます。ただの、石ころだ。ただ

の石ころだ。

幾次郎 いや違ふ、違ふ。石ぢやない、石ぢやない。兄さんが長い間望んでゐた金塊だ。

幾造 ……。(微笑)

お絹 いえ、石です、石です。

幾次郎 兄さん、返事をしてくれ。何とか云つてくれ。

あ、あ(苦悶)……僕が悪かつたんだ。僕が悪かつたんだ。宥して下さい。……兄さん……(叫ぶ)……宥して下さい。

幾造 ……。(動かない微笑)

お絹 死ぬのよ……死ぬのよ……死んで行くのよ。

(この瞬間、幾造は石を抱いたまゝ、その位置で前方へ、ぱつたり倒れる)

幾次郎 あツ。

(幾造の死體に縋りつく)

お絹 何んでもない。……何んでもない。何んでもない……。

—幕—



ほんごの花嫁 (四幕)

—人形芝居—

小寺 融吉

處

フィンランド

時

むかし

人

イロオナ(美しい百姓娘)

ビルカ(その愛犬)

年増の女房(近所の百姓の妻)

オスモオ(イロオナの兄、半飼)

若い王子

老いたる仙人

家來多勢

妖女シユエツタア

湖の底の國の王

その子の王子

群衆

第一幕

第一場 農家 イロオナの家

民謡調の音楽で幕あく

田舎のまづしい農家の内部

諸事質素ながら落ちついて舊家の味ひ。

イロオナといふ可愛い、娘が歌を歌つて、

石臼をひいてゐる。

ビルカといふ犬が、イロオナに甘へてゐる

イロオナ

重い臼でも、まはせばまはる

まはしましよぞえ、まだ夜はあけぬ

も一つ、も一つ、も一つ。

重い臼でも、まはせばまはる。

起きて泣く子も、すかせばねむる。

も一つ、も一つ、も一つ。

(百姓の妻の年増女が、子供を抱きながら入ってくる)

年増の女房

イロオナさん、お精が出ますねえ。

イロオナ

あら、おばさん、いらつしやい。

年増の女房

親子といふものは争はれない。

お前さんがさうやつてゐるとこは

ほんどになくなつたおかあさんそのままだ。

やつぱり、その歌が好きだつたし。

イロオナ

まあ……此の石臼ができたときは

此のお家ができた時なんですつて。

もうかれこれ百年近くにもなるだらう

ど

誰かといひましたわ。

年増の女房

百年、にもなるかもしれないよ。
お前さんこの先祖さんといふのは
村の草分けだと聞いているから。
してみると、此の石臼や、その糸車は
つまり何代もの主人に使はれて
働いてきた、わけになるのねえ。

イロオナ

え、ですから、私かうしてゐても
昔を思ひだして、なつかしいのよ。
顔を知らない曾祖父や、曾祖母も
やつぱりかうして暮らしてゐたのだわ
あ、ほんとにこひしくてよ。

年増の女房

それはさうと、オスモ兄さんから
まだたよりはこないのかい。

イロオナ

え、どこかで好い商賣を見つけたら
私を迎へに戻つてくると
云つて家を出たきりですの。
でも私、こゝをはなれたくありません
の。

年増の女房

だつてお前さんも二親に別れたから
兄さんのいふことは聞かなげりや。
それに第一、もうイロオナさんも
よそに、お嫁へゆく年だしさ。

イロオナ

私、お嫁になんぞゆきません。
兄さんは、こんな所で、わづかの畑を
耕して
とても暮しが立ちはずしない。
何か仕事を探しにゆくと云ひました。
でも男は男、女は女ですわ。
私の家は、こゝの家です。

年増の女房

オスモおさんも一體どこにゐるのだら
う。

男のことだから案じはしないけど
でもお前さんは心配だらうね。

イロオナ

心配ですわ、毎日毎日思つてゐるわ。
たつた一人の兄さんですもの。

年増の女房

向ふだつてきつとさうよ。

王子

おいオスモオ、こら、オスモオ。

オスモオ

へえ、へえ、王子さま。

王子

さあ誓ひをたてろ、おれに向つて

決してうそは云はないと誓ひをたてろ

オスモオ

誓ひました。へえ、ごんな御用でせう
か。

王子

用といふのはこれだ。此の繪の娘は
たしかに、お前の妹なのだな。

オスモオ

へえ、イロオナでございます。

王子

このごぼりにちがひないな。

オスモオ

現在の兄貴がかいた似顔ですから。

王子

よし。そんならばだ。いゝか、よく聞

け。
お前はするおんど多く娘の數も見たが
お前の妹ほどの、つまり此の繪の主ほ
どのだ。
かあいゝ娘は見たことがないぞ
おれに向つて、幾度も云つたぞ。

オスモオ

申しましたとも。さうしてイロオナよ

り
かあいゝ娘が世界にをりますものか。

あれあの西に沈む太陽は、此の世にた

つた一つ

イロオナもたつた一人の娘です。

王子

おいオスモオ、たのみだ。妹をおれに

呉れ。

イロオナを、おれの花嫁にする。

オスモオ

王子さま、まさか。王子さまが。

王子

馬鹿め。太陽にうそをつくと罰があた

る。

仲の好い兄妹だからね。

まあ、ピルカが甘へてゐる。

(イロオナまた歌うたひ石臼をひく)

イロオナ

重い白でも、まはせばまはる

まはしましよぞえ、まだ夜はあけぬ。

も一つ、も一つ、もう一つ。

重い白でも、まはせばまはる。

.....

(年増女は抱く子をあやす、大たはむれ
る)

幕

第二場 城門の前

軽い陽氣な音楽で幕あく

夕景、首に小さい鈴をつけた羊の群れ歸

り来る。

遠く下手に笛の音、羊の群なほも續く。

門の内より若き王子出づ、手に繪を持つ

てゐる。

やがて羊の最後に羊飼オスモオ笛吹きて
出づ。

さ、もう一日も待つてはゐられない。

大至急こゝへつれてこい。早く早く

なにをぐぐぐしてゐるのだ。

オスモオ

でも私がまゐりますと、羊飼もが。

王子

なに羊飼の役なら、おれが代つてやる。

わけはない、その笛をよこせ。

オスモオ

王子さまが、羊飼を?

王子

さあ、よこせ。

(輕快な音楽、オスモオ去る、王子は笛を

吹く。王子踊り狂ふ。家來ども出づ、仙

人も出づ)

家來

王子さま、王子さま、これはく王子

さま。

せんたいさうして羊飼のまねなんぞ...

喜んでくれ、踊つてくれ、おれに花嫁

がくる。

花嫁だ、美しい子だ、かあい、子だ。

家 来

花嫁！ 王子さまの花嫁さま！

それはどちらのお城のお姫君が……

王 子

なに百姓の娘だよ。

家 来

百姓の、娘……百姓の……

王 子

あ、あの口もと、あのえくぼ、

全く此の世に二人きりだ。

家 来

百姓の娘、百姓の……

王 子

あ、太陽だ、太陽だ。

(王子踊り狂ひつゝ、城門に入る音楽は續く)

家 来

まるで気がひだ、百姓の娘なんぞ

さうして此のお城に住めるものか。

仙 人

役に立つ間、私は外に出てゆきませ

ん。

だがごんなにすゝめたつて。

オスモオ

なるほど、あゝ長い道中を急いできた

から

咽喉が乾いた。水を汲んできてくれな

いか。

イロオナ

すみません、気がつかなくなつたわ。

(イロオナ戸棚からコップを取り出し外

にゆく。

オスモオ手早く杵を振ひ石臼にひびを入

れる。

杵をおき、そしらぬ顔。イロオナ歸つて

くる)

オスモオ

ありがたう。

(煙草をすて、水のをむ)

オスモオ

あゝ元氣がついた。石臼を見て思ひだ

した。

いや、百姓の娘こそ、赤ざれだらけの

手で、

パンを焼き、水を汲む娘こそ

王子さまの、ほんとうの花嫁だ。

幕

第三場 農家 イロオナの家

前場の陽気な音楽が暮をおろした後も續

く。

それがすむと、音楽なしに静かに暮あく。

第一場と同じ場面、夕景うすぐらい。

テーブルの左右にオスモオとイロオナ。

オスモオは陽気に煙草をふかしてゐる。

イロオナはふさいでうつむいてゐる。

オスモオ

おれにはお前の心持がさうにも分らな

い。

あの立派なお城の王子さまの花嫁だ。

やがてはお妃にならうといふ話なのに

そんなによさいで、嫌がつてゐる。

ごんなに喜んでもらへるかと、

實は楽しみに歸つてきたものをなあ。

イロオナ

私はたゞ此の古い古い家に名残が惜し

いの。

たゞそれだけのことですわ。

オスモオ

こんな小さな古ぼけた家がなんにな

る。まるでお城とくらべものになりは

しない。

イロオナ

たどへ小さくても古ぼけても、

やつぱり家は家ですわ。兄さん、

もう百年も立つたのよ。

オスモオ

先祖の家は先祖の家だ。おれ達には……

イロオナ

此の石臼ね、これは百年前から……に

あるの。

……にすえつけたまゝなのよ。これが

まだ

イロオナ

え、蠟燭はこゝにあります。

(戸棚から燭臺を取つて机の上にのせる。

犬の聲)

イロオナ

おや、ピルカ、ピルカ、さうかして？

(イロオナ外に急いで出てゆく。

オスモオ突然立つて糸車をこぼす。そし

らぬ顔。

ピルカ入つてくる。オスモオにさびつき

尾をふる。

イロオナ燭を點する。明るくなる。

さびしい音楽が始まる)

オスモオ

ピルカ、おぼえてゐたな、よしよし。

イロオナ

私、毎晩夜なべに糸をつむぎますのよ。

見ていらつしやいな。上手になつたか

ら。

兄さんの着物になるのよ。

オスモオ

おれの着物をこしらへてくれるのかい。

(静かな音楽につれ、寂しい燭の光で糸車を廻す。
やがて車はまはらなくなる。こぼれてゐた。
イロオナ車の上に泣き伏す。オスモオいたはる)

オスモオ

時がくれば古いものは亡びる。
昔のことにみれんを残りしちやだめだ。
イロオナ、一所にお城にゆかうよ。

イロオナ

いゝえ、まだ私出られません。

オスモオ

まだ出られない？ だつてなんのため
に？

イロオナ

え、此の入口の戸がこはれない限り
こゝの家は、こゝの家ですわ。

オスモオ

さうかい、ではもうすゝめるのは止す
よ。
おれも疲れた、寝よう。

イロオナ

えゝやすみませう。石臼もわれるし
糸車もこはれました。なんといふ晩で
せう。
ピルカ、お前もおやすみ。

(兄妹は寢臺に横になる。犬も寝る、燭の
光。

音楽も程なく止む。

オスモオひそかに起きる。斧を探す。

斧を得て入口の戸をこはす。イロオナ目
をさます。
オスモオあはて、燭の火を消し寢臺に臥
す。

イロオナ手さぐりに燭の火を點する)

イロオナ

あゝつ、兄さん。

オスモオ

なあんだ。今のは地震か。

イロオナ

戸がこはれました。

オスモオ

おゝ戸が……。

イロオナ

兄さん。私を引きとめる物はなくなり
ました。
もうどこで暮しても同じですわ。

まわりませう。ごごへでも。せつかく親
切に迎へにきて下すつたのですもの、
もう此の家も、さうな事です。(泣く)

オスモオ

イロオナ。

イロオナ

兄さん。

(兄妹は抱きあふ。犬が目をさます)

幕

第二幕

第一場 湖上

民謡調の音楽で幕があく
湖水、さざなみも立たぬ
小さい舟が一艘下手からくる
オスモオが歌を歌ひながら漕いでゐる。
イロオナさピルカが景色をながめてゐる。

オスモオ

たとへ此の子が男の子でも
舟のり商賣させはせぬ
エツシツ、ヤツシツシど。

イロオナ

私いつまでも、かうしてゐたいわ。
なんて面白いのでせう。

オスモオ

子供みたいな奴だなあ。
尤も舟にのつたことがないからなあ。

イロオナ

すきとほつた、奇麗な水だこと。
深さうねえ。おゝ、つめたい。
あらあら、こんなに魚があてよ、あて
よ。

オスモオ

おい、危ない、落ちるよ。

イロオナ

大丈夫よ、氣をつけるから。
おうちの山が見えなくなつた。大分き
たわ。

オスモオ

もう半分みちだ。風がないから樂なも
のだ。
(オスモオ手に唾つけて漕ぐ。景色移る
遠くで婆さんの聲、おうい、おうい……)

オスモオ

おや、誰か呼んでるせ、あゝあそこだ。
手招きしてる。のせてもらひたいのだ
らう。

ねえ、のせてやらうちやないか。婆さ
んだ。

イロオナ

でも誰だか知らない人でせう？ それ
になんだか意地が悪さうちやなくて。
黙つてゆきませうよ。知らんふりして、

オスモオ

それもさうだな。
(また漕ぎだす。おうい、おういこしはが
れ聲)

オスモオ

さうだい、イロオナ、もう一人ぐらゐ、
のせたつて困りはしないんだ。

イロオナ

兄さん、でもほんとによした方がよく
てよ。
あとで何か悪いことが起りさうですも
の。

オスモオ

さうだな。ごこの奴か分らないし。
行かう、行かう、親切も人によりけり
だ。
王子様がお待兼ねだ。道草くはずに急
がう。

(オスモオ上着をぬぎ、唾つけて漕ぐ。
「のせておくれよう。後生だよう」と呼ぶ
聲)

オスモオ

イロオナ、もうとめないでくれ。
とても見すてるわけにいかなくなつた。
(舟の向きはかはる。イロオナ犬を抱き俯
むく。
忽ち鳥が現はれる。田舎の婆さんがゐる。
舟にのる。鳥は忽ち遠ざかる)

妖 女

あゝ大助かりだ、ありがたい。
權を持つ手が若いに似合はず巧者だね。
嵐がきても安心だ。それに此の子は
またちよいと別品さんだよ。

イロオナ

まあ私なんぞが。

妖 女

王様のお妃になつても耻しくないよさ。

イロオナ

ビルカ、こつちへおいで。

オスモオ

おばさん、實はそのとほりなんだ。

これはおれの妹だが、王子様のお嫁に
なりに今お城にゆく途中だよ。

イロオナ

兄さん、そんなことを。

オスモオ

なあに、い、ぢやないか。おれは大き
慢さ。

妖 女

ふーん、ぢや此の子が王子のお嫁にか

い。

オスモオ

さうさ。おれの妹のイロオナといふの
だ。

妖 女

では、その包みは花嫁の衣裳かい。
一寸お見せ、一寸だよ、お見せといつ
たら。

イロオナ

あら、いけません。それを取つちや、

オスモオ

まあ、見せたつていよさ。

妖 女

なあんだい、まあこれは、お前これが
王子のお嫁のきる着物かい、貧乏な
百姓娘でなけりやしやしないよ。

イロオナ

え、私が縫つた着物ばかりですよ。

妖 女

これが嫁入衣裳だとさ、ビードだ。

オスモオ

なんだと、もう一度云つてみる。

妖 女

おだまり。(印を結ぶ)

(オスモオ、イロオナ、犬、昏倒)

妖 女

私を誰だと思ふ。シユエツタアだよ、
フィンランドで一番えらい魔女だ。
人を舟にのせるのに、三度まで呼ばせ
あがる。

さうだ、此の兄のいふ事は妹に聞えず
また妹のいふ事は、兄の耳に聞えない
やうに、
恐ろしいまじないをかけてやる。

(妖女再びまじないをする。兄妹犬目さめ
る。
オスモオぼんやり舟を漕ぐ。
景移つて湖畔となる。おのづから第二場
に)

第二場 湖畔

オスモオ

(オスモオ呆れる。妖女手早くイロオナの
包みから衣裳をとりだして身につける。
犬ほえる。
此の場面せり上げ或はドンデン返し。
おのづから次ぎの場面に移る)

第三場 湖底

音楽が始まる。悲憤をきはめる。
水草の漂ふ中を、イロオナ下へさ沈
んでゆく。
水草に髪がからまる。みだれる。
やがて下から奇異な宮殿がせり上る。
その階にイロオナは落ちてきて倒れる。
柔かな音楽にかはる。
湖の底の國の老王と王子が出てくる。
イロオナを見てびつくり。介抱。蘇生。

イロオナ

あ、私は……まあ、こゝはどこで
う？

私いつきましたの？

老 王

こゝは湖の底の國だ。お前は人間の國

イロオナ、さあついた。仕度おし。

イロオナ

え、なんどか云つて？ 兄さん。

オスモオ

そら、あれがお城だ早く仕度おしよ。

イロオナ

聞えなくてよ。もつと大きな聲して。

妖 女

よく聞えるぢやないか。お前にね。

此の水の中にとびこめて云ふんだよ。

イロオナ

そ、そんなことがあるのですか。

オスモオ

おい、何を泣くんだ。舟はちきつくよ。

妖 女

早くとびこんでおしまひど。

イロオナ

兄さん。あなた、そんなことで。

私をこゝへつれてきたの？ 私、なに

悪いことをしたでせう。なせ、兄さん
に憎まれたりしたんでせう……。

オスモオ

分らない奴だなあ。泣く奴があるか。
一体お前、一人で何をしやべつてるん
だ。

妖 女

王子のお嫁になんぞなるものかつて、

オスモオ

なにを今さら、こんなところで。

イロオナ

あ、その權をふり上げて、兄さん、
ほんとに私を殺す氣なの？

妖 女

さあ早く舟からとんでおしまひ、
ぐづぐづしてると、ぶち殺されるよ。

イロオナ

あゝ私、生きてゐても仕方がない。

(イロオナ身をなごらして水に入る)

オスモオ

おゝ妹、さうしたんだ。ば、ばかな。

妖 女

さあ私が代つて花嫁になる。

からおりてきた。わしは王だ。これは俵だ。

イロオナ

湖の底……湖の底。

(此の模様にてドンテン返し、前の場に戻る)

第四場 湖畔

音楽止む。

濱邊に王子が家來多勢を従へて立つてゐる。

妖女がイロオナに化けて跪づいてゐる。

オスモオがぶるぶるふるふるしてゐる。

オスモオ

王子さま、こゝ、これは妹ではございませぬ。

魔、魔女がば、ばけて……。

妖女

王子さま、王子さま、兄は妹の出世が美しいので、うそばつかりを。

オスモオ

い、妹はこいつのために……。

王子

え、やかましい。おいオスモオを引くくれ。

家來

長りました。

王子

蛇の牢屋に叩きこむんだ。もし罪があるのなら

こやつを蛇が食つてしまふ。無實なら安全だ。

蛇に任せろ。え、引つ立て、ゆけ。

オスモオ

あゝイロオナ、イロオナ……

(オスモオ引立立てられゆく。)

妖女跪づき王子の手に接吻する。)

幕

第三幕

第一場 湖底

湖の底の王宮に月の光がさしこんでゐる。老いたる王と若い王子とが出てくる。

老王

あの娘を見た者は、誰でも氣に入るだらう。

お前がそれほさまで望むのも無理はない。

わしもあれを嫁と云ひたい日を願つてゐる。

然しまだその時機はこない。娘の心は水の上の國の兄を思つてゐる。

王子

イロオナが水の上の國に歸るなら

私もこゝに残つてゐたくはありません。

老王

とにかくこゝにおりてきたものだから結局は我々の望みさほりになるだらう。

あせらずに待つがよい。そんな優しい娘でも

無理を云はれると鬼のやうに荒くなるものだ。

王子

私は今夜さうもあれを上によりたくありませぬ。

再びこゝに歸つてこない氣がしますから。

老王

なあに、あのシユエツタアの魔法にさうして勝てるものか。さあ、もう時刻だ。

さつきから楽しみにしてゐる。イロオナや

イロオナや、おいで。

(イロオナ見るから清々しき姿にて出づ。)

老王はイロオナの髪をなで、愛撫する。)

老王

お前の兄のオスモオは蛇の牢屋につながられてる。

魔女はお前の姿に化けて城にゐる。

兄を救ふのも、魔女に勝つのも六つかしい。

然したつての願ひだから、今夜から三晩だけ水の上に浮びあがるのを許してあげる。

思ひさほりのことをしてみるがよい。

けれど夜が明けたらこゝに戻つてくるのだ。

晝間はゆくことはできない。明日の晩

あさつての晩と出直すのだ。分つたね。

イロオナ

よく分りました。有難ございます。

王子

云ひつけたものを持つておいで。

(王子の言葉で、侍童數名、衣裳と裝飾品もちてくる。)

王子

イロオナ、私のせめての心づくしだ。この着物に着かへて、身を飾つて行つておくれ。

水の上までの旅はなか／＼遠いさうだから。

イロオナ

私にこんな立派なものを下さるのですか。

老王

せつかく王子が仕度したのだ。

遠慮せずに着かへるがよい。

(イロオナ辭儀をして侍童に手傳はせて着かへる。)

老王

そこで三晩かかつて、もし氣の毒にもお前の望みが叶はなかつたなら、思ひを絶つて

約束さほり、永久に此の水の底の國に住んで

わしの愛するたゞ一人の王子の嫁となり

ゆく／＼は此の國を

ついでもらひたい。

その約束も承知したね。

イロオナ

承知いたしてをります。では王様、王子様。

これから行つてまゐります。

行つておいで。氣をつけて。

王子

私は此の段のところで、お前の歸るの

を一晩もせず待つてゐよう。

(美しい音楽になる。)

イロオナは老王と王子に別れを告げる。イロオナの足に長い銀の鎖がつけられそのはしは段の所に結ばれる。長い長い鎖宮殿はせり下げて、やがて見えなくなるとイロオナは上へ上へ音楽につれて舞ふ如く、泳ぐ如く、勇んでのぼつてゆく。

水草が流れる。照明が變化する。

場面はせり下げ或は他の方法にて次ぎへ。

第二場 湖畔

第二幕第二場の湖畔。空に月や星が輝く。城の塔の窓に灯が見える。山々森々萬物は眠つてゐる。

汀に前の場の舟がある。

銀の鎖のもつれあふ音ひびく。美しくひびく。

やがて小舟のそばにイロオナ浮びあがる。小舟からピルカとびだし、喜び迎へる。

イロオナ

おゝピルカ、おゝピルカ。

(イロオナ、ピルカを抱きしめる。)

音楽の旋律は更に更に美しくなつてゆく。

イロオナ

ねえピルカ、後生だから働いて頂戴。私はたつた三晩よりこゝにくるここがでない。

三晩の中に何もかもして、兄さんを助けて王子さまの所にゆかなければならぬいから。

さ、此のきれを口に咬へてお城にゆくよ。

門番に見つからないやうに門をくゞつて王子さまのお室に入つて、分つてね。

お枕の下に、そつと、これをおいてくるのよ。

そして歸りには蛇の牢屋に行つて、オスモオ兄さんが、御無事かどうか。

よく見てきて頂戴、私はこゝで待つてゐるから。

よくつて？ 分つて？ さんなに念いでも、

早やすぎることはないのよ。ほんとうにお前ひとりだけがたよりなのよ。

ピルカ。さあ、走つて行つて。待つてゐてよ。

(ピルカ縫ひざりしたきれを咬へて走り去る。

月の光キラキラと水に映する、夜は更けてる。

イロオナ立ったり座つたり氣をもむ。

やがて思ひにたえかかれて舞ひを舞ふ。白い花が、ごこからかちつてくる。

そこへピルカが勇んで走つてくる。)

イロオナ

おゝピルカ、兄さんは御無事かえ……あゝよかつた、あゝうれしい、そして王子さまのお枕もどに？ あゝさう……なんてお前はお利口でせう。え、なにに？

なんのこゝと、それは？ 分りました。

魔女が私に化けて、王子さまのおそばに？

いゝのよ。いゝのよ。きつと仇をとるから。

(一晩を告げる鐘がひびく。星が一つ流れ

イロオナ

あゝ鐘が鳴つた。もう夜があける。

水の底に歸る時がきました。

(鐘ひびく。音楽やむ。イロオナ打ちしほれる。)

イロオナ

ピルカ、忘れずに明日の晩もこゝにのてね。

力になつてくれるわね。あとたつた二晩よ。

もしそれで、私の望みが叶はなかつたら。

あゝさうしたらさうしよう。

いゝえ、そんなこゝとがあらはしないわ。(城の塔の窓の灯が一つづつ消える。)

イロオナ

さよなら。ピルカ。私は水の底に歸ります。

明日の晩また會ひませうね。さようなら。

(イロオナは水中に沈む。)

銀の鎖の音が、いつまでもひびく。

大は舟の輪に立ち下を見こむ。

大の目から大きな涙がポロリと落ちる。

やがて舞臺は一面暗くなる。

すぐ一ヶ所だけポーツと明るくなる。

その光が擴大して明るくなると、自然に次へ。

第三場 城中 王子の寢室

不思議な形の窓のある室。

その窓にさしこむ日光で明るくなつたのである。

王子と、イロオナに化けた妖女が眠つてゐる。

王子の枕許に例のきれがある。二人目をさます。

王子

おゝ銀の鎖のもつれあふ音が長い間きこえた。

ふしぎなひゞきだ。何だつたらう。

妖女

なにがなんですつて？ 夢にうなされ

たのね。

王子

や、誰がこんな物を置いてつたのだ。

妖女

誰がなにを持つてきたのですよ。

王子

すばらしい美しさだ。輝くやうだ。

妖女

あゝそれは私がゆふべこしらへたんです。

だつて私のほかに誰が此の室に……あなたも寝てる間にできたのですよ。

王子

いや、さうぢやない。誰かゝわざわざ私の爲に。

(戸をたたく音。)

王子

よし、入つてこい。(家來入つてくる。)

家來

蛇の牢屋におしこめておきましたオス

モオは今日もまだ無事に生きてをりま
す。

王子

なに、まだ生きてゐると？ それなら

……

家来

恐れながら無實の罪が分りましたと存
じます。

妖女

いゝえ、いゝえ、あいつは悪い奴だ。

(王子考へこむ。きれをじつと見こむ。)

幕

第四幕

第一場 仙人の洞穴

序幕第二場に出た老いた仙八の住居。

中央に神聖な火が燃えてゐる。

仙人と王子が相對してゐる。

王子

それですつかり様子が分りました。

一昨日の晩といひ昨夜といひ枕もとに

あんな品物を届けてくれたのは、たし
かに

たゞ者のすることではないと思つてゐ
ました。

仙人

なにしろ利口な犬が一匹ゐますのでな。

王子

やつぱりイロオナだ。イロオナがくれ
たのだ。

然し湖の底の王が手離すまいとして
のですね。

仙人

それもこちらの力一つで奪ひ返せます。

王子

なめに少しばかりの、ろひは恐れはし
ない。

とにかく鍛冶屋に行つて、大至急に

その大きな鉄と長い鎖を作らせませう。

今夜は必らずイロオナを助けてみせる

仙人

そこで氣の毒なオスモオも早速に

蛇の牢屋から出しておやりなさるがい
い。

王子

出してやります。可哀さうなことをし
ました。

仙人

魔女のシユエツタアは、手だてを廻ら
して

大丈夫退治しますから御安心なさい。

王子

萬事おたのみします。學者は國の寶だ。
なんどお禮を云つていゝか分りませ
ん。かういふ中もぐづぐづしてゐられませ
ん。

ではごめんなさい。

(王子立去る。仙人無言に火をかきたてる。)

幕

第二場 湖畔

第三幕第二場ごぼりの場面。夜。曇つてゐ

る。

王子来る。犬うれしげにこびまはる。

王子

命にかけてもイロオナを助けてやらう。
勝負はこつちのものだ。あの仙人から
すつかり術を教はつたのだ。

(銀の鎖の音きこゆ。物凄き音楽はじまる)

王子

あの音だ。水の中からきたのにちがひ
ない。

(王子舟の中に忍ぶ。犬は軸に立つ。

水煙が立つ。イロオナ水中より出る。

王子俄然立上り、大きな鐵の輪を投げる。

イロオナ輪の中に入る、ガバミ伏す。

王子いきなり大きな鉄で、銀の鎖を切る。

すさまじき音して鎖は沈む。水煙烈しい。

王子鉄をすて、イロオナを抱かうとする。

イロオナの姿水中に没す、と見るまに

王子の手に一匹の魚が残る。)

王子

あゝ魚になつた。

(王子魚をぬいて魚を刺す。

水は荒れて舟はゆれ、犬は舟の中をかけま

はる。

刺された魚は鳥に化して飛ぶ。)

王子

鳥になつた。よしきた。

(鳥を追ふ。トッ一太刀鳥に浴せる。

鳥は地に落ちてトカゲとなる)

王子

今度はトカゲか。逃すものか。

(やつこのこゝでトカゲをつかまへて刺す。

トカゲは刺されて蛟となる)

王子

ウムヌ、蛟に化けたな。

(以上、眞に悪戦苦闘。水中、舟中、地上を

活躍。

風すさまじく、音楽も幾度か變化する。

ト、蛟を押しつぶす。第三幕第一場のイ

ロオナ。)

王子

おゝイロオナか。

イロオナ

王子さま。

(二人は相抱いてキッスして、ころげまはる。)

王子

あゝお前だつた、お前だつた。

美しいイロオナ。繪のごぼりのイロオ

ナ。

イロオナ

どうく王子さまのところにもありま

してよ。

(オスモオが走つてくる)

イロオナ

まあ兄さん。

オスモオ

妹……。

(兄妹相抱く。犬喜ぶ。またんに陣鐘太鼓

の音)

王子

な、なんだ。あの音は。

オスモオ

仙人の計略で、どうく魔女を捕まへ
ました。

王子

ウム、恨み重なるシユエツタアだ。

幕

第三場 刑場

陣鐘太鼓でつなぐ。暮あく。
奇異な小屋が焼打にあつてゐる。
そのまはりを老若男女が歌ひ踊つてまは
る。

群 衆

シユエツタア死んだ

魔法婆くたばつた

焼かれて死んだ

煮られてくたばつた

(妖女の聲、小屋の中より聞ゆ)

妖 女

うーん、熱い、熱い、こゝをあけろ

あけないか、熱い、熱い。

(小屋がゆれる。小屋の下から幾本かの足

が出る。

小屋の屋根、壁から幾本かの腕が出る。

腕も足もユテ蛸の足の如くである。

小屋の壁に巨大な目、舌、齒が時どき

影繪のやうに現はれる。もがいてる。

引きかへて滑稽味たくさんの歌と踊)

群 衆

シユエツタア死んだ

魔法婆くたばつた

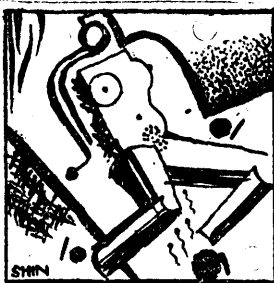
焼かれて死んだ

煮られてくたばつた

幕

作者附記

これは原童話をきかめて自由に脚色した
ので、筋もすつと簡単にしました。なほ
人形芝居は、私はこれが處女作でありま
す。(昭和二年一月)



殴られ同志

—フェレンク・モルナー—

鈴木善太郎 譯

ブダペストの町の中。日和のいい秋の晝過ぎ、二時頃。ユ
ーレスとアルフレッドは學校の戻り道で、腕の下に本を抱へ
てゐる。二人とも丁度十七歳位。

ユーレス 君はもう十分間も黙つてゐるね。

アルフレッド うん。

ユーレス 何處か悪いのかい？

アルフレッド 何處も悪かアないよ。

ユーレス 君は今日一んちふさいでゐたね。

アルフレッド うん……僕ふさいでゐたよ。

ユーレス なせ？

アルフレッド なせつて、あの女はほんたうに嘘つきだ
からさ。

(間)

ユーレス 女つてヴァイルマさんの事かい？
アルフレッド 無論さ……ヴァイルマさ。だつてそれに極
つてゐるぢやないか。

(又間)

ユーレス ヴァイルマさんが何かしたのかい？

アルフレッド 別に何もしやしないけれど。あいつは薄
情さ。只それ丈けさ。女つてみんなそんなもんだね。

ユーレス 一體どうしたんだい？

アルフレッド あのマルゲリツテ島の水道の貯水池ね。

君知つてゐる？

ユーレス うん。

アルフレッド 夕方になると、あすこでいろんな男と女
が逢ひまきをするんだよ。僕もあいつとあすこで逢ひ
逢ひしてゐたんだ。

ユーレス 貯水池で?

アルフレッド うん、いつも夕方の六時になるさね。あいつは音楽の先生んどこへ行く振りをする、それから僕は図書館に行く振りをする、そして戀人同志が誰でもするやうに、貯水池で逢つて、それから森の中へ行きくしたんだよ。只僕達のは清浄な戀だつたんだよ。僕は逢ぎキッスをした事もなかつたからね。でもあいつが誰かに見附かりやしないか、ビクビクしてゐたんだもの。さうさ、僕は只手を取つて、それから二人で一緒に歩いて、それから先きくの事を話し合つた丈けさ。二人が結婚した時の事だの、そんな風ないろんな事だのをさ。それからある時は、二人であいつの音楽の先生の事で喧嘩をしたのさ。僕は少しその先生の事を嫉いてゐたんだよ。ウイルマにも少し嫉かせてやらうとしたけれど、あいつちつとも嫉く様子はなかつた。あいつ柄巧過ぎらア。でもあいつは僕を愛してゐたんだよ……。

ユーレス うん、そしてこんな事が起つたんだい?

アルフレッド まあお待ちよ……そんな風に二人でいつも貯水池で逢ひつきをしてゐただけさ、その中にいつかあいつのお母さんが手紙を横取りしちやつたん

だ。これは僕の過ちなんだよ。貯水池の事は手紙の中に絶対に書かなければよかつたんだ。『いつもの場所』とさへ書けばわかるんだからね。それにへまをやつて『貯水池』と書いて了つたらう。い、かい、その手紙をあいつのお母さんが横取りしちやつたんだよ。でもウイルマには手紙を見た事を隠してゐたんだよ。そして次ぎの日のお晝過ぎに、あいつが新しいリボンを重ね蝶々にして髪に結んでゐるのを、あいつのお母さんが見てゐたんだよ。それからウイルマが『音楽のお稽古に』つて云ふのを、眞に受ける風を見せて、知らん顔をして出してやつたのさ。然しあいつの後を附けて来たんだからね。さうだい、君。

ユーレス フム!

アルフレッド 厭になるぢやないか、君。僕が涼しい顔をして貯水池の前に居ると、そこへウイルマがやつて来た。『来たね!』『来たわよ!』と云つたやうな事を云ひ合つて、それから腕を組み合つて森の方へやつて行つたんだ。僕はあいつが僕を愛してゐるかさうか、聞いてやつた。あいつは愛してゐるに極つてゐるつて云つた。それから僕があいつにしんから愛してゐるかさうか、聞いていたら、あいつは『しんから』つて云つ

たよ。『僕君が好きだよ』つて僕は云つた。そしたらあいつは『わたしそれ以上よ』つて云つた。『僕は誰にも負けない程君が好きなんだ』つて僕は又云つた。そこへ丁度あいつのお母さんがまるで牡牛のやうに飛び出して来たんだよ。

ユーレス 君は變な事を云ふね、牡牛のやうにだなんて。アルフレッド 牡の牡牛のやうにさ。あいつのお母さんは飛び出して来ると、いきなり僕達の前に神輿を据えたんだよ。僕は逃げ出したくなつたけれど、でもウイルマをその騒ぎの中に一人残す事は出来なかつた……でもあいつのお母さんは僕達二人を睨み附けて、眼の前に棒立になつてゐたからね。僕には何とも云やアしなかつた。云ふ事が出来なかつたんだらう、僕の顔を知らなかつたから。その代りウイルマをムツと引綱んで吐鳴り立てたよ。『さうかい、これが音楽のお稽古かい! さうかい、これだから新しいリボンを髪に着けたのかい!』なんて云つてね。可哀さうに、ウイルマは一言も返事が出来なかつたよ。あいつは只慄へて突立つて居たつて。處で今度はあのおふくろの荒れれ牡牛が出し抜けに手を振り上げて、僕が止めるひまもない間に、ウイルマの顔をビシヤリとやつたんだよ……

随分ひさく殴つたんだよ。

ユーレス 顔を?

アルフレッド 右の頬をさ! それから僕が呆氣に取られてゐる間に、ウイルマをすんすん引摺つて行つて了つたんだ。僕は二人の後姿を見詰めて突立つてゐた。随分厭な氣がしたよ。逆も話の外さ。然し僕はこれ以上で以上でウイルマが可愛くなつたよ。でも僕の居る前であんな風に顔を殴られて、あいつががんなに氣まづい思ひをしたか知れないつて事、僕にはわかつてゐたからね。それから僕はうちへ歸つて来たのさ。

ユーレス それでお仕舞かい?

アルフレッド 話はまだあるんだよ。もつと情ない事を書いて、木曜日に貯水池で又逢はうつて云つてやつたんだ。その日逢ふにはもう今までのやうな心配は入らないと思つたからだよ。なせつて、あんな出来事があつた後では、あいつのお母さんにした處で、あいつが二度と僕に逢はうなんて、一寸考へられない事だらうからね。

ユーレス วิลマさんは来たかい?

アルフレッド 来たとも。あいつは心臓が破けやしない

かと思ふ位泣いたよ。極り悪いからだつて事は、僕にもわかつてゐたよ。あいつは幾度も繰り返して云つたんだ。『あなたの前であんな目に逢つて！うちでならそんなに打たれようよ、この半分も何とも思やしないわ』つてね。僕は何か云つてあいつを慰める事は出来なかつた。ヴァイルマはひさく氣位の高い女だからね。あいつは一寸しか居ないで、すぐに歸つちやつた。それから僕はうちへ歸る途中で、いゝ考が浮んで来たんだよ。

ユイレ ス いゝ考つて何だい？

アルフレッド あいつは僕の爲であんな目に逢つたんだらう。だから僕さうしてあいつの氣嫌を取らうかつて事を考へたんだ。

ユイレ ス 何だつて？

アルフレッド 僕があゝのへまな手紙を書きさへしなかつたら、あいつのお母さんは僕の居る前であいつを殴りやしなかつた筈だらう。ね、いゝかい、あいつの氣嫌を取るには、只あいつの居る前で、うちのお父さんに僕が殴られるより外はないんだよ。わかるだらう？

ユイレ ス わからないよ。

アルフレッド わかり切つた事ぢやないか。僕は無名の

手紙をわかないやうな手でうちのお父さんに宛て、書いたんだよ、『拜啓。御令息は毎日六時にマルゲリツト島の貯水池である娘に逢つてゐます。もし嘘と思召さば。そこへお出向の上御令息を御覽下さい。然して不良少年に相當する程度に、御令息の耳を打つておやんなさい。』それから差出人の名は『ある友より』としてね。

ユイレ ス その手紙をお父さんにやつたのかい？

アルフレッド やつたともさ。この手紙で不良少年の耳を打つ事は、是非必要だつて事をあてつけた積りなんだがね。僕はうちのお父さんの事をよく知り抜いてゐるよ。だから、お父さんが僕を掴へたにしろ、お父さんらしい殴り方をする事は、大抵僕にはわかつてゐたんだ。然しヴァイルマへ殴られたんだから、僕は是非とも殴られるようにして置かなければならなかつたんだよ。あいつは女らしくあいつのお母さんに一度殴られる。僕は男らしくうちのお父さんに一度殴られる。そこであいつはもう極り悪い思ひをしなくとも済む事になる。かうするのが俠氣といふものなんぢやないか。

ユイレ ス そりやアさうだよ。

アルフレッド 男ならやれない事はない筈だ。

ユイレ ス さうとも。

アルフレッド 僕はこの手紙を出したよ。それからうちのお父さんが、それを受取つた事を顔附で知る事が出来たんだ。これで先づ安心さ。お父さんは晝過ぎはすつと僕から眼を離さなかつた。そして六時十五分前に僕が出掛けようとする時、お父さんは何處へ行くつて訊くんだ。僕は『圖書館に』つて云つてやつた。それから僕がうちを出ると、案の定お父さんが後をつけて来た。町の同じ側を、後ろに物の一丁ばかりの間隔を置いてね。僕は嬉しかつたよ。貯水池に着いて、僕は待つてゐた。お父さんは向側からやつて来て、森の中に姿を隠した。僕はお父さんを見附けない振りをしてゐた。彼れはれ五分ばかり経つと、ヴァイルマがやつて来た。『来たね！』来たわよ！』つて云ふやうな事を云ひ合つた『さう思ふ？』……『あなたわたしたしを愛して下すつて？』……『僕君を愛してゐるよ』……僕はあいつの手を取つて、森の方へ連れ出した。森まで行くとおやぢが僕に掴み掛つて来た。『こら、これが圖書館か。この悪たれ小僧奴が！』お父さんは素的な名ゼリフを僕に浴びせて、まだ云ひ終らない中に——僕が計畫して置いた通り、そつくりその儘だ——被げた手で素的

な音のする一撃を僕の横つ面に喰はせたんだ。『さア来い！』とお父さんは唸つた。それから僕を引張つて行つた。それでも歸り掛けに、お父さんはヴァイルマに向つて丁寧な帽子を取つた。全く禮儀正しい幕だつた。だから僕はお父さんを尊敬してゐるんだよ。

ユイレ ス うん。それはさうだよ。

アルフレッド 次の日。僕は又ヴァイルマに逢つた。君はあいつがさうしたと思ふね？ あいつ僕を笑つたんだよ。

ユイレ ス 笑つたつて？

アルフレッド 笑つたよ！……あいはお父さんが僕を殴つた時の僕の顔附つたら、これまで逢つて見た事がない程素的にをさけてゐたよ云つた。そして又思ひ出したやうに笑ひ出すんだ。……だから僕は始めから仕舞まで自分で立てた計畫だつて事を話して聞かせたんだ。僕は手紙の寫しまであいつに見せた。そしてあいつに極り悪い思ひをさせたその償ひとして、あいつの氣嫌を取る爲めに、僕が自分でも本當に極りの悪い思ひをした事だの、それからお父さんに僕が殴られた處で別に笑ふに當らない事だのを説明して聞かせた。けれどあいつは只馬鹿のやうに笑ひこけるばかりだつた。僕

がそれを咎めると、あいつはかう云ふんだ。『だつて仕方がないわ。あなたがお父さんに殴られた處を見てから、もうあなたの事がをかしくなつたんですもの』だつて。

ユーレス あの女そんな事を云つたのかい？

アルフレッド 君は嘘だと思ふのかい？……本當の話なんだよ……僕は顔が段々赤くなつて来るやうな氣がした。もう何も云へなかつた。あいつは僕が極り悪がつてゐるのを見ると、少しは僕を氣の毒がつて呉れた。あいつかう云つたつけ。『ねえ、あなた、あなたがお父さんに殴られた時は、随分をかしかつたわよ。わたしこれまで通りあなたの事を思つてゐたいと思つても、一生懸命になる丈け無駄なのよ。わたしもう厭だわ。わたしすつかりあなたに氣がなくなつて了つたんですもの。』そしてあいつは又候くすく笑ひ出したんだ。僕は其の儘別れて来たよ。今でもまだあいつの笑ひ聲が耳に残つてゐるやうな氣がするよ。

ユーレス それでもうお仕舞かい？

アルフレッド お仕舞さ。

(間)

ユーレス あの女の事なんか、そんなに氣にしないがい

いよ。あいつは浮氣者だから。アルフレッド 世間の奴はみんなあんなものなんだよ……ねえ、倅氣を出した丈け馬鹿を見たんぢやないか。好き好んで人に顔を殴らせて置いて、そして人から只笑はれる丈けなんだ。

ユーレス 君はそんな犠牲を拂へば、あの女が今まで以上に君を愛するとも考へてゐたんだね？

アルフレッド うん、それがしくじつたんだよ。あいつがあのお母さんのお母さんに殴られてから、僕は以前よりも一層あいつを愛したし、それに又一層尊敬してゐたんだ。それにあいつは——あいつは——本當に譯がわからないよ？ 僕はちつとも譯がわからないよ。ユーレス 僕にもわからないね。

(二人は陰氣に頭を振りながら歩いてゐる)

闇の中に

(二幕)

豊岡佐一郎

登場人物

- 青年の母
- 刑事 甲
- 刑事 乙
- 情人 男
- 情人 女
- 辻占賣の娘
- その他影の如き人物

舞臺

ある公園の一隅。樹々の繁みの中に薄暗い電燈一個。二脚のベンチ。遠くからサーカスのバンドらしい音楽

が斷續して流れて来る。時々トロンボンの高い調子が突拍子もなく闇をつんざく。

闇の中を朧ろげな影が浮び上つては消えて行く。

暫く舞臺空虛。

情人らしい男女より添つて、あたりに氣を配りながらそれでも嬉れし氣に語り合ひながら(聲は聞えないが)通りすぎる。と怪しげな男がその後をつけて行く。またその後を追つて二人の刑事出る。

刑事甲 さうもあの男あやしい。

刑事乙 全くあやしい奴だ。

刑事甲 僕は奴をつけて、若し仕事をしやがつたら、此處まで追つて来るから、君は此處で待つてゐてくれ給へ。

刑事乙 よし。

(刑事甲は後を追つて入る。乙は樹木の繁みに身を没す。)

一人の青年——眼が異常に鋭く、しかし顔のどこかにたるみのある、云はゞ凄さの中に善良さの見える容貌帽子をかむらす、もや／＼した頭髪が額までおほひかぶさつてゐる。ステッキをつく。頭の中で何かイリュージョンを描いてゐる様に、絶えず無意識に唇を動かして何かをさゝやいてゐる。

ベンチを見て一寸腰を下したが落着かぬ様にすぐ立ち上る。歩き廻る。

突然立ち止つて前方を凝視する。

青年……(うめく様に)さうしてもあいつを殺して了はなければいけない……(決然と)さうだ、あいつを殺して了んだ……(ニタリと笑ふ、がすぐ消える)が、まてよ。さうしては餘り結末をいそぎすぎる。それだけの意志をもつて殺人行爲を執行する事になるか……其處が問題だ……まて、まて、いそいぢやいかん。(やゝ急速に歩き廻る)

(辻占賣の小娘提灯をさげて出る。青年を見て側へ寄る)

辻占賣 (細い聲) 辻占を一つ買うとくれやす。

辻占賣 (びつくりして立ち止る)

青年 一つくれ。

辻占賣 (無言のまま一枚差し出す)

青年 (金を渡してそれをひつたくる)

辻占賣 (氣味が悪くなつて、逃げ去る)

青年 辻占……辻占……こりや面白い。殺人と意志、暗示によつて決定された意志。こりやいゝ。(勿體ぶつた様子で) 神聖なる暗示を待つ嚴肅な一瞬……(辻占を開いて讀む) 此縁談は末は目出度く——今の場合縁談なき地上の問題ではない。……迷ひは失敗のモミ。思ひ立つた事は速に取行ふがよし——意志の確立、殺人行爲の實現、よし、これできまつた。

(と行きかける。突然闇の中から怪しい女現はれ、青年の袂をこらへる。)

怪しい女 ちよいと……

青年 (無言。ふりかへる)

怪しい女 ね、あなた、お一人でせう？ ね、あたしをおつれにして下さいな。いゝでせう。

青年 (無言のまま凝視)

怪しい女 (手を取りかけて) さあ、もつと奥の方へ行きませう。

青年 (凝視を續けてゐたが、やがてニヤリと笑つてい

青年 (氣づかず)

辻占賣 (ついて廻つて) 辻占を買うとくれやす。

青年 (立ち止る。無言)

辻占賣 (辻占を差し出して) 旦那はん、一つ買うとくれやす。

青年 旦那はん？ パ、パ、パ、こりやおかしい。ハ、……、そりや何だ？

辻占賣 辻占です。

青年 辻占？ 自己意識に辻占。餘りに滑稽だ。いらない。(と歩く)

辻占賣 (後を追つて) さうぞ。一つだけ買うとくれやす。賣らんと歸ると叱られまつさかい。

青年 叱られる？ 誰にだ？

辻占賣 誰ツて……お母はんに——

青年 馬鹿！ 生意氣にうそをつくな。

辻占賣 うそやおまへん。

青年 お前に母親があると云ふのか。うそをつけ。母親のある子はお前の様な眼の色はしてゐないぞ。行け、行け。

辻占賣 (あきらめて) ……辻占。瓢箪山の辻占。待人、縁談、戀の辻占……(行きかける)

青年 待て！

よく／＼ラスコリニコフだな。それにしても此ソーニヤの出現は少し早すぎる。いや、早い事はない、この方が新らしくて面白い。運命の逆轉、意志の變動、事件がまた新らしいコースを取つて進うとしてゐる。

怪しい女 一人で何を云つてらつしやるの？

青年 外國の小説の話さ。

怪しい女 それがさうしたの？

青年 (ベンチを指して) まあお掛けよ。(二人かける) 君はね、此處に一人の青年があつて、その男が丁度こんな風に一人の女に逢つて、いろ／＼話してゐる中にその女にすつかり惚れ込んで了つた擧句、秘密にしてゐる自分の犯罪を打明けたとするよ、その時、若し君なら、その男に對して、さう云ふ態度を取るね。

怪しい女 さう云ふ態度ツて、そりや男によるわよ。

青年 ちやまあかりに、君がその男の心情に同情し、やがてそれが戀心に變つて行つたとするさうだね？

怪しい女 (調子が變る) お前さん、随分野暮だね。得心づくで乗つたらば、早手にあへば覆り、死ぬば元より覺悟の前。ツてのはたしか三千歳にあるぢやないの。

青年 (いさゝか面喰つて) そりや何だね？

怪しい女 兇狀持の男に惚れ込んだ女のセリフさ。ちよいと煙草をめぐんでおくんない。

(青年袂から敷島の袋とマツチを出して渡す。女、火をつけて一本は青年に渡し一本は自らすひ、袋をかへす)

青年 君はさうも東の女らしいね。

怪しい女 これでも江戸ッ兒の端さ。

青年 つまりこつちへ流れ込んで来たわけだね。

怪しい女 (苦笑) まあさう云ふわけですえうね。

青年 こりやいよく面白くなつて来た。

怪しい女 何が面白いのよ。一人で嬉れしがつてさ。

青年 (ベンチを離れ、ぶらつき)……辻占賣の小娘、漂泊の女……運命と云ふものゝ偶然性と必然性——(女の側へかけて)ね、君、君がさうやつて東から西へ流れて来た、その君の人生の行路を話してくれるわけに行かないかね。

怪しい女 人生の行路? (フキ出して)話も何もありません、たゞ木の葉が水に押し流されて行く様なものさ、さうせあたしなんかの力ぢや、さうしようつてさうなる世の中ぢやなし、またさう渡らうつたつて、渡してくれるものでもありませんからね。

青年 さう手輕に自分を見限つて了つてはいけませんよ。

そいつが一番救はれない。人生に希望が持てなければせめて悲しきでも持つがい、それも持てなければ呪

して救はれなければいけない。

怪しい女 (荒つぱく)救はれるなんて眞ッ平でさ。自分勝手でする苦勞、いらぬおせつかいはこつちから御免蒙りますよ。それともそんなお目出度い男があるのなら面が見てやりたいね。そんな男は、牧師さんの様な顔をして、乾度かう云ふでせう。俺は自分の潔い魂を犠牲にして、お前の汚れた身體を救つてやりたいつてね、フン、時代なせりふさ。

青年 意氣壯なりだね。いや、それだけの反撥力があり

や君の人生にもまだく望みがある。また妙な事をきく様だが、さつきの話の續きだがね、いつたんこれと思ふ男、その男がたとへ犯罪者であつても、君はその男の罪を半分背負つてもいい位に思つてゐるんだね。でだ、君が若し今さう云ふ男に、まあ不思議なめぐり合せで、逢つたとするんだね、と、君のその男を思ふ心持は可成純なつきつめた性質のものだらうね。

怪しい女 いろんな事をきいたがる人ね。まだそれ程に思ひ込める男に出合つた事もないが、大方小娘の時の様な氣持がぐつと胸先へつき上つて来るでせうよ。(苦笑) なまなかそんなうぶらしい氣がぬけないから、いつまでたつても苦勞がやまないんです。さうせ男なんて頼みになるものぢやないと見切りをつけて了へばい

ひでもいゝ。諦めと云ふ奴が一番いけない。

怪しい女 そりやあたしにだつて、まだ望みもあれば、悲しみもあります。だけ口に出しや愚痴になるから諦らめた顔をしてゐるのさ。

青年 さうだらうな。いろんな云ひつくせない苦勞が君をさうさせて了つたのだね。併しなんだらうね。さうせ君のして来た苦勞と云や、男との苦勞だらうが、君は今でも、男と云ふものに對して何らかの望みをかけてゐるかね。それとも男と云ふものに復讐する様な心持で男に接してゐるんぢやないかね。

怪しい女 男に羨湯を吞まされるやうな事になるのも、こつちが頼馬だからの事で、復讐の何のツて、そんな

意地も持つちやあませんよ。

青年 ぢや、君は男に對して全々希望を失つてゐると云ふわけぢやないんだね。

怪しい女 惚れた男が出来りや、また苦勞の色揚げでさ、ホ、ホ、。

青年 ウム、ハ、(黙想) ベンチを離れて)それぢや君、君は求めるものによつて苦勞を永久に續けて行く事になるぢやないか。

怪しい女 まあさうですね。

青年 そりやいけない、そりやいけない! 君は何どか

ゝんでせうが、あたしにやそれが出来ないんですね。

(しみりと)いつか頼みになる男が出て来てくれる様な氣がするんですよ。ね、女ツてものは、たつた一人の自分の男をめぐつてのが一生涯の仕事で、それまでは何をしたつていゝんぢやないんでせうか。あんなさう思はない?

青年 一生涯の仕事だと思つてゐて間違はないだらう。

併しそれまで何をしたつていゝとは云へない。現に、君は現在の生活を粗末に取扱ひすぎやしないか。なるだけ立派な自分をその男に與へる爲めに、君はもつと自分を大事にする必要はないかね。

怪しい女 (突然ヒステリカルに)ぢやあたしにさうしろさ云ふの。さうすればいゝと云ふの。(抑へて)いえ、あなたの云ひたい事はあたしにだつてちやんごわかつてゐるわよ。だつてそれが出来なきやししかたがないぢやないの。あたしにや今かうやつて生きてゐるだけの力しかないのよ。それがさうしていけない。さうしていけない? (熱して涙まじりで)さあ、悪いんだつたらさうともして下さい。……さうともして下さい……

(詰める)

青年 (うなだれたるまゝ無言)

(間)

怪しい女 (勝ち誇つて) それ、御覽よ。あんななか、何が出来るもんか。(皮肉に) ホラ、ホラ、あんなの顔も救つてやらうと云ひたさうにしてるわよ。眞ッ平よ。(立ちよつて、叮嚀に) 御散歩のお供なら喜んでさせて頂きます。

青年 (沈吟、獨語) …… 勿論僕にはそんな力はない。いや僕だけぢやない。誰にだつてそんな力はない。たゞ悟らせる事が出来るだけだ。君は人に救はれると思ふから腹が立つのだ。僕はなんだか君を惜む心持がするんだ。さうしろと云ふんぢやない。君の思ふ通りしてゐていゝさ。たゞ自分で自分を救ふ機会を掴む事を忘れてさへるなればね。

怪しい女 (ベンチに歸つて) そりやね、あたしだつて本當は救はれたいのよ。たゞ救はれるからには心の底から救はれたいの。中途半端な救はれ方をしたくないの……こんな贅澤は口でこそ云つてゐても、フツと物寂しくなつてさうにも自分で自分が支へられなくなるよ。親切らしい男の口前につき寄せられて了ふんです。だけぢや、もどく深い心で結ばれた事ではなし、すぐ双方からボロを出して了つて、さうなると、もう一時でも一緒にゐるのが我慢が出来ないで、こつちから逃げ出すんです。……いつになつたらと、しみとく

考へる事がありますよ。

青年 で、君は今何處にゐるんだい？

怪しい女 何處ツて、人様に云へる様などころぢやありませんよ。

(間)

青年 (突然に) ね、君、僕のところへ来ないか。

怪しい女 えッ？

青年 誤解しちやいけないよ。僕は君をさうする事も出来ない人間だ。たゞ僕はね、なんだか、君と此處でこのまゝわかれて了ひたくない氣持がするんだ。僕は母とたつた二人きりであるんだが、母はそりや氣のいい女だから、ちつとも遠慮する事はないよ。ね、来ない？

怪しい女 (無言)

青年 来たからつて何も我慢していつまでもめてくれと云ふんぢやない。いやになつたら君のすきな時に出て行つてくれよばいんだ。たゞ一日でもいいよ。半日でもいいよ。君と一緒にいろんな事を話して見たいんだ。(間) これで僕も寂しい男なんだ。そりやね、母は僕を世界中の一番尊い物の様に可愛がつてくれてはゐる。併しその愛は時には僕に取つては煩はしいのだ。負擔の様にさへ思はれるのだ。かうやつて出てゐると、母は屹度僕の後を追つて方々探し廻つてゐるだらう。此

頃は妙な一種の脅迫觀念に襲はれて、僕が何處かへ行つて了やしないかと絶へず不安の眼を光らしてゐるのだ。それが僕にはたまらない。ちつとも自由な氣持になれないんだ。それがかうやつて君と話してゐると、この瞬間だけでも自分の心持が解放される様に思はれるんだ。ね、僕のところへ来てくれない？ 決して君の不愉快になる様な事はしないから、ね。

怪しい女 …… ありがたう。さうせ行き處のないあたしなんだから、あなたの御深切をおうけしたいとも思ひますが……まあお心だけを受けて、御厄介になる事は御辭退しませう。

青年 一日でも半日でもいいんだがな。

怪しい女 あたしなんかすぐボロを出して、あんなにあいそをつかされるのが落でせうからね。

青年 そりや僕の方も知れない。さうせ人間ツてものはお互にあいそがつきる代物だよ。併し最初からそれを覺悟してりやいゝぢやないか。

怪しい女 …… まあ綺麗にお別れた方がいゝでせう。さうすりや、あたしの様なものでも、時には懐かしい氣持で思ひ出して下さるでせう。

青年 (間、獨語の様に) 僕を信じちやくれないんだな。

仕方がない。君は東へ行き給へ。僕は西へ行かう。そ

してお互に偶然の運命に恵まれない限り永久に逢はない事になるんだ。……ちや、左様なら…… (行きかけ)

怪しい女 (躊躇) …… あなた……

青年 (ふりかへる)

(間)

怪しい女 (眼を伏せて) …… 矢ッ張りおわかれした方がいゝでせうね……

青年 (無言、凝視)

怪しい女 では、左様なら……

青年 (突然女の肩をつかんで) 行つちやいけない、行つちやいけない！ 頼む、僕と一緒に来てくれ給へ。僕はそのがお互の幸福だを信じる。ね、来てくれるだらう……

怪しい女 (素直に、弱く) え……

(突然、さつき身を忍ばせた刑事乙現はれて二人の中

へ割つて入る)

刑事乙 おい！

(青年、刑事を見て或る驚ろきと疑惑を感じて一步退いて立つ。女は直觀的に刑事の正體を悟り、習慣的の恐れを感じて同様に身を引く。瞬間)

青年 (青ざめて) ちや、君は此女の何だと云ふんだ。

(刑事も女も、此青年の言葉の意外さに何とも答へられないで立つてゐる。)

青年 (女に) 君は僕の眞實な感情をよくも弄んでくれた。女の眞實と虚偽を讀みわけられなかつた俺は何と云ふ馬鹿だ。ハ、、、。

怪しい女 (詰めよつて) あなた――

刑事乙 (青年におい、君は何を云つてるんだ。)

青年 何を云つてる？ 僕の云ふべき事を云つてるまでさ、だから君も君の云ひたい事を早く云へばいゝぢやないか。

刑事乙 君はさつき此處で何か獨り言を云つてゐたね。

青年 そんな事は今の場合の問題ぢやない。まして君には何の關係もない事だ。さあ君の云ふべき事を早く云ひ給へ。

刑事乙 だから聞いてゐるぢやないか。君は甚だ穩かならぬ事を云つてゐたね。

青年 穩かならぬ事？ 僕は僕の眞實を云つたまで、何も君を侮辱する様な事は云はなかつた答だ。

刑事乙 そりや勿論云はなかつた。併しより以上重大な問題だ。(警戒して) 君は、殺人の決意を洩らしてゐたぢやないか。

怪しい女 (微かに) まあ……

(間)

青年 なんだ。そんな事か、ハ、、、。

(哄笑)

刑事乙 (赤くなつて) 笑ひ事ぢやない！ 刑法上の重大問題だ。殺人未遂罪を構成するんだぞ。

青年 (ちつと刑事の風を見上げ見下して) あ、あなたは刑事さんでしたか。

刑事乙 さうだ！ (身構える)

青年 さうでしたか、そりやさうも失禮しました。(女に) 君、赦してくれ給へ。僕は一寸、君の何かと思ひ異ひをして、一瞬でも君を疑つてすまなかつた。(刑事の方を向いて、思はずふき出して) まるでお話のやうだ。

刑事乙 貴様は實に圖々しい奴だな。よし、とに角警察まで来い。

青年 行きますよ、場合によつちや。(ひとりごと) いや

いよ面白くなつて来た。殺人の發意、疑惑、辻占、女、刑事……さうも面白い――。

刑事乙 面白いとは何だ。俺を侮辱しにかゝるとは太い奴だ。とに角警察まで来い。若し反抗するならひつুকつて了ふぞ。

青年 あなた方は、さの人間を見ても反抗するか逃げ出すものだとおぼえて了つてゐらつしやる。またあなたの

方ではひつুকゝるか迫つかけるだけを商賣の様にしてゐらつしやる――

刑事乙 生意氣な事を云ふな。云ひたい事があるなら行く處へ行つて云へ。(女に) さあ、貴様も一緒に来い。

青年 一寸待つて下さい。僕の問題は僕とあなたとで解決をつけねばいゝんだ。此人には何の關係もない事です。(女に) まあそこへ掛けて待つてゐてくれ給へ。すぐ話をつけて了ふから。

刑事乙 こんな處で話は出来ん。君も男らしく俺について来たらさうだ。

青年 え、行く必要がありや行きますよ、何處へでも。刑事乙 必要があるんだ。

青年 そりやあなたの方だけの必要ぢやありませんか。刑事乙 君の必要不必要など此際問題ぢやない。

青年 あなたはそんなに個人意志に對して自由な命令權を持つてゐらつしやるんですか。

刑事乙 勿論さ。俺は一個の社會意志だ。それ位の權利はある。

青年 成程、社會意志、成程……社會意志と個人意志の衝突、其處にも立派な犯罪の發源地がある。社會意志は常に個人意志を踏みじつて、其處から犯罪を發生させて置きながら、犯罪は單に個人意志の所産である

が如き斷案を下し、社會意志は一つの犯罪に對して常に連帶責任を回避してゐる。例へばだ(女を指して)

此處に一人の女性がゐる。成程彼女は一面に於て社會制度を破壊する様な行爲を行つてゐるかも知れない。

併しその行爲を支配するものが、常に彼女の個人意志其ものかさうかと云ふ事は問題だ。彼女らは生活を行つてゐるのではない、生活に押し流されてゐるのだ。

よりよき生活への希望と憧れを抱きながら、その願ひを持つ事を恥ぢなければならぬ様に社會意志は強ひるのだ。彼女らは一度過つて犯した罪を拭ふべき機會を與へられないで、益々その罪の色を濃くして行くのだ。

人を罰する事は云ふまでもなく、人に救ひの道を悟らせる爲めだ。處がさうだ、罰せられた者は其後も惡に惡を重ねてゐるではないか。其處に誤れる社會意志が働かぬとさうして云へよう。ね、さうぢやありませんか、あなたはさうお思ひになりませんか。

刑事乙 もうそれでいゝだらう。それだけ云つたら俺と一緒に持つてもいゝだらう。一寸君に教へて置くがね、社會意志に押しつぶされる様な弱い個人意志を持つてゐる事がすでに一つの罪惡に價するんだよ。わかつたかね。

(さつきの拘摸態の男飛鳥の如く舞臺を横ぎつて逃げ

去る。刑事乙氣がつかない)

刑事乙 この公園の中には刑事が大勢張り込んでゐるから逃げようと思つたつて駄目だ。素直について來給へ。

(刑事甲拘捕の後を追つて駆けて出る)

刑事甲 (刑事乙と青年とを見て) おゝ、うまく掴えたね。(青年を見て) こりや人間が異つてゐるぢやないか。

刑事乙 何が?

刑事甲 何がとは君も呑氣だね。さつきの拘捕をうまくこつちへ追ひ込んで來たのに、君はさうしたんだ。逃がして了つたのか。君にもないぢやないか。

刑事乙 あゝ、あいつか。

刑事甲 (乙の調子にあきれて) え?

刑事乙 僕は今もつと大きな事件を手に入れたんで、拘捕なご問題にしてゐられないんだ。

刑事甲 そんな事件なんだ。

刑事乙 殺人未遂事件だ。

刑事甲 えツ?

刑事乙 此男なんだ。僕が隠れてゐるのを知らないで、しまりに獨り言を云つてたのだ。

青年 そりや間違つてゐるんですよ、この方の思ひ違ひなんで、僕困つてゐるんです。

刑事乙 (耳にせず) で、こに角僕はこの方の事件にかゝ

るから君はすぐあいつを追つかけてくれ給へ。

刑事甲 なんだ。折角骨を折つて此處まで追ひ込んで來たのに、馬鹿くしい。今頃追つかけたつて、逃げ足の早いあいつらだ、とてもおつつきやしない。僕も君の事件を手傳う。

刑事乙 いや、この事件は僕がやるから、手を出さないでくれ給へ。

(前の情人らしい男女、うろくししながら走り出る)

男 あの一寸おたづねしますが、今こちらへ怪しい男が参りませんでしたでせうか。

刑事甲 何をすられたんだ?

男 紙入を取られたんですが、實はその中に少々大金が入つてゐますので。

刑事甲 いくらばかりだ。

男 へえ、その二百圓ばかり……

刑事甲 さうしてこんな處を散步するのに、そんな大金を持歩いてゐるんだ。

男 (もちくしてゐる)

刑事甲 さうしたんだ!

刑事乙 盗んで來たんぢやないか。

男 いえ、……あの、實は親達がさうしてもいけないと云ふもんですから、……思ひ切つて二人で東京の方へ

でも飛び出さうと思ひまして——

刑事甲 親の金を持出したと云ふのか。

男 へえ、さうも相すみません……

刑事甲 頼馬な奴だな。貴様の様に間拔けた面をして女に夢中になつてゐる奴があるから、拘捕なんて商賣が絶えないんだ。つまりお前達が拘捕を養つてゐる様なものなんだ。

男 さうも相すみません。

(突然一人の老婆不安な疲れた様子で現はれる)

老婆 皆さん、こちらへ私の伴は参りませんでしたでせうか。

刑事乙 私の伴つて、此處にゐる者は誰もお前さんの息子を知つてゐるものはないよ。

老婆 いえ、私の伴は乾度こちらへ参つたに——

(それまでベンチにかけて怪しい女と二人で何かを語り合つてゐた青年、老婆の聲に顔をあげて——)

青年 おツ母さん。

母 お、お前、此處にゐたのか。そんなに方々探したか知れやしないよ。皆さん。これが私の伴で御座います。さうも此子は私の側にゐるのをいやがつて、一寸目を離してゐる暇に、かうやつて飛び出してさふのです。それ程にされましても母親と云ふものは子供が可愛い

もので御座いまして、一生懸命後を追つて探し廻つてゐるので御座います。今夜もかうやつて無事に見つかりまして安心で御座います。(青年に) さあ早く歸らう。

刑事乙 (遮ぎつて) 實はね、少し取調べたい事があるの

で、あなたの息子さんに警察まで來て貰はなければな

らないんだ。

母 えツ、何か伴が不都合な事をいたしましたのですか。

青年 おツ母さん。心配しなくともいふんですよ。何も僕は——

刑事乙 君は黙つてゐる給へ。こに角本署まで連行するから、今晚は歸らないものと思つてゐてくれ給へ。さあ早く歸り給へ。

母 一體伴はさう云ふ悪い事をいたしましたので——

刑事乙 驚ろいちやいけないよ。お前さんの息子はね、殺人罪を犯さうとしてゐるんだ。

母 えツ? そりや本當で御座いますか。

刑事乙 わしが此處で木蔭にかくれてゐることも知らないで、さかんに殺人——と云ふ言葉を口にして煩悶してゐたんだ。

母 さうで……(思案、急に笑ひ出して) ほ、ま、ま、さうで御座いますか、いや、それならかうで御座いますよ。ホ、……。

刑事乙 親子ともよく笑ふ人間だな。(刑事甲に)両方も少し氣が變になつてゐるんぢやないか。氣をつけてくれ給へ。

刑事甲 うん。

母 實はそのんで御座いますよ。(青年を指して)これは少し近頃氣が變になつて居りますよ——

(刑事甲乙、それと云はんばかりに目交せする。)

青年 おツ母さん馬鹿な事を云ふもんぢやありませんよ。母——と申しますのは、私にはよくはわかりませんが、

母は探偵小説と云ふものを書いて居りますので——

(一同「オヤ」と思ふ顔色。)

母 随分頭をなやましてゐる様で御座いますが、さうやらそれが爲めに氣持がさうかしましたか、ひよつと思ひ出しては——あいつを殺して了ふんだ——と云ふ様な事を口走つて、そばにゐる私をはら——させるので御座いますよ。今晚も大方そんな事を口走つたので御座いませう。なアに、あなた、ホンの小説みたいな事で御座いますよ。

(刑事乙呆氣に取られて馬鹿くしいと云つた顔付、甲はそれ見ろと云つた冷笑を浮べた顔付)

青年 (刑事乙に)いかゞで御座います、よく御了解下さいましたか。

刑事乙 實に馬鹿くしい話だ。

刑事甲 さうも君の事件は結構な事件だつたよ。まあ精骨を折り給へ。

刑事乙 (荒々しく、母に)こんな氣の狂つた人間を自由に歩かせて置くよと云ふ事があるか。實に危険至極ぢやないか。

母 それが、その、私の——

青年 (刑事乙の耳にさゝやく)氣が變なのは僕ぢやないんです、母の方なんですよ。

刑事乙 (甲に)おい、僕はもうこんな人間を相手にしてゐられない。今日は實に收穫の悪い日だね。

男 (今までベンチにかけてゐたが、刑事甲に近よつて)

さうか、至急に私の方を何とかお願ひいたします。

刑事甲 とに角調べてやるが、もうこても駄目だらう。

刑事乙 おや——此處にまだ君の結構な事件が残つてゐたね。ハ、ハ、ハ、

刑事甲 (荒々しく)本署まで来い。

(刑事甲について男女二人入る。)

刑事乙 (母親に)今後われ——に手敷をかけたばかりでなく、注意するんだ。今晚なご手敷をかけたばかりでない、一つの事件を妨害したんだぞ。今晚は特に許してやる、今後氣をつけるんだ。

母 誠に相すみませんで御座いました。今後は充分氣をつけてますで御座います。

刑事乙 (ベンチにかけ青年と話してゐる怪しい女に)おい、お前は一應取調べる事があるからとに角本署まで来い。

青年 そりや困りますね。實はこれから僕の家へ来て貰ふ事になつてゐるんですから——

母 お前何を云ふんだね、見ず知らずの他人を家へ連れて歸つてさうするんだね。(刑事に)さうもこれだから困ります。

青年 お母さん、この人は僕にはもう他人ぢやないんです。やがてお母さんにも他人でなくなる人です。まあ家へ歸つてゆつくり話させよう。

母 お前そんな事を云つてまた私を困らせるんだね。いつまで——

刑事乙 (遮ぎつて)おい、二人は家へ歸つていくらでも喧嘩すればいゝぢやないか。(女に)さあ、行かう。

怪しい女 (無言のまゝ立ち上る)

母 (刑事に)一寸お願ひで——

刑事乙 なんだね。

(二人片隅へよつて小聲で話し合ふ)

青年 (泣き相になつて)困るな、困るな、個人に對して

社會、子に取つて親、さうすればいゝんだ。

怪しい女 (青年に近より小聲で)あなた、あたしはまた此處へ歸つて來ます、いつかわかりませんが、自由になつた日に、そしてあなたに逢へる日まで此處で待つてゐます。此世でたつた一人の人にめぐり逢ふ爲めに永い旅をして來た者が、やつと目的の地點へ辿り着いた希望と喜びをもつて、あたしはちつと待つてゐます。

青年 いや待つてゐるのは僕だ。きつと歸つて來てくれ給へ。ちや——(手を差し出す。女無言のまゝそれを握る。對顔。)

刑事乙 (母に話しながら、前へ出て)とに角よく監視してゐなければいけない。さうでないといやでも病院へほり込まれるからな。(女に)来い。

(女晴れやかな微笑を青年に投げて、刑事の後について入る。)

青年ちつと後を見送る。)

母 お前、少し氣を落付けておくれよ。

青年 (やさしく)おツ母さん、あなた疲れたでせう。少し此處で休んで行きませう。さあ、おかけなさい。

母 さうだね、少し休んで行かうかね。

(二人ベンチへかける。遠く電車の走る音)

母 もう大分夜が更けてゐるんだね。
青年 ええ……(ベンチをなで、見て)こんなに夜露がおりてゐますよ。

(間)

母 静かだね。

青年 星があんなにまたゝいてゐます。

母 それでも下はこんなに暗い……

青年 まだ月が出ません。(間)……静かな月のない夜、星のまたゝきを凝つて見詰めてゐると、何とはなしにほゝえまれて来る。……澄み切つた耳の奥へ、遠くからだん／＼速度を早めて近づいて来る、軽やかな足音が響く、おれはそれでも立ち上らないで、ちつと座つたまゝ闇の中に顔を描いてゐる……埃と汗にまみれた顔が、だん／＼明るくほゝえみかけて来る、それでもおれはまだ立ち上らない、足音がハタと止まる——(いつのまにか母親が彼の胸によりかゝつてまごろんでゐる。彼はそれをちつと抱く様にして)お母さん、あなたは子供の胸だと思つて安心して眠つてゐますね。本當に安心して眠つて下さい。私はこれからとおどなしい子になりますよ。
(サーカスのハネを報ずる樂隊の音響が闇夜に擴がつてやがて消えて行く)

ゲーテと人形芝居

ゲーテが如何に人形芝居に興味を感じ愛好したか、また彼の藝術上に如何なる影響を與へたかは「ワイルヘルム・マイステル」の開巻第一章からそれを物語つてゐるが、此處には「詩と眞實」の一節を抜粋して見よう。
「私達は、隙さへあると祖母のさるへ入りびたりになつてゐたがその廣い部屋には充分の遊び場所があつたし、祖母も亦子供のすきさうな何でもない事で遊ばしたり、旨しい菓子などをくれて機嫌をさつたりしたものだ。しかし、私達が心慮から彼女を好いお婆様だと思つたのは、或る年のクリスマス晩に彼女が私達に人形芝居を見せてくれた時である。此の古い家の中には、その晩だけ一つの新しい世界が生れて出たやうな觀があつた。私達の幼い心は、この生れて初めて、思ひもかけない觀物に惹きつけられてしまつた。殊にそれに私達男の子に一つの極めて強い印象を與へて、その餘波は一つの大きな永続的な結果となつて續いた。

人形——無言の座付俳優達には小さい舞臺も添はつてゐた。私達は、始めの間見物する事だけを許されてゐたが、後には自分でそれを操つて、芝居らしい所作をさせることも許された。ところが、それから間もなく、祖母は病氣が重態になつて私達の眼から遠ざけられ、續いて遂／＼死の爲めに連れて去られてしまつた。して、この孫可愛がりの祖母が、私達への最後の遺物として残してくれたのは此等の人形と舞臺であつたから、私達にはそれが一層大事なものに思はれて来た……」。(増富平藏氏譯)

海を越えての名著

▲ガストン、パティー氏の「舞臺美學の序論」がモーリス、ブリアン氏の序を附して、巴里のアルト、エ、ガイ社から上梓された。

▲キヤビートル叢書の内ルシアン、アユウベック氏の「演劇論」が編入される事になつた。相だ。

▲ベエイトフエン百年祭を當て込んだのか？ フリードリッヒ、パールベルト氏はベートフエンを題材として三幕の劇を書きシヤウスピル社から蘭版の由。

▲「アイヘル氏の藝術人形芝居」の紹介を、フランドル、クロツチエ氏に依つて編著、ザルツブルヒの、アー、ホルスト書房から出版された通知が考つた。

▲「一萬一夜」斯う書けばアラビアン、ナイトの引き押しか？と思はれるが、映書界空前の文獻、サブタイトルに曰く。

「活動寫眞の歴史」さある(テリ、ラムセ)ものらしい。

一氏著)一八八八年にトーマス、エー、エテ ▲ジョン、ゴルスワアーの序傳が、アイソン氏に依つて孤々の聲を揚げたモーション、エツチ、ゴーツ氏の手に依つて、「劇の藝術の歴史、若人の憧憬の的として其名を全世界に名で戯曲集と同じ書房ダツクウアー社から出版され、好評を博して居る。

シモン、エンド、シユースター社の出版。 ▲カイエ、リーナル書房から今度新たに計畫された叢書「新傾向選」の内へ左記のものが出版の豫定になつて居る。

▲今度獨逸で「近代舞臺圖譜」なる題名の下に、美しい書物が出たこと。パラノウスキ氏とマーンケ氏共編でライプツヒのユステル書肆の出版。圖面の他にテキストを附して二冊から成り立つもの。最近此方面の参考資料に飢へ勝ちの折柄絶好の伴侶が生れたと云つてよからう。

▲「舞臺演出上達法」と題したもの、倫敦の某社から出版。素人俳優の手引きに過ぎない



人形淨瑠璃の生れるまで

木谷蓬吟

一、淨瑠璃節のこと

源家の御曹子牛若丸が、鞍馬山で、ひそかに學問劍道の基礎教育を了へて、いよく奥州の秀術によつて一三旗上げやうと企んだ。假に金賣吉次の僕童と身をやつして、京から奥州へ下る途中、三河國矢矧の里、長者の家に一泊の夜、長者の娘淨瑠璃姫と懇懇を通じた。この情話を十二段に綴つて『淨瑠璃姫物語』なき云ふ物語本が出来た——この物語に節を付けて謠ふたものを『淨瑠璃節』と稱へたわけ

である。

この物語本の作者は分らない、普通には小野のお通の作だと傳へてゐるが、お通は改作者であつて、最初の原作者ではない。

淨瑠璃節の世間へ流布されたのは、文安年中（足利七代義勝の時代）だとの異説もあるが、先づ普通には、享祿四年（織田信長誕生の前年八月十五夜に、駿河國宇津の山邊で小座頭を呼んで淨瑠璃を語らせた、とある柴屋軒宗長の日記の所載を以て、文献に現はれた最初のものだとされてゐる。

る。それから九年後の天正九年の、守武千句のうち

いとゞだに座頭まがひの杖つきの

淨瑠璃かたれ灯のもと

今宵はや時は牛若更け果て、

なきあつて、牛若淨瑠璃姫の情話を、所謂淨瑠璃節で語つたことが明瞭に見えてゐる。

この句にも見えるやうに、また前記の宗長日記にもある通り、その創始期は、主として座頭さんが語つたものらしい。何かの書物で見たと思ふが——座頭さんが、大きな紋を付けた柿色の衣を着け、木綿袴に、古扇ふるあふぎを手にして、淨瑠璃を語りながら、田舎や山家を、それからそれへと流れて行く——ちやうど、小唄やホーカイ節ほかいせうなを流して、地方を巡つて行く旅藝人のやうに。

勿論、この頃はまだ三味線に合はずやうなことはなく、扇子を左手に持つて、右手の爪先で、扇の面をバラ〜と掻き鳴らして、調子を操つたものである。蛇が紙障を叩く如しと云つた支那の琴しんの音にも似て、いづれの國でも原始音楽の相似點が窺はれて面白い。

これを『扇拍子』の時代とも稱し、この古風習が近來まで仙臺地方に残つてゐた。奥淨瑠璃、仙臺淨瑠璃とも云はれる。鋤立の句に『みちのくの三絃きけば扇かな』がある。淨瑠璃節も年を経るに従ふて、そう〜淨瑠璃物語のみ

二、三味線のこと

當時の文明は、多く堺の港を通して輸入された、三味線も其例に洩れない。

それにも、琉球から來た蛇皮線説や、葡萄牙傳來のラベイカ説らべいなきあつて、異説區々であるが、要するに、外國渡來の樂器からヒントを得て三味線を案出し、これを淨瑠璃節に合はせることを工夫したのは、慶長頃の堺の瀧野檢校や澤住檢校の努力に因るものらしい。

寛永年間、東福門院の前で、澤住檢校が『十二段』に節章を付し、琵琶にて語り、又、三味線に合はせても語つたとの記録がある。現今でも、この澤住檢校を、淨瑠璃節三味線の始祖として祭つてゐる。淨瑠璃の三味線彈きに、竹澤、鶴澤、野澤、豊澤、花澤など、悉く『澤』の字を用ひるのは澤住始祖尊崇の意を表銘したものである。

この頃の三味線の節調は、たゞ拍子つちうしを取るぐらゐの程度

家の琵琶師が、その撥を以て弾き初めた、これが三味線の根元である。

◇……ところで、琵琶の撥を以て弾き初めたのは、琵琶法師の手によつてなされた、そして三味線が弾けるようになる、これが扇拍子に代つて浄瑠璃をこの新しい樂器の絃に合して語り出すようになったのである。この琵琶法師こそ、堺の産で慶長頃の盲人でその道の高手と唄はれた澤住檢校であつた。

◇……この澤住檢校の門下に、目貫屋長三郎といふものがあつて、攝州西宮の傀儡子引田ながしを語りひて、浄瑠璃に合せて人形を操つることを初めた、これが全く今日いふところの人形芝居の權輿であつた。そしてこの目貫屋長三郎は、京の人であるが、堺に移り住んでゐた。斯くの如く永祿年間に渡來した三味線が、澤住檢校、及び目貫屋長三郎の手を経て浄瑠璃に合せるやうになつたのは、慶長の年間である。

◇……ところで、泉州堺の人で、水無瀬流の琵琶を岩橋檢校に學んだ虎屋治郎右衛門が、澤住檢校に曲節を學び、薩摩太夫となり、薩摩浄雲となつた。これが寛永の初年に江戸に下つて一流を開始した、これが江戸浄瑠璃の祖であつて、浄雲の下に丹後太夫、丹波太夫、源太夫、長門太夫といふ虎屋と稱する四天王があつた。

で耕屋又兵衛といつて、三代目の門人であつたが、四代を繼いだ、多病であつたので、堺戎の町西六間筋へ隠退した。この四代目に養子となつたのが、竹本氏太夫の門弟で文字太夫といつた男で、これが五代目春太夫となり、春太夫の中興の祖である。この五代目春太夫が泉州堺鍛冶屋町の産であるが、一日出羽庄内の城主酒井左衛門尉の江戸邸へ招かれて『山科』を語つたが、浄瑠璃を語つてゐるうちは寸分の隙がなく、氣合充滿してゐたと、左衛門の尉から激賞された名譽の逸話が残つてゐる。

◇……五代目春太夫の三味線が野澤吉兵衛であつて、この兩人が攝津大塚を仕込んだのである。攝津の浄瑠璃は勿論天性の美音の助くるところでもあつたらうが、春太夫吉兵衛に負ふところも多大であつた。そして大塚の衣鉢を繼いだものが越路太夫であつて、これ又、堺の産である。

◇……かう數へて來ると、今日文樂座を拵へ上げた春太夫系統の殆んが——初代春太夫、四代春太夫、五代春太夫、越路太夫と——堺の産である。これをしも因縁淺からずといへようか。この意味において三味線渡來の抑もから文樂座の紋下竹本越路太夫に至るまで、堺の土の生んだ『人形浄瑠璃』といふもあへて不思議ではない。或は又濳稱でもない。全く人形浄瑠璃は、多く堺人士の手になつた郷土藝術でないといつていへないところがあるまいと思ふ。

◇……この四天王の一人である源太夫が、京都によつて京都に浄瑠璃の根を下ろした。これと前後して京の人で井上播磨椽が源太夫の門に入つて、一流を始めた、これが寛文の頃より流行し浪花の地に入つたのであるが、後の竹本豊竹とともに、この播磨の系統を引いてゐる。かくて山本角太夫土佐、宇治嘉太夫加賀などを經つて、天王寺の五郎兵衛即ち竹本義太夫を生むに至つたのであるが、私の目的は浄瑠璃の歴史を説かうとするのではない。竹本義太夫といふ人形浄瑠璃の大成者を生むに至るまでの徑路が明かになればいいのだ。

◇……即ち澤住檢校、薩摩浄雲といふ堺の津の人々によつて、堺の津に渡來した三味線が浄瑠璃姫物語と結合して、今日の浄瑠璃の基礎を作つた。故に人形浄瑠璃は堺の土地から發祥し、堺の土が産んだ一大藝術であつたのだ。

◇……堺の土が産んだ浄瑠璃は、不思議な因縁で、更らに近世に入つて、堺の人士の手で、今日に傳へ、且つ榮え來つたといへるのである。今日何人も近世の——近い時代の名人といへば、攝津大塚を推すことは間違ひがないが、この攝津は大塚の産ではあるが、春太夫系の人である。そして春太夫系は結んで堺の出身なのである。

◇……初代春太夫は、竹本大和椽の門弟で、泉州堺の産、延享元年から天明四年まで榮えた名人であつた。春太夫の二代目は初代の又弟子であつたが凡庸の材であつた、三代目は岡太夫の門人でこれも凡々。四代目の春太夫が堺の人

◇……日本音曲の司である浄瑠璃が、堺の土地に因縁の淺からざることを、堺の人士がハッキリと知つてゐるのだらうか。私はこの意味からいつて、近世文化の大事業をなした、この立派な郷土藝術の大成者である初代春太夫から越路太夫に至る浄瑠璃界の『近世』の事蹟をもつとく、闡明したいと思ふ。この『近世』の時代こそ、最も文献に乏しく研究に資する材料を缺いてゐるので、せめても古老の生存中に材料の蒐集に努めんとして、『九日會』といふを創立し、現在の文樂座の主なる篤志家を以て組織し、『近世』浄瑠璃界の研究に貢献するところあらんことを期してゐるが、同好の方々には研究資料の御提供を希ひたいものである。(大塚圖書室にて)

「戯れ」國民座上演

本誌新年喜劇號所載川口君作「戯れ」が再び國民座で本月十三日より上演されます。

前回同様此度も大阪及び神戸在住の誌友を御招待して觀劇會を催す豫定、改めて御通知します。

淡路の人形芝居の思ひ出

中山 鏡 夫

始めて人形芝居を見たのは、多分私の數へ年の六つか、七つの時であつたらう。それは冬の寒い日の午後から宵へかけてであつた。私は父につれられて町はずれの廣い空き地に丸太材や帆布や蓆などで作られた人形芝居の小屋へ行つたのである。その時見た芝居から今もなほ、ほのかに覚えてゐる。それは、小さい可愛い子供の武者人形が二人出てきて刀を抜いて斬り結んだりしたこと、そしてやがてその内の一人がいたいけにも大人の武者人形のやうに切腹したりしたこと、自分の子供の死を眼の前に見ながら不感不動然として

ゐる武士や、不意に放たれた鐵砲の音にも動する色なく、依然として醉態をつづけて居る豪傑なやであつた。おそらくその時見た狂言は、今から考へてみて『近江源氏先陣館』でなかつたらうかと思ふ。その時私は勿論、語られた淨瑠璃などはテンデ解る筈はなく、ただ舞臺へ出てくる色々の人形、その顔付、その服装に、子供らしい貪らんな好奇心を吸収させたのであつた。子供の私は執拗な同情を、頬を赤く熱せしめ、眼に涙を誘ふまでの同情を、切腹した子供(小次郎?)に漉いだことであつた。そして白髪(時政夫婦?)

をひさく憎み、哀れな子供の父親?が手を拱いて何もしないのを見て一層齒がゆく思つたことを、今でも覚えて居る。

今一つ覚えてゐるのは、私が小學校の五年生か六年生かの頃由良へ上村源之丞一座が來た時のことであつた。そのときこの一座は阿波國から、幔幕を周圍に張りめぐらした大船に乗つて、太鼓を打ちたたきながら、多分江戸時代に阿波侯が江戸參勤のために渡海するやうな物々しさで、由良港へ入つて來たのを私は覚えて居る。私はこの一座に依つて『賤ヶ嶽七本槍』を、山路將監と加藤清正?とが組打ちになつたまま山腹から谷間へと墜ちるといふやうな金ピラ式な、粗豪な演出をはじめて見たのであつた。佐久間玄春や中川清秀などの甲冑姿の武者振りには、何と云つても、日本の少年の心を躍らせずにはおかない演出であつた。

その後私は中學へ行くやうになつて

からも人形芝居を見たであらうが、何しろ毎日家庭と學校との間五里の道程を通つて、半ば飛脚的な日常生活をしてゐたので、校業を終へて家に歸ると私のやうな弱い體力のものは全つかり疲れてしまつて、偶々舊正月頃に一度歸國した人形座の芝居を見る機会があつたにしろ、ゆつくり見て楽しむといふやうな事が殆んど不可能であつた。よし觀ることが出來たとしても、それは『繪本太閤記』の中の一二の場面とか『一の谷嫩軍記』の某々の場面といふ風に斷面的に觀たばかりであつて、落付いて芝居を楽しみ得たといふ記憶は更らない(常に思ふことだが、中學時代は、それは田舎中學の頑迷な軍國主義的特色にもよることだが、私にとつてはいろいろな方面で不幸であり不平等であつた)。

早稲田へ這入つてからは淡路の人形は全く見ることが出來なかつた。ただ稀に歸省の途次、大阪へ立ち寄つた折からも人形芝居を見たであらうが、何れこそ文字通りただ覗いただけに止つて今ここに書くべき何物も持つてゐないと言つて好い。

去年の冬、私は淡路にゐたので、久しぶりに二日ばかりつづけて人形芝居を見ることが出来た。『奥州秀衡有髮(はむ)』とか、『繪本太閤記』などを見ることが出来た。

斯う書いてくると、私の人形芝居を見た度数は極めて少く、しかも極めて斷片的であつて、とても『淡路の人形芝居の思ひ出』などと題して、口幅つたい事を云ふ柄ではないのだが、豊岡君から『宛に角何か書け』といふことなので、『劇』の貴重なページを浪費すべく筆を取り上げた次第である。

淡路の人形芝居の一行が毎年巡行しに行く國、例へば紀州路などへ行くこと(即ち人形つかひ)だと思つてゐる。

いふ話であるが、しかし淡路の人は悉くこれ人形役者といふわけではないのである。人形芝居を職業としてそれを世襲にしてゐるのは、淡路のうちでも唯一つの村に限られてゐるのであつて淡路國三原郡三條村といふのがそれである。今徳川時代に出來た淡路に關する地誌であり、且つ史料である『淡路國名所圖繪卷之三』を開いて三條村の部を見るに、次の記事が目につく。

(木偶操座) 同村(即ち三條村のこと)にあり、世人淡路座といふ。凡其座本といふ者甘軒餘もあるよし、就中上村源之丞なる者を魁とす。市村六之丞といへるも最魁たり、この座本は市村に住せり。年中諸國を巡歴して木偶芝居を興行す。一村中みな此業によるもの而已住す、或は淨瑠璃かたり、三味線ひき、木偶つかひ、道具方にいたるまでここに會せり。

しかしながら私の知る限りでは、上村源之丞一座は明治以後徳島市に居を移し、そこを中心にして四國地方を巡

業してゐるといふことであつて、毎年舊正月に私の故郷へ来て芝居を行る座元は淡路津名郡鮎原村の小林六太夫である。この二座の關係はさうであるか、以前淡路にゐた上村一座が何故徳島に移つたかに就いては、私の全然知り得ぬことである。

人形芝居の起原については『淡路名所圖繪』や寶永年間に淡路で上梓された『堅磐草』等に記されてあるが、殆んど大同小異の記事である。——神代のこと、伊弉諾伊弉册二神の第三子、蛭子の尊が三歳になつても脚立たず、その上容貌醜かつたので、二神は天の磐船に乗せて海上へ放ち給ふた。蛭子の神海上に漂ふこと多年にして、後遂に西の宮の浦に着き、ここに鎮座しますやうになつた。これが即ち西の宮の戎三郎殿である。後代に至つて道藏といふ人、この神の御心を慰め奉つたのでこれより海上風波静り、漁獲多かつた。然し道藏が死んでからは、この神を祭

るものが無かつたので、海上大いに荒れ、漁獲も更らになかつたので、百太夫といふ者、人形を作り、蛭子の尊の御機嫌を慰ると稱して、それを西の宮の社頭で舞はした。それでやつと風波も静まり、漁も出てきたといふことであつた。これが傀儡師の始めである。此の後百太夫は諸國を巡つて淡路國三原郡三條村に居を定めた。百太夫の死後、彼に傀儡を習つた何某の四人が傀儡の業を繼承した。是れが淡路の人形座の始めである。

先づ人形芝居の起原に就いては斯うした意味の記事が、淡路の文獻に掲せられてあるが、然しながら、これは單に一個の傳説たるに止まるものである。然し、さにかく、人形芝居は、平安朝末期若しくは鎌倉初期に萌芽した傀儡師から發生したものであること、それから、淡路の人形芝居と西の宮の戎神社の信仰傳説とが何等かの點に於て關係のあることは確かである。とい

ふのは、淡路では、古來、戎舞といつて、所謂戎三郎の神像に模した木像を舞はしながら、島内の村々をめぐつて生活する一種の門付が居るからである。恐らくこの戎舞は、現今日本全國に残存してゐる所の最も素朴な傀儡師の一つであらう。今、序に、先年『淡路新聞』紙上で藤井彰民氏が發表された『淡路草』から戎舞はしが戎人形を舞はしながら歌ふ歌詞を抜き出して、ここに記してみよう。

(そもそも西の宮の、戎三郎左衛門の尉は信なる人には福を與へ、富貴に守る神なりと祝ひ申せば御座もきれいに御注連綱引いて、氏子衆が集つて笛や太鼓、鞆鼓鐘の聲、いづれも訖さかまへて乙女の鈴の聲にひかされて、戎殿はういてきた、烏帽子狩衣折目高にきなして、四乳の草鞋でしゃんならしや、しゃんならしやと、やらしてある時の遊山に、舟に棹さし沖へ漕ぎ出でて、沖にもなれば、須磨の浦にはすまにすまき、立つ波に引く波をつけて、はしま千鳥が友

呼ぶ聲は、ちりやちりちり／＼ちりやちりちり／＼ちり飛ぶ／＼ころを漕ぎ寄せて、鯛を釣つて踊つた、盡きせぬ御代こそめでたけれ

歌詞としてはいかにも粗笨未開のものであるが、淡路海岸の漁師が他國へ出漁する時などは、よくこの戎舞しを呼んできて、戎舞を舞はせ、この歌詞を歌はせて、大漁を祈るといふ風習は今もなほ残つて居るのである。殊に淡路の漁場であるこの由良などでは、毎年年人形芝居を催す毎に、必ず舞臺の上で、個人の人形舞はし戎舞よりは遙かに大きい戎舞を舞はして、鳴物入りで右の歌詞を歌つて、その年の大漁を祈るといふのが、慣例になつて居る。

毎年舊正月頃に演出する人形芝居のことを、由良や上灘のごとき平野の殆んどないといつて好い位の町村では『濱芝居』といつて居る。蓋し海岸の砂濱に、小屋を掛けて、帆布や蓆で風を

防いで、芝居を演るからであらう。演出の時間は大抵普通通りで、朝の十時頃から夜の十二時頃までであつて、その日は町もしくは村全體が見物に出掛ける。彼等は蓆の上に乗つて、青空を頭の上に感じながら、太夫の語る淨瑠璃をきき、大袈裟な身振りを以つて目をむき、眉を動かす人形——金藤次や彌陀六や能登守範經など——を眺めるのである。餘程以前までは外光の直射を避けるために見物は、手拭で頬被りをしてゐたものだが、近年は烏打帽やハット類が田舎に普及してゐるので、然うした古めかしい、徳川時代の劇臺に見るやうな風俗は著しく減つて、ただ町もしくは村のお婆さん連中の頬被りを近頃は見受けるにすぎない。

淡路の人形は、大阪の文樂座の人形よりは大きいといふことは、一度淡路の人形芝居を見れば誰でも氣の付くことである。淡路の人形芝居は時代物にすぐれ、文樂座は世話物に上手である

といふのはこうした人形の形式の關係によるらしいと、かつて三田村氏は云つて居られたが、それも一つの理由ではあるが、今少しもつと根本的な理由は、淡路及び淡路の人形芝居が巡業して歩く國々、例へば紀伊、四國地方の住民の粗朴な剛健な田舎的好尚に在るのではなからうか。

従つて所謂『濱芝居』なるものの例年のレペルトワールを見るに、大概は『賤ヶ嶽七本槍』とか『源平八島合戦』とか『一の谷敵軍記』とか『繪本太閤記』などの通しであつて、單にそれらの軍記劇の中に挿入されて、『酒屋』とか、『壺阪』とかが演せられるにすぎないのである。多分私一個の想像によれば、『濱芝居』には金平物の粗剛、殺伐、豪傑趣味、それらに伴ふ一種のグロテスクネスが多量に見出されるやうである。

一班人形芝居は(歌舞芝居の如きも然うであるが)ロマンチックな内容形式を具へてゐるものであつて、殊に軍

記物から取材された所謂時代物に至つては日本文學史上及び演劇史上に最もタイピカルなロマンチック文學の位置を占めて居るのである。——それは人形芝居より更に一時代以前に發達と成長とを遂げた謠曲と比較することに依つて容易に諾ぶかれることである。

謠曲はその典雅な文體によつて、能はその完成された形式によつて人々を喜ばせるものであるが、人形芝居はそれの演出によつて見物をして情緒の力強さを感味させることを目的としてゐる。一は靜的美を主として居るに反して、他は動的美を飽くまでも強調せんとする。謠曲は萬葉集や源氏物語などの古典から上品な然し生彩に乏しい語句を借用して來て専ら選ばれたる階級への藝術であつたに反して、人形芝居は、人形淨瑠璃は極めてファミリヤ一

な當時の民衆の語る言葉語り、一般町人階級へ呼びかけた。謠曲が感動を制約したに對して、人形は熱情を披瀝

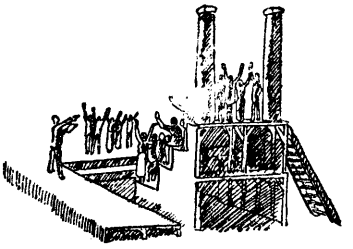
し、常に見物の熱意を沸騰させやうとする。能に比較すると人形芝居は不均整で、だらしが無くてその藝術的完璧さから云へば遙かに能に及ばないが、それだけに能なごよりも生き生きしてゐる、自然的で感激的である。

平知盛を渡海屋銀平にしたり、羽柴筑前守をして旅僧に化けて光秀の家に忍び込ませたりするが如き劇的技巧は實に此種の文學が如何に荒唐無稽な奔放な空想をほしきままにして、浪漫主義を發揮したかを、視がはせるに足るものである。

人形の象徴的な暗示的な容貌特徴はそれの誇張された、物々しい若しくは惨ましい身振りは、封建の豪華な城内の大廣間から忍びの黒幕によつて暗示せらるる夜の山道を籠乗物または夜襲の一隊のすぎ行く光景への舞臺擧面の急轉は、吾々をサブライムでそして同時にグロテスクな中世紀的世界へ引き込んでしまはずには置かない。

特に私の好きなのは、人形の非人情的表情であつて、例へば歌舞伎の舞臺などで役者自身とその扮してゐる人物との間に動もすれば或るギャップが吾々見物に感ぜられて、歌舞伎のメロデーの作り出す美しい幻が時に破られるに反して、人形芝居に於てはそうした憂ひの無いことである。

人形芝居は、實に、能及び歌舞伎劇と共に、日本演劇界に於ける最も著しき特色と最も稀なる價值とを有する(英語の意味に於ける)クラシックである。私は今、この短い文章を終はるに當つて、人形芝居に對して愛好熱と研究心とを持たれてゐる人々が、淡路及び阿波へ來られて將に湮滅せんとする諸文献の發見精査に努められ、且つ時代文明との變遷のために一般民人から顧られること少なく、その衰弱の兆益々加はらんとして居る人形芝居とそれの一切の傳統との保存に力を効されんことを望む次第である。



イタリーの人形芝居

山田松太郎

ヨーロッパ各國には可成り古くから操り人形の無い國はないといつて好い。然しイタリーの旅藝人達が、英、佛、獨、西等の各國に人形を輸入し、各國は是等の手法、構造等を模倣したのが始まりで、漸次自國化したものらしい。故にイタリーが總ての國の先驅者だといつても好い譯だ。従つてイタリー人は操りの工夫、發展等の上にも他國に勝り、且つ操りの妙味を數等好く理解してゐた。

イタリーに於ては随分古くから宗教と關係して寺院内に於て操り人形が存在してゐた。是れは丁度、劇の初まりが宗教と關係あつたと同じだ。そして此の聖母や聖者達の人形は日本の文樂座のそのやうに、眼を動かし、頭を振り四肢を動かせるやうに出來てゐた。是れがそも／＼イタリ

のフアントチーニー(大型操り人形)の元祖である。そして屢々寺院の禮拜堂や本堂内で立派な舞臺を造り、聖書中の物語りや殉教者達の一生を演じて見せたのだ。しかも是等の人形は大小種々あつて、彩色付きのもので、立派な衣裳を着、寶石を飾り、可成複雑した機械装置を持つてゐたものらしい。かやうにして宗教劇演出に當つては人間の役者と共に此の人形の役者を使ふことは極く普通であつたのだ。

ヴァサリはキリスト昇天節の此の催しの美しい様を書き残してゐる。多くの天子達に取圍られて、雲に乗つたキリストが山上に現れる、山の頂には使徒達が跪く、キリストは靜かに天國に昇つて行く。又天國の様は殊に美しいと。十の天界は輪狀装置でグル／＼廻つてゐる、その周圍には

小さい灯を以て星を現はし、雲は白い羊毛を以て造り、その中には様々の色彩の美衣を纏つた天子達が見える。やがて二人の天子が降つて来て、キリストの昇天すべきことを告げる。此の古い習慣は今も尙、舊教の寺院内には残つてゐる所があるとのことである。そして旅行者の談によれば民衆は信仰と敬虔の念を以て是れを見てゐるさうだ。以つて中世時代の盛大を想像することが出来る。

しかし此の寺院内の操りは、愚かなる偶像崇拜として、今迄に屢々大僧正達の禁する所となつた。一〇八六年、僧院長クラニイのヒューズ、一二一〇年、法王等、皆是れを禁じたけれども、是等の禁令も此の古い習慣を全滅させることは出来なかつた。諸所の寺院内や僧庵、墓地等に於て屢々此の小さい姿は現れた。そして、尙も禁令の烈しくなつたのに連れて、十六世紀頃には、操りは寺院内を出て、田舎廻りを始めた。そして地方の町の市場や、縁日の在る場所に姿を現はすやうになつた。

イタリーの人形には何日の間に種々なものが出来るやうになつて居た。ストラスブルグ図書館にある十二世紀の書き物の中に見られる圖の如きには、二人の戦士が剣と楯を以つて相戦ふ人形がある。是れは綱で二人の人が雙方から引張ると、綱の上の二個の人形が格闘するといふ仕掛になつてゐる。是れより察するに、その時分には戦士ばかり

醫者である、有名なるギロラモ・カルダンは書いてゐる。「戦ひもすれば、鐵砲も打つ、踊りもすれば、音楽も奏でる是等の人形のごとは、終日かゝつても書き切れない」と。かくて元々は宗教に關係あることのみより演じ得なかつた操り芝居は、傳説、騎士物語さてはローマ衰亡を回想する諷刺物等に至るまで種々のものを見せるやうになつた。そして、やがて喜劇的要素も取入れ、道化芝居には滑稽な扮装をした人形が土地の方言を使つて現はれるやうになつた。

茲に一つ注意せねばならないことは、イタリー獨特の喜劇、コメディア・デル・アートと此の操りとの關係だ。コメディア・デル・アートとは素人役者の手を離れて、始めて文人役者といふものが出来、その連中によつて演ぜられた最初の専門家芝居である。是れは作者が作の筋書きだけを書いて置き、他の事は、爲種、せりふ等一切役者に任せられたものであつて、役者は即興的に吟じ、且つ演じたものである。そしてラテン喜劇中の人物から来たとも思はれる滑稽な面をしたマスクをつけ、盛んに演劇中、諷刺、諧謔等を飛ばしたものである。そして次第に種々なる登場人物が定つて来た。アルチネルラ、パンタロン、コランバイン、ビエロウ等それである。此の諷刺中には人情、風俗、時世等を諷刺した、中々うがつたものもあつて、上下兩階級間

りではなく、同じやうな仕掛で踊りを踊らせるやうになつた人形もあつたらしい。そして太鼓の上などで音楽に會はせて踊らせたものらしい。又イタリー人形中にはブラツチ二といふものがある。此の人形は木や紙細工で造らへた手や頭を持つてゐて、胴體の中に手を入れて操る仕掛の人形で放藝人が小さい屋臺を持つて歩き、その中で此の人形を動かしたものである。そして大抵の場合、個の人形であつたといふ。又、フアントチーニーといふ人形がある。是れは幾分大小はあれど眞實の人間に象つた大型人形で、木、厚紙等で造り、時には所々、金屬、又は石膏を用ひてある。その彫刻は、時には可成粗雑なものもあつたが、中には極く細い彫りものもあつた。此の人形は、人形使ひが天井に隠れて居て、針金又は糸を以て是れを操つたものである。又時には床下の方から動かすものもあつたらしい。宛に角イタリーには種々の人形と、それに従ふ工夫があつたことは分る。

さて是れ等の人形は随分早くから、無智な人々と共に智識ある階級の人々にとつても人氣があつた。田舎は旅藝人によつて見せられ、都會は特別の小屋を有し、貴族は私有的人形劇場を持つてゐた。そして多くの著名な文人達も人形操りの爲めに作を書いた。メデイチのロレンゾは特に人形芝居を喜んだやうである。一五五〇年に、數學者で又

にも非常に人氣を博し、百年餘りといふものは頗る榮えた。そして一六一一年にはフラミニオ・スカラが演出監督者として此の芝居を組織立て、數多の筋書や演技上の細かい注意書きなどを發表した。しかし、このコメディア・デル・アートは次第に餘りに下品な野卑なものになつて来た、そして人氣を失ふやうになつた。大劇作家ゴルドニイがイタリー劇改革をやつたのは此の時だ。さて此のコメディア・デル・アートが世間から棄てられるやうになつた時、その誇張的、法螺吹的分子を吸収して其の演出の上に於て人物の上に於て、大いに範圍を廣げたものが操りである。一方、劇からの影響として操りは背景より小道具に至るまで細かい立派なものを造るやうになつた。又その演出するものの種類も頗る多く、ローマンス、メロドラマ式悲劇よりイフランドやコツツビユーの軍隊劇まで取り入れた。

又外國を舞臺に執つたものなごも現れた。十九世紀の佛國の小説家にして美術批評家なるベイルはその伊太利紀行中に於て、ローマで、教育ある上流階級の見物を前にしてマキャベリーのマンドラゴールといふ作が五尺ほごよりない小舞臺で、しかも細かく、驚くべき巧みさを以て演ぜられたといふことを云つてゐる。又千九百三年頃の或人の書いたものにも、イタリーの貴族達はその邸内で操り(フアントチーニー)を演せさせ、政治的諷刺や、

思ひ切つた人物批評を聞いて喜ぶといふやうなことが書いてある。

ペイルの文中に、フィアノ座といふ所で操りが非常に人氣を博したといふことが書いてあるが、このフィアノ座の跡には、今日も尙立派なフアントチーニーがあるといふことである。見物席は小さいが、此の方面に興味を持つた教養ある中産階級の人々を入れるに十分なだけの廣さがあり其處にはオーケストラも在し、下劣にならないブルチネルラの芝居も見られるし、驚くべき程美しい舞踊が人形によつて演ぜられるこの事である。然し今日ローマに於て最も人氣のある人形芝居の小屋は、モンタナラ廣小路にあるものだらう。此處では、寧ろ古いフアントチーニーがアリオストからの古い騎士物語を演ずることが多いが、コロンバスのアメリカ發見なきや云ふ珍なものもある。此處に來る見物は、大抵下層階級の連中で、演戲中にも南瓜の種子をパリ／＼音たてながら食つてゐるといふ有様だ。幕が開くと早速、勇士ロランドが従者アルチネルラを引連れて飛び出す。兩人共足は床についてゐない。主人は甲冑に身を固め手には劍を握つてゐる。従者は總の着いた白い帽子をかぶり、袖の廣い白い衣物、靴下も白。丈は何れも二尺餘り、四肢は誠に自由でピョン／＼動き廻る。一九一二年のストリといふ人の記事にも、ジェノアでは是れに類した小屋を

劇場を造つたものだ。アントニオ・ラビアといふ貴族の如きは、全歐洲に有名であつたセント・ジョヴァンニ・グリソストモといふ本物の大劇場に、舞臺、見物席、場内裝飾、機械装置、配光仕掛等、寸分異はずに模倣した小さい劇場を操りの爲めに造つた。尙、その人形は蠟及び木製であつて其の衣裳の如きも本物に劣らぬ頗る立派なものであつたといふ。

トリノにはルビ兄弟の經營になる著名なる劇場がある彼等は旅藝人であつた祖父及び現在の劇場を建てた非常に才のあつた父より、其の職業を受け継いだのである。人々は彼等二人の兄弟を尊敬してルイジ一世、ルイジ二世と呼んだ。然し今日ではその内一人が生残つてゐるのみだ。彼等は世界中に興行して歩いた。プエロス・アイルスからロンドンへ、シカゴからベニスへと。その上演種目も非常に廣く渡つたもので、神話から歴史、現在の都市の出來事から博物學の事に至るまで上演して見せた。従つて其の舞臺も誠に種々で、天上界、地獄等を現はすかと思へば、支那、カリフォルニア、グリーンランド等も見せた。そして古いコメディア・デル・アーートの系統のものを演ずる一方、ベルデイの歌劇も演じた。

ボログナ市でもフィリツポ・クコリによつてなされた操りが一時盛大を極めたことがある。その子アンジェロは一

見たことがあると書いてある。先づ小屋の入口で切符賣に『あの劇場内の太鼓の音は何だ』『尋ねると、賣子は早速『あれはバツタグリオ』といつた。』『戦ひ』といふことなのだ。然し、此處の争闘劇は争闘に終始一貫せず、終りに綺麗な踊りが附いてゐるといふことである。チャールズ、ダッケンズの『セント・ヘレナのナポレオン』を見た話や、驚くべき程巧みに目を動かして變な目附きをする人形の話など随分興味あるものだが、人の廣く知る所でもあり、且つ餘り長くなるから此處には省く。

ゲーテはネーアルスの人形芝居に非常な興味を持つた。當時其處では地方的興味を持つた總ゆる出來事が操りの舞臺にかけられた。アルチネルラは屢々餘りに野卑になつたので、良い婦人達は此の小屋に入らせなかつた。然し個人的には屢々上流社會の人々の席に招かれて婦人の前でも演じられたといふことである。又操りが街頭で見られるのは極く普通であつた。尙、アルチネルラは口の内に小さい金屬製の笛のやうなものの仕掛があつて、キー／＼と變んな聲を出すやうに出來てゐた。

尙、ベニスに於ても十八世紀迄は操りが非常に盛大であつた。十六世紀頃にはイタリー一體に貴族達の間で操りといふものが一つの流行となつた。従つて此の時代にはベニスの貴族達は争ふやうにして各自の邸内に立派な人形の小

九〇五年迄民衆を引きつけてゐた。尙此の市には、ゴルトン・クレイグが單にマエストロ(巨匠)と尊敬して呼んでゐる操り師が居た。彼は時計造りであつたが、操りの方面に非凡の才を有してゐたものである。

此の他にシシリ島に於ても操りは頗る盛んであるが茲には省く。現今イタリー全土には大小合して四百に近い操り劇場があるこの事である。勿論此の外に是れに倍する旅藝人の屋臺のあることも忘れてはならぬ。人形も變つて來てゐる中にはマカロニを食ひ、煙草も吸へば酒も呑む、カルチオフォといふ人形なごもある。

現代劇作家時代劇總覽

(大正十五年八月號所載定價五十錢)

歐米戲曲翻譯總覽

(大正十五年十月昭和二年一月號連載定價各五十錢)

右は大變便利なものとして好評を博しました。御希望の方には各二十錢づつでお頒ちいたします。

リチャード・テシユナーの スタチオ片影

倉橋巖 二一

人形は、先づ亞細亞に印度民族の手に依つて、王國を建設した。ガンチス河畔に、絢爛たる白花の園に圍繞され、壯嚴なる宮柱の間より中宮に水を噴き、集めて園を巡る小流ある宮殿の冷寂を攪き亂す物音は何一つなかつた。唯宮殿の奥深き一隅は鋭敏な人形師の心の動に絶へず破られてゐた。其處では、崇高なる靈の偶像が、古代民族の信仰の對象たる像が成作されてゐた。此の偶像は創造物の讃仰神への感謝、生存及び死後の生存の歡呼の日に儀式に列し、現代の完全なる人形を産むに至つたと、ゴールドンクレグは云つてゐる。

フワウストの作者ゲーテは小供の時代に見た、旅廻りの傳統的民族劇を取り扱つた、人形芝居に靈感を授かり、人形芝居で成功せざる脚本は脚本としての價値なしと迄云つてゐる。

科學を有難がる近代人が侮辱する偶像は斯る影響を與へるに至つたのである。

イタリーには傳統的な人形プラッチニがあるが、近世の名人形師であり人形芝居の監督である、ヴィエンナのリチャード・テシユナーのスタチオを覗いてみよう。

彼リチャード・テシユナーは畫家として最も良く名を知られてゐるが、多

能なる彼の天才は、他の方面の藝術即ち人形作りにも優越なる地位を爲さしめた。彼の作つた人形は絲の端に愉快な跳躍をする、粗雑簡單な普通の人形ではなく、貴族的な非常に小さな小型の人形であるが、瞭然たる其動き、感傷的な、其の惱の表現は大膽な程微妙であるが、嬉樂の情は充分に出されてゐない。人形の動作は實に花車で、ジヤバのウエイアングの人形の様に動き錆びた象牙の様な古色がある。

彼のスタチオに入つて見るに、上手に區分され、裝飾は完備してゐる。壁にはテンペラ畫が二三枚懸つてゐる。彼は此のスタチオの中で幾多の美しい畫を製作し、又人形藝術の方面に才能ある事を證明した。其の部屋には又藝術の對象物で滿ちてゐる。彼の刻んだ硬玉、石鹼石、琥珀或は雪花石膏の幻想的像に東洋の寶石を鑲めた塗り小間物が散らばつてゐる。又室の一方

には暹羅の木彫り人形が燦然と金物を着て美々しく着飾り、また色採し鍍金した、奇怪な人形もある。

また種々の蒐集品入れの箱があり、此の中に奇怪な木作り象、虎或は變人の嬉びさうな奇妙な物が入れてある。

部屋の遙か端の方に黒い巾に蔽はれた、中央にほり附けた金の枠の中に、小さい金の戸のある、一大寶石箱かと思はすものがある。其れがカーテンの代りに戸のある人形芝居の前舞台の枠である。此の小劇場の附屬物はテシユナーが創造したもので、舞台、及び其附屬物、複雑なる配光、シーンの轉換特別の音楽或は樂器等總べては彼の手になつたものである。彼はパントマイムの筋を印度の傳説、バイブルに又は民族傳説から取りそれ等の舞台監督をやつた。背後には又彼が考案製作し衣裳を着けた多くの人形があつた。此の人形を彼は下から細い棹に依つて非常

に巧妙に操るのである。

テシユナーは助手を使ひ、或る時は彼獨りで人形を使つて人々に見せた、彼の舞台を描いて見よう。

スタチオの柔かい光線が消滅し暗黒となると、小さな金の戸の後から靜かに軽い一本調子の音楽が聞えてくる、と靜かに金の戸は開かれる、其處には半透明な背景があるが、それがあたたかも漣のボンヤリと浮いた珊瑚の花冠の様に見える。漣を通つた柔かい光線は背景の色を變へた重い泡が下に沈み煙の渦巻が上の方に巻き上る、乳色は緑、灰色、薔薇色を強く出し落陽の艶紫色、オレンジ色は暫時に消へ、節くれ立つた木が現はれ舞台は次第に薄暗くなり奇怪になる。變化する背景は雲の上、水の底かと半ば思はれ半ば見へる、此の仙境の惑亂の中に小像が恰も月の世界から天降つて來た様に軽い足取で奇妙に現はれた。其れは巴且杏の

目をした、花車な女王で、窮屈な頭飾を附け、錦爛のマントを着けて現はれた。女王はしとやかに又横柄に歩み、其の後を水の精が緑の奇怪な姿で魅せられた様に従いて行く。女王は恰も妖術者に導かれてゐる様である。女王は黒い剪切つた髪をした銀の外衣を着た美しい王子に戀をしてゐるのであらう。——此れが彼の人形芝居のシーンである。

彼のこの小劇場は五六のパントマイムがレバトリの中にある、其れに要する學生、小母、小供等が妙なビダーメエアー地方風に工夫した衣裳を着けてゐる。東洋の王子王女よりも目角のある妖女妖夫や怪物が、愉快なコロ、夫人が、又小さな人物が元氣のなさそうに絹枕の中の小さな馬車に凭れてゐる。コロ、夫人は輝やかしいスリツパを持ち、髪は鍍金され、纖弱な青白い顔を、如何なるポーズも自由に完全

になし得る身體をしてゐる。彼の作つた最新の人形はクリスマス劇の人形である、神聖なチャーミングなマドンナ、二つの金の天使、光り輝く一ツの天使長と三人の華美なマジギーに後全部の必要人物である。

吾人は彼の人形の完全を稱讃せずには居られない。柔かいリンデンの木で人形は作つてあり、其表面は絹の様に澤々と磨かれ巴且杏の眼や艶のある塗り類をしてゐる。人形の頭は左右前後に動き、其のすわりとした自由な身體は容易に又ポーズ良く屈伸する様になつてゐる。全く考へも及ばぬ巧みさと精確さを以つて、注意深く此の各々の小さい腕膝頸を完全に彼は作つてゐる。

彼テシユナーは其の精妙な人形製作に於て他人の追従を許さない。其の上彼の操りはそれ自身藝術である。尙塑像的、繪畫的美のある上に此等の人形

の一舉手一投足は其の最も明らかなる性格の表現である。動きは人形の至高の才能である。

テシユナーの人形の批評に斯く云はれてゐる。即ち人形の藝術手練の極至であり、人形は完全すぎ、精巧過ぎ、そして傳統的な人形の姿よりも余り複雑過ぎ、眞の天真爛漫さが有り過ぎるのであると、云はれてゐる。此の批評に偽りは無い。確かにテシユナーの作物は熟練家のデリケートな腕の至高が産み出したものであり其れを喜ぶ者を又教へるものである。彼の成功は古い民族藝術と區別する何物かである。

× × ×
× × ×
× × ×

シラノ・ド・ベルチユラツク 猿を斬る

ロスマンの名作「シラノ・ド・ベルチユラツク」の主人公は、白野辨十郎氏にして、わが日本に於ても、芝居好きの誰知らぬものない人物で、また直ちにその大鼻を連想させられるが、彼が實在の人物である事も今更云ふを要しないであらう。

或日、彼シラノは途上で、人形芝居の屋臺につき添つてゐる一匹のオドケた猿に出合つた。鼻に就ては甚だ敏感な意識を持つる此詩人は、此オドケた猿がどうやら自分の大鼻をからかつてゐる様に思つた。

彼はカツミなつて鼻を引き抜いた。猿も心得たもの、詩人の眞似をしてちつぽけな木の鼻を抜いた。シラノ先生すつかりのほせ上つて、前後不覺にその不幸な猿を斬り殺して了つた。此評判は忽ち巴里中に擴がり一六五五年匿名氏著「シラノ・ド・ベルチユラツク氏猿を斬る」よ云ふパンフレットが發行された。

社會意識と劇

坪内士行

いつであつたか、東京の某誌で、將來有望な青年俳優は誰であるか、と問を出したら、その答の十の八までは六代目尾上菊五郎であつた事を覚えてゐる。

今さら云ふまでもないが、俳優の人氣と云ふものは、衣裳の流行同様、その年々に移り變りがある。栗島すみ子から水谷八重子、それから岡田嘉子へとの三轉は映畫の方で一ときわ目立つた變轉であるが、その時のハズミで、守田勘彌が將來の日本劇界の霸王であるかの様に思はれた事もあれば、猿之助こそ唯一の新人の如くに持上げられた事もある。嘗ての左團次熱もかなり激しかった。

さうした移り變る俳優の人氣不人氣などはどうでもよいが、今此處に六代目菊五郎禮讚の聲を一つの縁として、社會意識と劇についての感想を記して見たい。

六代目菊五郎が現代での最も優れた俳優の一人である事には、僕とて毛頭異存はない。然し、彼が目下の如き心情生活に浸つてゐる限り、彼は到底將來の俳優ではないと斷

言してはゝからない。その理由は、彼に何等の社會意識がないからである。

何等恩怨のない六代目を槍玉にあげる事は誠に氣の毒であるが、彼は現代社會の一員として生存してゐるに拘らず、又、かの彫刻や繪畫のやうに、一人閑居して技巧を弄してゐるすむ藝術とは異つた、民衆相手の演劇にたづさはつてゐるに拘らず、自分の取つてゐる給料さへ知らずにゐるのを誇つてゐる人物である。恐なる哉その丁番根性！と云はざるを得ない。これは恐らく彼一人ではあるまい。仁左衛門などもさうやらさうらしいし、其の他舊式な門閥俳優中には、かうした時代錯誤の自尊心をもつてゐる者が随分ある事であらうと思ふ。いや、俳優ばかりではなく、文士の中にもあるらしい。否、ある。現に永井荷風氏などは公然とそれを書いてゐる。それはいけない。

何故いけないか。藝術家は金錢問題に超越して、ひたすら藝に没頭すべき

である、世間の俗悪な空氣や、有爲轉變を顧慮せず、ひたすら術を練るべきである、と、昔の人は云つた。芝翫は金貨と銅貨との價值判断さへつかなくなつた名人であつた、さか、昔の振附師は、櫻の花ピラを拾ひあつめて手毬するロマンチックな衝動をもつてゐたものであるとか、其他藝術家が理智的でなく超現實的である事を賞讃する類のエピソードやアネクドットは屢々聞かされる。が、それはその時代にあつてのみ尊く、又、うなづかれる心境である。世こそつてロマンチックな時代にロマンチックなのは當然であり、封建時代に民百姓が政治其他に無關心なもの止むを得ぬ事とも云へる。然し、問題はこれからの事にかゝつてゐる。

荷風氏は某紙に己の態度を判然と書いてゐた。それによれば「自分は書きたいために書くので、それを人が讀もうが讀ままいが關する所ではない。」と云ふ意味の言葉があつた。何かに激することあつての文かも知れないが、甚だ時勢には合はない言葉である。所謂「武士は喰はねど高楊子」式で、今の世にあつてはむしろ奇怪な態度と云はねばならぬ。然し、これは前にも云つた通り、一人閑居して筆取る者としては云ひ勝ちのことで、浮世離れた樂隠居や、金持ちの若旦那のお遊び同様、あつてもよく、なくてもよい仕事として看過しておける。

の苦しみ、現代の悲しみ、現代の喜び、其等について無關心である者が、さうして將來の藝術界の牛耳を取る事が出來ようぞ。藝術活動は人間社會活動の一部分である。社會から飛び放れての藝術運動は、考へる方が間違つてゐる。廣く世界を觀察出來ればこれに越した事はないが、日本だけについても、その財政状態、その政治の有様、その對外關係、其他社會一般の事象に細心な注意を拂ふと云ふ事は將來の藝術家の最大準備の一つである。

さう云ふ時に當つて、自分の取る給料を知らず、米鹽の値も知らず、經濟事情に逆せぬのを自慢する俳優が劇界の霸王たりうるわけがない。いかに部分的の技巧に優れてもいかに傳統の藝術には通じても、それで將來に向つて基礎を固めたとは決して云へない。せいゝ過去を參考的、博物館的藝術殿堂に閉ぢこもつて、『閑居しての藝術三昧』にふけるのが關の山であらう。それも亦無用であるとは云はないが、一般民衆に取つてはあつてもなくてもよいものになるだけの事である。

現代の社會は？その演劇？

さて、こゝにさうした社會を感じせんと力める時、それに應ずる演劇、それを演ずる俳優、其等はどんなものであらうかと云ふ疑問が發せられる。これに對しての解決が、或は五郎の喜劇となり、或は澤正の劍劇となり、或は東京に

演劇に至つてはさうでない。僕はアンリー・バルビユウスの所謂「藝術家はその藝術の結果についても責任を持たなければならぬ」と云ふ言に絶對賛成するので――（だから荷風氏の態度を攻撃したくなるのであるが）――あらゆる藝術は皆さうであるべきだと主張するが、特に民衆に訴へる藝術としての演劇に至つては、片時もこの言を忘れてはならぬと信ずる。勿論「藝術家はその藝術の結果についても責任を持たなければならぬ」と云ふことは、決してただ單に社會意識を露骨に示した努力のみをせよと云ふ事にならぬ。何々の主義のための藝術、何々を諷刺せんがための努力、と云ふことのみには限られない。いや、實はさう露骨に意識しての藝術よりは、現社會に生活し、現社會を感じ味はひ、その善惡ともにヒシ／＼と體得した藝術家の藝術の方が、遙に尊い。即ち、これを押しつめて行けば、藝術家はその時代の社會意識を充分に嚼みしめて味ふ人格者であるべきで、さう云ふ人格者は結局充分にその藝術の結果についての責任を負ふ覺悟のある人だ、と云ふ事に歸する。

藝術のための藝術とか、藝術家の超現實的態度とかは、少くもこれからの社會では許されない事である。詩人の空想は自由であるが、その根本に於て現實性がなければならぬ。社會意識から出發したものでなければならぬ。現代

近頃續々と現れる勞農ロシア劇界を模したやうな新劇團の企てとなりつゝあるのであるが、それ以外に、又それ以上にもつと現代社會に適應した形式の劇、又は劇團は生れぬものであらうか。民衆はもつと時代に適した新しい物を要求してゐるではなからうか。

從來「劇」と云ふ名の下に培れて來た形式以外の物にさへも其の憧れの目を向けてゐるのではなからうか。新「遊藝」！ さうしたものが生れねばならぬのではなからうか？

すべては大きな？である。

劇壇無禮講座

大阪名物、否日本名物の文樂座が眞晝間一瞬にして灰燼に歸した。氣早な連中は心でから此日本名物の淨瑠璃人形芝居が亡明日了ふかの様に立騒いだり議論を合つた。當面の問題は御雲で賣り込んだ文樂座を他へ移す事の可否であつた。大體御靈壇内再興論者が多かつた様に思ふが、よし再興するとしても興行は休めない。まあ兎に角云ふので正月からの辨天座の移轉興行である。處がどうであらう、櫛をならべた他三座が正月興行にしては餘り成績を擧げてゐないので、此處人形淨瑠璃は正月二月引續いて大入満員とある。

此現象を何と見る？

此講座で論ずるには餘りに大きな問題であるから、これは諸君にみつちり研究して貰ふとして、松竹合名會社は「おこし」や「雁治郎」程に肝心の大阪人が此名物の存在を意識しなかつた事に氣がついて、定めて愕然欣然たるものがあつたらうと想像されるべきものである。

れる。勿體ない事である。
かうした際に本誌が「人形芝居號」として現はれた事はいさゝか意義のある事と信する。

× × × × × × × × × ×

曙光なき大阪劇壇！
雁治郎が眞白にぬつて敦盛になる事が唯一の賣物になる大阪劇壇。

諸君よ！救はれないではないか。

× × × × × × × × × ×

本誌前號に池津君の「雁治郎尊重論」が出てから、方々で其尊重の可否が論議された。何と云つても問題にされるだけ雁治郎は矢張偉んだ。尊重するもしないもない。他に問題のない、大阪劇壇を先づ悲しみたてではないか。諸君！

× × × × × × × × × ×

喜多村が新派革新の旗を擧げて雄々しく乗り出して来たものゝ、どうやらその旗を巻いて了つたらしい。

新派もすでにクラシクである。クラシクとして完成するならまだいい。なまな

か「現代」を呼吸しようとするのが間違ひである。舞臺に呼吸させよう努力してゐる「現代」を、彼等は彼等の「生活」に於て呼吸してゐるか。總ての革新は其處から始まるのだ。生活改造を志さずして舞臺革新を企てる事は（——此處に最も適切な比喩を讀者の中から求める）の如しである。

正月興行の「小春妾結」や「小猿七之助」を一樣に道楽芝居と評し去られた。彼等は此批評を聞いて、舞臺を蹴つて憤慨したか。彼等にすればそれは決して道楽など云ふ生ぬるい言葉で現はさるべき舞臺ではない。天下別目の劍劇以上の眞鍮な舞臺ではないか。而も觀るものはこれを道楽と見る。悲しむべき矛盾ではないか！

× × × × × × × × × ×

關西には今、たゞ一人僣れた女優がある。

三好榮子！今國民座にゐて淋しい觀客の前に立つてゐるが、彼女の舞臺は新聲劇ありて大觀衆の前に立つてゐる時よりは一段と輝いてゐる。個人の三好榮子として尊敬すべきものがあるかどうか、それは全然

知る處でない、が舞臺だけの三好榮子はたしかに尊敬していきと思ふ。「月光の下」の妹「靈験」のお酒子など一國民座としてではなく、大阪劇壇の傑作として當然推奨されるべきものである。

× × × × × × × × × ×

君がそんなに三好榮子を推奨するのなら僕に一つ國民座の悪口を云はして貰はう。

何號かの本誌で「ワインゾアの陽氣な女房」を合評した時、國民座は迷つてゐる、と誰か云つた。その後大分月日を経つがどうも未だに迷つてゐる様ぢやないか。

小林さんに云はせると國民座程はつきりした意見と理想を持つてゐる劇團はない相だが、おかしにいれ。こんな事を云つたらお父さんの様な小林さんに叱られるかも知れない、あの人に演劇に就て深い研究や批判があるとは思はれない。研究と批判から生れない理想は尊敬出来なないよ。そりや何と云つても電氣事業家としての小林さんの方が演劇革新家としての小林さんより餘ッ程偉いさ。その方の理想家としてまた實際家としてには實に尊敬して餘りある人だ。新派

ぢやないが「國民座は小林さんの道楽」の城を早く脱して貰ひたいものだ。切願。

× × × × × × × × × ×

本誌編輯中に期せずして、道頓堀東の端辨天座には文樂の人形芝居、西の端の松竹座には人形座、その中間の花月では結城孫三郎の操人形、三者競演の形である。文樂及び孫三郎の技巧と人形座の精神、その批評は京極君が書いてくれてゐる筈であつたが、切に間に合はなかつたのは残念である。

× × × × × × × × × ×

演劇新潮が二月號から内容體裁をすつかり變へて了つた。唯一の文學的演劇商賣雜誌が經濟的にその存在を脅かされること云ふ事は決して人事ではない。文藝春秋社の經營にして、其上に他に競争誌のない現狀にして、尙かつこの結果を見るとき云ふ事は、我々に取つて一寸不思議にさへ思はれる。賣れないこと云ふ事は、物の悪いこと云ふ事にはならない。演劇新潮は日本に於ける演劇雜誌として決して編輯の悪い雜誌ではない。では商賣が拙いのか。文藝春秋社にして萬々そんな事のある筈がない。而も經濟的に

存在が許されない。其病根は果して何處にあるのであらうか。

劇その者が映畫に壓倒されてゐるが爲めであらうか、演劇は見るべきものにして讀むべきものでない、と云ふ傳統的觀念がまだ此國の芝居好きの頭を支配してゐるが爲めであらうか。演劇新潮一冊が我々の中に存続し得ないこと云ふ事は何としても慨嘆にたえないと共に、我々に充分考ふべき問題を提供したのである。

× × × × × × × × × ×

本誌は印刷間際に急に印刷所が變つたので編輯者として甚だ意に滿たぬ點が多い。誤植其他不體裁な處が多い事と思ふ。次號からは内容體裁共に一新する事にしてゐるので本誌だけはお見逃しが願ひたい。講座の末席を借りて陳謝する事如件。

日本操人形芝居略史 山下良三

第一期胚胎期。(—1620)

あはれ傀儡子よ。首にけかたるその箱の、うちに秘めたる数々の人形を、口すさむ歌謡のふしも面白く、操り舞はせて人の家の軒々を氣まゝ自在な流轉を續けてゆく特殊な流浪の民は、人情は遠へ西洋にも東洋にも共に存在したところのもので、意氣なこのポヘミアンたちの遊牧の余技になつた人形操りが、西歐にあつてはイタリヤを中心としたマリオネット劇となり、東洋のそれは、取りも直さず我國の操人形芝居となつて、その絢爛な藝術を誇つたのである。

最も普通に行はれるところの想像は

この傀儡子と稱せられる、大和民族とは生活の様式を異にした或る特殊な遊牧の民が——これは印度の西北部から出たらしいジブシイの一群であるのだが——これが西域地方から支那へ向けて漸次に東進し、更に南折して朝鮮に至り、進んで本州に渡來して來て、遂にわが傀儡子族となつた云ふ説である。

さて傀儡をクグツと訓することは、早く「和名類聚抄」中に發見することが出来るが、この書の原本は源の順が紀元一六三二年(西暦995)に編輯したものであるから、クグツなる名稱は無論それ以前に已に流布されてゐたものと見るべきである。傀儡、即ちクグツに

關する考證は「續燕石十種」中の「燕證錄」に、

久々都の名義を考ふるに、日本紀に木祖久々能智とある。久々は莖にて、草木の幹をいふ、智は男を尊む稱なり、智と都と通音なり、又大殿祭祝詞に、久々運命とあるなど、按ふに木もて作れる人形を舞はし勤かす時は、神あるが如くなるゆえ、さば名づけしにや。

云つてゐる。だが要するに偶人を舞はせて娛樂に供すると云ふ事は、わが王朝時代、即ち西暦900年代には已にもう盛に行はれてゐたものと假定して差支えない事と思ふ。

さて王朝時代に於ける彼等の生活が如何なるものであつたかは、彼の「傀

儡子記」並びに「本朝無題詩」等の記録によつて知ることが出来るのであるが、殊に前者はよく彼等の生活を傳へて余蘊がない。彼等のそのジブシイな、ポヘミア魂の、與太ツ八な、そのくせ無智で、無條件に神におびえるやうな生活は、吾等をして一讀直ちに後年の操芝居を連想せしむるに充分である。

さてこの傀儡子族と云ふのは、今の言葉で云ふと、取りも直さず特殊部落の民だつたのである。それは「傀儡子記」の中の「不耕一畝田、不採一技桑、故不屬縣官、皆非土民、自限浪人上、不知王公、傍不怖牧宰、以無課役、爲一生之樂」と云ふを見てわかることであるが、また「穰多卷物」なる書に、「四十八番手下の次第」と記して、第四番目に傀儡師、及び第四十一番目に出狂房廻の名があげられてあるが、そのいづれによつて見てもわが傀儡子族が、今日で云ふ意味での特殊部落民であつ

た事は明白なる事實なのである。ところでこれらの一族が、何處から來つたものであるかと云ふ事は、前にも一寸述べたところであるが、今少し説明を敷衍するならば、「百家説林續編」の「難波江」に、

市尹要覽にいはく、穰多は燕の國の太子丹が末孫也、昔難風に流漂して日本へ著岸したるが、朝夕いさほみなくて、山林に入りて鳥獸を取りて食事をしける。其の地神道盛成る故、人穢を忌みて穰多といひ習はしけるなり。故に人家の交りならずして、町並をばなれ性みける故に、町離さも云ふ貞觀儀式にみえたり。

とあり、また「老牛餘喘」の初編には、和名鈔に、屠兒殺生及屠牛馬肉販賣者也とあり、此の者は、六國史、類聚國史などに俘囚、また夷俘と有る者にて、昔蝦夷人の皇國に仇せしを征ちてさらへした、諸國に分ちおかれたる者どもの末也。と云つてゐる。また白石全集の「白石先生手簡」には、西蠻より來り候者は末孫に御座候也」と書いてゐるが、西蠻

から來たものにせよ、皇國に仇した蝦夷人の末孫にせよ、燕國太子丹が孫子の末にせよ、そんな事は別の問題として、とにかく傀儡子族といふものが、支那より流れ著いた特殊部落民であつた事は間違ひのない事實なのである。尙その上「クグツ」と云ふ語が朝鮮語であると云ふ安藤正次氏の説(久具都々義考)を知るに至つては益々この説を信せずには居られぬのである。

さてこの傀儡子の一部族が、如何なる方法によつてか、ともかくも我が日本へ流れ著いて、さて彼等の定住地と定めたのが攝津西の宮の産所部落だつたのであらふ。無論彼等のすべてが西宮の産所部落に落ち着いたわけではなからぬ。彼等の一部が西宮に來つたのであるが、これが即ち西宮の夷社の支配をうけるやうになつたのである。もともと夷神と云ふのは蕃神かそれとも出雲神かは姑く不明にしても、賤民によつて尊信され來つた神ではあるらしく、

それにその當時、即ち室町期は福神信仰の旺盛な時代であつたから、西宮の夷神もその御多分にもれず繁昌を極めて居たに違ひない。かくて傀儡子は、早くこゝに定住した者も、定住者以外のも一層西宮の夷神及び百太夫に對する信念が高まると共に、次第に西宮に集つて来るやうになつて、集團が成長し膨大したものと推察せられるが、一方に又従つて其の傀儡の技術も進歩發達したものであらふ。

彼等が西宮に定住したと云ふことの別の證明は、本居内遠の「賤者考」に、
 夙さいふ地諸國にありて、本村なるこ、技郷小名にてあるこ、くまぐなれど、皆普通の里民より思ひて嫌を通ぜず、同火はいむ所忌まざる所ありて、何故に忌むさいふこを知らず、夙は守戸の轉稱にて、即ち昔の陵戸などの残れるならんこ、或人の云へるもうべしく聞ゆ。
 があるが、現在西宮の西方に流れる川を夙川と稱することより推しても、當

時そのあたりに夙があつて、それが即ち西宮産所の傀儡子の部落であつたのではなからうか。これは一箇の獨斷ではあるが、多分誤りないものであらうと思ふ。

かくて鎌倉時代に入るに及んで、これらの傀儡子は一般の生活に同化するやうになり、彼等のうちの女性性は娼婦になつてわが花柳史の第一頁にその姿を現す次第となる。但しここに一言特別に注意しなければならぬ事は、遊女と傀儡女とは、櫻春や百太夫信仰と云ふ點では共通であつたけれ共、社會はいつに至るまでも部族ごしても名に於ても、これら兩者を決して混同すると云ふ事のなかつた事である。この點に就ては今までも随分誤つて傳へ説かれたところが甚だ多い。「下學集」に「日本俗呼遊女曰傀儡」と云つたのは大なる粗漏である。「新群書類從」の「竹堂故事」に、

和歌雜題には傀儡といふ、でくやつと訓

て遊女の事とす、傀何ぞ遊女に限らんや。惣て人形舞はし事成るべきを遊女の事に限るやうになりしとぞ。思ふに攝州西の宮より人形舞し世間を廻りて、始めて遊の人形を第一番に立て遣ふ。これより轉じ來れり見えたり。

と云つてゐる。
 南北朝時代には既にもう傀儡子と云ふ完全なる専門的職業になり、「看聞日記」永享二十七年(1385)の條、奈良大乗院の永享十二年記(1380)と云ふ信す可き記録によれば、この當時すでに操人形に錢を與へて舞はしめたこと云ふ事が記録されてゐる。

續いて此の傀儡は淨土宗と盪手して生活の安定をつくつたと云ふ。南都山嶺の遊僧が歌舞の群にも交り、又は寺の行者となつて神社や佛閣の縁起物語を人形の演技によつて世俗の人々に見せた、これが即ち後世に於ける操芝居の基礎をつくつたものなので、徳川初期の操芝居の所謂、本地物と稱する狂言の形式に残されてゐる甚だ色彩の濃

厚なる影響である。

かくして織田豊臣時代に至つて、即ち元龜天正(1574-1585)の頃よりして傀儡子なる名稱は「夷昇」なる名に變つた。「夷舞はし」と云ふも同義である。これ即ち傀儡子と西宮との重大なる因果關係を語るものでなくて何であらう。即ち西宮を定住地とせる彼等傀儡子達が、だん／＼職業的なものとなつて行つて、その結果地方へ巡廻して傀儡をもつて生活の資となした事を知る所謂である。こゝに西の宮と各地との操人形の第一の關係が發生する。若し西宮操りが西宮にのみ存在して、あへて他地方へ移出されないものであつたならば、これに何等西宮操りなる特稱を附するところはない。しかるに「夷」なる語で、代表されるやうになつたと云ふのは、とりも直さず西宮操の職業化と同時に對外的なる働きによるものと解釋しないで何ともしやう。

さて「竹堂故事」に、

枯木葉に曰く、傀儡とは出狂房廻はしの事なり、是れを詩の註には滑稽優人といへり滑稽とは嬉游言を云ひて人を笑はする也。優人とは猿樂の事にて、狂言をする者なり。是れみな傀儡子の類ひ也と云々。諸社神誌の記に曰く、西宮惠美須太神御宣託に、年の始めに諸々の民爾笑於權左世、勇勢而、富貴於謙幸と云々。此の神託に依りて、往古より此所の民、春の初めに女人形に吳服の所作事を舞はず也。是れを紗の／＼衣と號せり。その外、相なる人形を舞はし、京都をばじめ國々を廻り、獸の皮を終に出して悪い事した者は山猫にかまさうと威す。是れ上代の勸業懲惡の誡め、實業正直の神の教への遺善、出狂物を舞はして笑ひを進む。此の故に此の傀儡師を神道秘要には惠美須賀賀と號する也。

と云つたのは西宮人形操の根本の發生義を示すものであり、次にまた「夷昇」の地方的活躍を物語る記録としては、

「御湯殿上記」に、
 永祿天正の頃大内へ夷昇参りて御車寄等

にて度々人形を舞はし御覽に入れし事あり、或時の如きは能の所作を演じて巧妙眞の能に迫りし由記せり。その頃は王室式微の極に達し御營繕等も十分行届か、す御樂地の垣破れたる所などありて人の出入を許しければ、是等の行路藝人迄入込み、畏くも天額に咫尺し奉りきと云ふ。と云ひ、また「大日本史料」にも、夷昇きの所演のことに就ては、慶長十八年(1613)二月十六日九月十一日、同二十一日の數度に及んだが、その中二十一日の條として、

九月二十一日、雨天、院參飯後阿彌陀胸切と云ふ曲を仕、夷昇の類の者推參於御庭綴子輩等を引廻、有曲奇異の事也。又賀茂大佛供養、高砂等の能をも仕候。と記されてあるが、これは「時慶卿記」にも記載されたところの事實である。また「東海道名所記」(萬治元年、丁意撰)に、

京の次郎兵衛が西の宮の夷昇(引田淡路椽)を語りひ四條河原に芝居を建て鎌田政清、こわうの姫、阿彌陀胸割など云ふ

淨瑠璃を語りし由見えたるが、けだし此頃の事なるべし。これよりさき後陽成天皇は慶長十六年御位を皇太子にゆづり給ひ、閑散に在しませければ院御所にて麗操を御らんせられしか、此の御前演藝に際し一座の重立ちたる者に受領の御沙汰ありしもの、如く、それから後に太夫受領の濫觴となりしなり。

と記してゐるが、これらの事は改めて次章で詳説することとして、こゝでは只この傀儡廻しの最も後世の代表的型式とも云ふべきものゝ記録を紹介して、胚胎期の項を終ることとする。

傀儡師を江戸の方言に山れこといふ。人形まはし也。一人して小袖櫃のやうの箱に人形を入れ背負ひて、手に腰鼓をたきながら歩行く也。小童其の音を聞きて呼び入れ、人形を歌舞せしめて遊観す。淨瑠璃は義太夫ふしにして、三絃はなく蘆屋道満の葛の葉の段、時頼記の雪の段の類を、語りながら人形を舞はし、だん／＼好みも終り、是れ切りといふ所に至りて、山れこ云ふ颯の如きものを出し

て、チ、クワイ、こわめきて仕舞ふなり。我等十四五歳頃までは、一ヶ月に七八度づゝ來りしが、今は絶えてなし。これは「燕石十種」中の「塵塚談」の載するところであるが、この書の著者江戸の町醫小川顯道は元文二年の生れであるから、彼の十四五歳といふと、實暦元年(1753)前後の事なのである。これ首掛けの箱芝居、即ち一人廻しの傀儡師の、正に亡びんとする最後の姿なのである。

第二期、創始期(1600—1680)

日本操人形芝居の父を西宮百太夫とする。これは今日最も普通に行はるゝところの説である。先づ西宮百太夫と操人形芝居の起原に就ての考説をのべやう。さてこの操の起原を語る所傳に二種のものがある、その一が即ち「音曲道智論」の傳ふところ、他は「淡路座秘書」のそれである。

「音曲道智論」の傳ふところは、攝津西宮の社家に森兼太夫と云ふ者があつたが、これが同じく西宮の神主森丹後と云ふの争ひを起し、結局兼太夫が敗訴して同國尼ヶ崎の稱念寺と云ふ寺に身をよせてゐるうちに、渡世の爲に古い經櫃を造り直して小さい人形數箇を造り平家に似た節の自作の唱歌に合せてこれを操る事を案出したが、後に京に上つて傀儡師を業とした。時に内裏が災上して未だ工を竣へない。ある日若宮様が築地の隙からこの兼太夫の箱芝居を御覽になつて、堂上堂下も見物せられ、色々の御褒美の引出物を賜つた。後「日本操座宗匠諸藝諸能冠」と勅免あつて、名を上村兼太夫と賜はり、その後天正五年(或ひは天正三年とも云ふ)口宣を拜して上村日向椽原百太夫と云ふことになつた。これ淨瑠璃太夫受領の始である。傳へられる、斯くて後、淡路國三原郡三條村に所縁があつて立越え、人形操りの技を

貧困の田夫に教へ、城主の免許を蒙つて操座四十八座を取建てた。國々へ銘々所持する口宣はその寫しであると云ふのである。

次に淡路座秘書の傳ふところは「樂屋團會拾遺」や、「南水漫遊拾遺」等の引用してゐるもので、それによると、諸冊二神の御子の蛭子神が西宮の浦に漂ひ着いて鎮座しましたが、後の世に至つて道薫と云ふ者が、この神の御心を慰め奉つたので風波が静かになつて漁獲が多かつたところがこの道薫が暫く病氣をしてやがて死んで了つた後は、又風が起り波が高まつて獵がなくなつて了つたので、百太夫と云ふ者が人形を作つて神前の箱の傍に身を潛めて、その人形を以て「我は道薫なり、尊の御機嫌を伺はん爲参りたり」と云つて神慮を慰めた。これから後はまた波も静まり獵も多かつたと云ふ。

時の帝がこの事をおきよになつて、この百太夫に禁庭の祭毎に出動すべしと

勅定があつたので、彼は都に上つてその儀を勤めた。これによつて「大日本者神國故以慰神慮者爲諸伎藝首」といふ官符を賜はり、諸國諸神社いさめの事を勅免になつたので、百太夫は胸に箱をかけ人形を舞はして神いさめをし乍ら諸國諸神社を巡つた。これが傀儡師の始めである。彼は諸國をめぐつて淡路國三原郡三條村で歿したが、時に四人の弟子があつて人形操りの技を習ひ人形のわざをした。これが淡路座操りの始めである。中に最も名高いのは上村日向椽である。云ふのである。

百太夫を語る所傳は大體以上の二つであるが、尙十三世源之丞氏が明治の末年に編纂した源之丞由來記(引田記録集)によると、百太夫は諸國を巡り乍ら、遂に淡路國三原郡三條村に至り農家である引田源太夫の家に數年の間滞在してゐるうちに、源太夫の長女某に契つて、文正二年養子のやうな身分となりて一男を設け、村人に傀儡の業

を教へ、これより淡路の人形の名が高くなつた。後百太夫は病んで遂に歿し引田家の祖先として今にその靈が祭られて居る。一子は即ち源之丞で、後に聲譽を博したとある。

さてこの文正二年又は天正五年なご云ふ紀年を持つ森兼太夫の方は別として、道薫坊や百太夫はもと／＼架空の人物であるから、これらについての所傳はつまりは一種の傳説にすぎないものなのであるが、前記の源之丞由來記にはかゝる傳説とはちがつて史實だとして記載されてゐるものがあるからこゝに先づそれを一瞥してみることゝしやう。

元龜元年二月源之丞は後陽成天皇の御召出によつて上洛して操を以て三社神樂の式を奉仕し、左のやうな繪旨を賜はつた。
 殿取蘆島三條道薫坊相繼引田淡路椽任今般於禁裏節會三社神樂之式奉捧依之從四位下叙也天氣之處如件

尙同年五月に

矢倉ハ夫レ梵天帝釋梵天ヲ歡請シ日愛ノ
吉凶太鼓ヲ以テ天帝ニ告ゲ惡魔ヲ退ク群
參薛ヲ禡テ除ク者也天氣之處如件
その後年々節會に參列し同技を演ずる
こととなり堂上家下臣の格に准せられ
左の詔命を蒙つた。

日本第一踏藝業能 從四位下引田淡路權
次に文祿年間には豊太閤が人形の引
田を召して四條河原で操を御覽になつ
た事は有名な事實である。また淺井
了意が選した「京雀」(寛文五年版)に
は、

五條の大橋通りもさば六條坊門通と云ふ
この大橋は東の川端に人形操の芝居を構
へ細き假橋をかけて侍りしに太閤秀吉公
の時伏見より禁中へ參内し給ふ道筋なり
さてこの大橋をかけかへられ人形あやつ
りの芝居をば今の四條河原へ移されたり
と云ひ、水谷不倒氏が「繪入淨瑠璃史」
には「これ文祿中の事なり」と註してゐ
る。また「老人雜話」には
秀頼伏見より上洛毎に御幸町通を來る。

狹箱の大きな箱に、人形のあやつり有
りて錢を入れれば轉倒するを、毎々歩行の
者負ひて輿の先にゆく、その時獨眼の正
宗御幸町にて奪いとり、負ひて輿の先に
行きけるとぞ。

と云つてゐる。次に慶長五年例の關ヶ
原の戦の時にあたつて、當時の徳島城
主蜂須賀侯(至鎮)から江戸へ密書を送
るのに、諸國の關所がすこぶる嚴重だ
つたので、阿波の武士共は源之丞の人
形操師に變装して無事に役目を果した
と云ふ。

この事に就ては三田村鳶魚氏の考説
が當を得た面白いものであるから同氏
の「淡路の人形座」を是非参照されたい。
尙人形芝居がいかにか蜂須賀家の保
護を受けたかは、矢張同氏の所記の如
く分明である。

淡路の人形座は上村源之丞だけではな
い。然るに彼一人でもあるやうに世間
では只だ源之丞のみを知つて他を顧みな
い。夫は藩主蜂須賀家の凄じい保護に依

るものである。徳島の三世阿波守忠英が
領内を巡視した時、淡路の樺田村日向寺
(後に日光寺と改む)に三代目の源之丞を
召して操を見物された。さうして上村さ
いふ苗字を下されし寺名を其の儘に日向寺
を受領せよとの恩命があつて、彼の受領
したのは慶安四年正月だつたと云ふ。そ
れで今日も引田某の藝名を上村日向權若
しくは上村源之丞といつてゐる。

一寸註を入れる。これは引田記録集
によると慶安二年三月、城主興源院殿
が巡國の際に日向寺へ御成りになつた
時源之丞の操を御覽に入れたら、其の
妙技日に向ふ如くなりしと稱せられて
日向権に任せられるやうにと京都の其
の筋へ上申されたので左の勅詔を賜は
つたとある。

已前引田淡路權ニ有之處日向權相改候事
令承知候依之元龜年中被下置候御書物大
切ニ可相心得者也
慶安四年正月

そしてこの時から日向寺は日光寺と改
められた。猶同時に京都から

引田日向權操興行中諸興行三里以内停止

の御達旨を得たと云ふ。その後再び
京都より、上村の藝名を賜つたとある
けれ共、その年代は明白ではない。こ
にかくこれから本姓は引田、藝名は上
村と稱ぶやうになつたと云ふ。

さてかくの如く蜂須賀家に取立られ
た三代目の上村源之丞といへば文祿慶
長の人であるが、後陽成天皇の天覽と
か太閤の上覽とか云つてはゐるもの、
その頃の人形芝居は如何なる状態の下
にあつたのであらうか。また一體何時
の頃からこの人形操りが淨瑠璃と提携
するやうになつたのか「八十翁疇昔物
語」に、

先づ淨瑠璃の初めは織田信長公大病後大
きに草臥れ、夜も寝かれ肥立ちかれ淋し
がり、伽には城玄勾當、角都(かくいち)
勾當、小野のおづと云ふ遊女、此の三
人晝夜はなれず、其の外若き特色々物語
り申す、然れ共毎夜の事故咄も絶えおづ

うは能書文者なれば何ぞ面白き文を作り
讀みて御慰みに入るべしとて、おづう辭
退申せども無是非さま一思案し義經志
やな王殿と申す時、吾妻へ下り給ふに矢
はぎの長者上り申す女にたはむれ給
ひし事をつかり出だし、よみきかせ申す、
ここの外面白がり給ひ一座感に堪ふる
計り也。後案讀ばかりにてはあき給ふ、
城玄、角都申すは是れにふし付けてうた
ひ候は、可然とて、その時分御領分よ
り出でたる丹後七郎左衛門、橋本筑後と
いふ頓作第一の利發もの、殊に聲わざ得
た者共也、この者共に任せてふしをつけ
上り御前の御事を作りたる故、名を淨
瑠璃と付けしより、上りりの名始るなり。
扱て右の上り語る計りにて後ばあき給ふ
故、人形の仕方付くるやうにと有之、西
宮の傀儡師を召し、文句のあやを仕形に
して人形をまはす、是れよりあやつり初
まる。

とあり、また「淇蝶菴翁草」にも同様
の記載がある。また「嬉遊笑覽」に、
横濱城にあやつりを淨瑠璃に合すること

は傀儡師に始まりと云ふ。傀儡師のこ
とは委しく考へて覆覧録の内に載せたり
羅山先生文集に傀儡師を見るといふ文章
あり。江戸第一僱師小平太といへり(東海
道名所記に、淡路之丞と受領せし夷かき
さいひしは異なるか)然るを事跡合考に
紀州洲人小平太、後淨雲と云ふ。この小
平太、西宮の傀儡師源之丞と云ふものに
人形を舞はさしむと云へるは誤りなり。
小平太は人形舞はしにて、淨瑠璃語り淨
雲とは異なり。

と云ひ、また「歌舞音楽略史」には、
「譚海」に淨瑠璃かたる者の某少様大様某
太夫など、稱する事、元來人形造りて禁
裏へ奉りし者受領號をゆるされけるがは
じまりなり。その後上りると云ふものを
語りて人形にあはせて操りもて遊びし間
おのづから上りを語る者勢強く、人形
を遣ふ者はその下に廻るやうになりたる
故、いつとなく人形遣ひの受領號を上る
り語る者にうば、れて稱することになり
たるなりと云へり。然もあるべし。

と云つてゐる。これは人形遣ひの受領

の名が淨瑠璃太夫のものになつてしまつたこの間の消息を明瞭に物語るものである。また更に同書に、

澤住が門人にて京都に目貫屋長三郎と云ふ者あり。西宮の傀儡師引田氏と語り始めて淨瑠璃に合せて人形をあやつる事を始む。當時禁闕にも召されて、後陽成天皇の御覽に備へたり。

と云つてゐる。また「東海道名所記」(萬治元年了意撰)には

京の次郎兵衛が西の宮の夷舁、引田淡路椽を語らひ四條河原に芝居を建て鎌田政清、こわうの姫、阿彌陀胸割など云ふ淨瑠璃を語りし由見えたるが、けだし此頃の事なるべし。

こあるがこれは慶長も後期の時であらうと思はれる。とにかく引田淡路椽が誰よりも早く受領したと云ふ事と、そして彼が淨瑠璃に合せた人形芝居興行の第一人者であつたこと云ふ事は慥かな事實であり、その創始期の年代は多分文祿、慶長頃の事と解すべきが、妥當であらうと思ふ。

當時の人形芝居の劇場は、林羅山の隨筆に依るに、高さ二丈、長さ數丈の幕張りで、雛人形の壇のやうな棚を設けて、太夫は棚の下に隠れて淨瑠璃を語り、人形のみが見物の眼前でその技を揮つた。人形は土製もあつたが木造が多く用ひられ、男女僧俗、天仙神女武士等種々のものがあり、舞ひ、鼓を打ち、馬にのり、棒をふり、旗、傘をさしかけ、斬られた者は首と胴が離れ

狐はその尾から火を放つて見せた伴奏には鼓に笛があり、時々床板を踏んで掛聲をして調子をとつたと云ふ事である。「京雀」には、

淨瑠璃太夫は文祿年中より慶長に及んで監物某並に次郎兵衛某なる者、攝州西の宮の傀儡師を招きて相共に之を經營す、監物並に次郎兵衛は淨瑠璃を語り、西の宮の人形は人形を舞はず。その始めは惟かに幕を兩楹の間に張り、人形を其上に舞はす。

と云ひ、また「南水漫遊」には、

其式は中央正面に舞臺を設け、横の長さ五間、矮欄を溝へ其上下に幕を投げて、偶人を操る者、幕の内に居りて人形を上下の幕の間より出だす。上段の幕を額隠しと稱す。人形を操る者此幕を以て額面を隠すの謂ひなり。幕の内をすべて幕屋といひしかど、近世舞樂の樂屋に纏へて樂屋と稱す(中略)木偶人は男女老少其事に應じて之を出し、舞臺の上下幕の間に之を操る。

と云つてゐる。

かくて追々に人形芝居が進歩發達するに隨つて、剛健から華美に移つて行つたのは、極めて當然なる現象で、しかし、その爲に寛永の有司は政策上之を譴責して、太夫を獄に投じたりしたが、これがまた操芝居をある意味に於て刺戟し、興奮させるやうな結果にもなり、事實上に於て人形の技巧は、ますます妍爛を極めるやうになつて、その間異常なる發達をなした。しかし乍ら外面的には當時の劇場は、矢張り小屋がけの見すばらしいもので、その草

創期とは餘り大した進歩の跡も見せなかつたのである。

第三期爛熟期(1680—1770)

日本操人形芝居の發達の第一轉機は延寶年間(1673—80)に始まる。而してその進歩は正徳(1711)、享保(1716)、寶曆(1751)、明和(1764)の五期に遞次に期劃されてゐるのを見る。この

時代までは箱芝居、所謂一人操りであつた人形芝居が、淨るり、三味線と云ふ二大要素と合體して、綜合藝術としての型式を備へるやうになつてからは今日で云ふ意味に於ける操人形芝居となり、こゝに態形をこゝのへて著しい進歩の跡をみるやうになつた。殊にこの時代に當つて、吾等は竹本筑後椽、近松門左衛門と云ふ二大天才を得る事を得て、いよゝこゝに華々しい時代への第一歩をみ出したのである。云ふまでもなく操人形の進歩發達は、初

期は論外であるが、かく綜合藝術の態形をこゝのへた以上、その臺帳にも云ふべき淨瑠璃なる劇詩の製作と、その演奏の進歩發達に重大なる因果關係を有するやうになつた事は言を俟たないところである。従つてこゝにその發達の徑路を記すためには是非共、これら院本作者及び上り語りの重なるものに就て顧りみなければならぬ。

これに先つて先づ初期に於ける操人形芝居の舞臺面を一應考へてみる必要がある。「竹豊故事」にもその事は出てゐるが、殊に「南水漫遊」に詳しい。

往古の操りは、人形は首ばかりにて、蕭物を打着せしも足も使ひ人の手にてしたることにて、近世まで小供の習ひにテクノボウといへるものも是なり、當代の如き木偶を用ふる其權輿は、大阪の細工人石井飛彈といへる者、大人の手を人形の袖へ挿し込み使ふこと甚だ見ぐるしめて工夫なし、人形に手を拵へて附けたり、それより之に倣ひて足をつけ、或は手の指を動

かし、眼を使ひ眉を動かすなど、近世さまゝ自由を作る、是れ石井氏の工夫なれば操り芝居にて尊み申さればならぬなり、外題年鑑に曰ふ、松本治太夫一座にて「源氏烏帽子折」といふ操りに、藤九郎盛長、金王丸、二つの人形にはじめて足を附けたり、其後宇治加賀椽の操りにて「世繼會我」の時、朝比奈の人形に足を附くる、それより諸流共に立者の人形ばかりに足を附くることゝはなりぬと云つてゐる。

さていよゝこ(貞享二年(1685)、道頓堀の現在の松竹座の附近に竹本座が創立された。この貞享元祿の初期より、天保嘉永の末期に至る前後約百九十年余の間の操芝居の歴史に表れた院本作者の名は、大小合せて七十人を越してゐるが、その中まづ第一に推さなければならぬ人は、何と云つても近松門左衛門であらふ。しかし彼の功績に就ては今日あまりに多く知られ過ぎてゐるから、こゝにはこの小論にとつて必

要三思はれる事のみを極めて簡単に述べる事にするが、こゝに一言云ひ添へて置くべき事は、彼の前半生の傳記の明瞭でない事である。したがつて淨るり作家としての彼は、貞享二年の「世繼會我」その以前にも作があると云ふが、それは詳でない(處女作として、享保九年(1728)の「右大將鎌倉實記」を絶筆として同年十一月廿二日、七十二歳を以て大阪に歿した、その間時代物世話物を合して約百種の作物を残した。その戒名は阿禪院穆矣日一具足居士。傳記として何人にも確實に認められてゐるのは單にこれだけの事實に過ぎないのである。彼はその生國すら未だに明瞭ではない。長門の國の生れと云ふ説が一般に行はれてゐるやうであるが、それとても正確なる根拠のあるわけではない。たゞ彼が幼少のころ肥前唐津の近松寺といふ臨濟宗の寺に於て、その因縁から近松の號を戴いたと云ふ事は事實のやうである。その後還

俗して京都に上つて一條家に仕へ、更に辭して初めて詩人の生涯に入つた。その記年も正確には判らないが、彼は延寶九年(1739)、廿五歳の時、京都の萬太夫座のために藤壺の後の怨靈の出て云ふ狂言をつくつて評判を取つた。そのほか藤十郎の爲めに十幾種の歌舞伎脚本を書き、また宇治加賀椽のためにもいくつかの淨瑠璃をかいた。しかし彼が眞の戯曲作家としてその本領を發揮したのは元祿三年正月(1688)三十八歳にして京都を去つた時に始まる。彼は竹本義太夫に迎へられて永久に大阪の人となり、竹本座の爲めに幾多の新淨瑠璃を起稿することゝなつたのである。

この二人の作者の事を説くに就ては、こゝに竹本座と豊竹座の事を記する必要がある。前にも記した如く、竹本座は竹本筑後少椽(竹本義太夫)によつて貞享二年の二月に創設された人形芝居であるが、豊竹座はそれより十七年後れて、即ち元祿十五年三月(1708)に豊竹越前少椽(豊竹若太夫)によつて、同じ道頓堀に創められたものである。その座の所在に隨つて一般に竹本座を西と云ひ、豊竹座を東と云ひならはした。而して竹本の作者は近松、豊竹のそれは海音である。同じ人形芝居の座が同じ町内に二軒やぐらを並べたのだから、こゝに猛烈なる競争の起る事は理の當然である。さればこの二人の立作者も相対抗してお互ひにその力量を闘はねばならなかつた。大近松を向ふに廻して、西と東を殆ど對等の位地に置いたのは彼海音の偉大なる力である。もし彼が尋常一様の作者であつたならば、當然豊竹座は竹本座の爲に完

膚なきまでに壓倒されて了つてゐたであらふ。彼も決して一樣なる作者ではなかつた事はこの事實によつて何よりも雄辯に語られてゐる。

以下竹本座の作者と豊竹座の作者とを便宜上別々に紹介することにしよう。先づ竹本座の作者を説く事にしよう。

西の作者として大近松につぐものは竹田出雲である。出雲の父は機關人形で有名な竹田近江椽であつた。彼は寶永二年(1705)に竹本座の座主となつた享保八年(1723)彼は三十三歳にして初めて「大塔宮囃鏡」と云ふ五段物の淨瑠璃をかいた。これが近松の添削を経て竹本座に上演されて好評を博したので、彼はその後も續いて新淨瑠璃を書き、近松の歿後は竹本座の座主と立作者を兼ねるやうになつた。

人形は帷子の衣裳を着せたのは彼の「夏祭浪花鑑」を以て嚆矢とする。延享二年七月(1745)の興行で残暑の強い時節であつたので、人形つかひの吉田

文三郎が初めて工夫して、人形の衣裳に帷子を用ゐることにした。それのみではなく長町裏の義平次殺しの場、かの泥仕合の件はほんたうの泥水を入形の衣裳に打つけて見せたので、見物はびつくりしたと云ふ事である。續いて「義経千本櫻」の時に人形の狐の耳の動く仕掛けが發明された。忠信の衣裳に源氏車の模様をつけたのも吉田文三郎の工夫である。出雲は寶曆元年(1751)十月廿一日、六十六歳で死んだ。出雲に小出雲といふ子はあつたが、その事業の上に於ける實際上の後繼者と見做さるべきは近松半二である。

近松半二は竹本座の作者として出雲の下に筆を執つてゐた。そして近松の門人である云ふのでその姓を冠してゐた。寛延四年(1753)十月十七日初日の「役者大峰櫻」に竹田外記、近松半二の名を署したが、淨瑠璃作者として立つた彼の第一歩である。その後彼はだん／＼その才能を認められて、出雲

の歿後、遂に竹本座の立作者の位地を占めるやうになつた。

出雲は近松の手法を學んで、専ら趣向の新奇に意を注いだが、半二は更にその上に専ら見物をおごろかす事を工夫した。そののえ操り芝居がだんだんその本質を失つて来て、自然に歌舞伎化して來た事は争はれぬ事實である。

半二の時代、即ち寛延より天明に至る間、に至つては歌舞伎がだん／＼その勢力をばつて來て、あやつりは動もするとその爲に壓倒されるやうな形になつて來た。この頹勢を挽回する爲に半二は非常なる努力をしたけれ共、自然の成行は之を如何ともする事が出來ずその晩年に至つては操芝居はいよ／＼衰へて來た。元明三年(1788)二月、彼は五十九歳で京の山科に歿した。有名な「伊賀越道中双六」がその絶筆である。半二を失つて操人形芝居は全くその勢力をなくして了つた。操人形の作者としては實に彼は最後の勇者と云ふべ

きである。半二の死と共に、世は遂に歌舞伎の時代になつて了つた。

以上近松、出雲、半二の他に、竹本座には松田文耕堂、長谷川千四、三好松洛等の作者のあつた事を忘れてはならぬ。

竹本座の作者はこれで一通り終つた事として、更に豊竹座の作者に移る。しかし乍ら事實の上に於て代表的の作者はここへ竹本座にあつたので、近松に對抗した紀海音以外には僅かに西澤一風、並木宗輔、淺田一鳥、菅專助等の作者があるが、いづれも竹本に於ける近松、出雲半二、松洛等に比べるに就てのアウトラインを簡單乍ら述べた。次には淨瑠璃太夫に就て少しく説明をしよう。

以上で竹本、豊竹兩座の淨瑠璃作者に就てのアウトラインを簡單乍ら述べた。次には淨瑠璃太夫に就て少しく説明をしよう。

いふ事は義太夫に始まつた事ではない、それは前章に於て已に略説したところである、要するに太夫に竹本義太夫が出て、作者に大近松があらはれて、こゝに初めて操人形芝居が綜合藝術としての態形をとつて大成してから人形芝居義太夫節と云ふ事になつたのである。

義太夫節なる淨瑠璃節の一分を編み出した竹本義太夫は、もと攝州東成郡四天王寺村の農夫であつた。然し彼の以前に井上播磨と宇治加賀の事を知らねばならぬ。何故ならば彼はその兩者の二流を取捨して始めて義太夫節なる一流を完成したからである。

井上播磨は京都の人で、初めは謡曲を學び、のち虎屋源太夫に師事して淨瑠璃を學び、遂に一流を作り出した。寛文の頃から汎く世に行はれるやうになつた。貞享五年二月五日、五十四歳で歿した。宇治加賀は紀州和歌山の人で、京都に出て伊勢島宮内に淨瑠璃

を學び、宇治嘉太夫と稱してゐたが、後井上播磨の淨瑠璃から工夫して別に一流を創めた延寶五年に加賀の稱を許されて新作の淨瑠璃を語り出した。近松門左衛門は彼の爲に「世繼會我」その他數番をかいた。寶永八年正月、七十七歳を以て歿した。

この兩者の後をうけて現れたのが即ち竹本義太夫である、由來播磨の淨瑠璃は専ら音を主とし、加賀のそれは節を主としたものであつたので、彼はその二人の長所をとつて更に一流を編み出し、貞享二年竹本義太夫の名を以て操人形芝居の興行をした。これ即ち竹本座で、その最初の演出は近松が加賀の爲に作つた「世繼會我」であつた彼と近松が一緒に爲筆する様になつたのは此時からで、爾來この二人の天才がお互ひに助け合ひ乍ら、ますますその技倆を發揮し、こゝに操り芝居の大根柢を固めたのである。義太夫は元祿十四年五月竹本筑後少様と改め、寶



清凉口錠
咽喉疾患
治療剤

本品は世界的著名なる獨逸バイエル社の創製品にして口腔咽喉粘膜に對し鎮靜、消炎、消毒の特效あるが故に……

咽喉カタル、劇甚なる咳嗽、嘔聲、喘息、氣管枝炎、感冒等の場合に應用して著效を奏し又口腔の惡臭を除去し、發音を輕快増強せしむるの作用を有す。

コリアインボンボンは佳味爽快にして危險性藥劑を配せず、絶對安全なり。

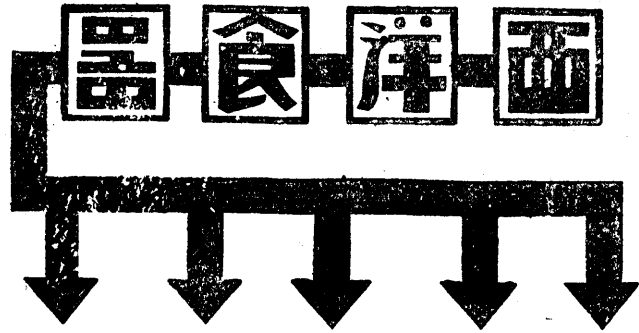
(一瓶 七十粒入 金壹圓拾五錢)

——各地藥店にあり説明書下記より逆呈——

フリードリヒ、バイエル合名會社

神戸市仲町三七番
出張所 京都市京橋區北濱町一八
日米信託ビル二階

コリアイン ボンボン



御家庭用食器

卓上器具

料理用道具

ホテ
レストラント
用
品
チールーム

御婚禮用西洋食器

サ イ キ 商 店

神 戸 市 元 町 一 丁 目
電 話 三 三 〇 五 番 番

永二年竹本座の座元を竹田出雲にゆつて、正徳四年九月十日を以て大阪に歿した。

さてこゝに竹本座に對抗して豊竹座を創立したのが、豊竹若太夫である。彼は大阪堂島にある豊後藩の藏屋敷の仲仕であつたが、貞享の頃から井上播磨、宇治加賀等の淨瑠璃を學んで豊竹若太夫と名乗り、元祿十五年に豊竹座を創めたのである。享保三年豊竹上野椽を受領し同十六年更に越前少椽となり、明和元年九月十三日、八十四歳にして大阪に歿した。

尙兩座に屬した主な太夫の名を列擧して置かう。

〔竹本座〕

竹本義太夫。文太夫。浪花。政太夫。此太夫。百合太夫。紋太夫。島太夫。錦太夫。壽太夫。染太夫。咲太夫。岡太夫。鐘太夫。住太夫。

〔豊竹座〕

豊竹若太夫。伊勢太夫。出水太夫。

島太夫。麓太夫。八重太夫。信濃太夫。河内太夫。丹後少椽。

さて次はいよいよ人形及び人形技巧の變遷の歴史にうつる。貞享二年竹本筑後少椽が始めて竹本座を經營した頃は、人形も其衣裳も道具も極めて簡單な、また疎末のものであつた。その事は本章の冒頭に少しく記したところであるが、その後寶永元年に竹田出雲が竹本座の座元となつて後は、人形にも色々としらしい工夫が加へられ、衣裳や道具も立派なものになつて、人形技巧に著しい進歩の跡を見たのである。

〔雲錦隨筆〕に

寶永二年乙酉三月、竹本筑後義太夫の芝居にて「用明天皇職人鑑」の鐘入の段を出語りにて、太夫は筑後椽、三絃は竹澤權右衛門、おやまは辰松八郎兵衛今度出づかひを始めしなり。正徳中までは淨瑠璃短くして、間の物にのるま人形の滑稽、或は機巧なぞを加へて勤めしが

正徳五年乙未十一月朔日より近松門左衛門の作せし「國姓爺合戦」を竹本座に於て興行せしより、のろまの滑稽や機巧などは加へざるやうになりたりとぞ、享保六年辛丑八月「信州川中島合戦」竹本座興行、此時山簾を張抜きの本山に作りはじむ、これまではすべて山の段は簾に山を畫きたるを用ひしなり。

と云つてある。「音曲道智論」にも同様の記載がある。また「竹豊故事」に

其後次第に操り芝居繁昌せるにつき、道具建、衣裳等漸々に向上になり、別して竹本豊竹兩座となりてより東は西に負けまじ、西は東に勝たんぞ互ひに勵み出来、ますます芝居繁榮し、淨瑠璃の作者は種々様々の趣向を巧み出し、道具建にも金銀を惜まず金襴にて舞臺を輝かし、或ひは敷寄屋が、りの粹なる思ひ附に智慧袋の底を振ひ、人形の衣裳には縮緬、綴子、縹子、金襴等にて美麗を盡し、詰人形の外は、皆々足附となり、出使ひの外は、介錯足使ひ立ちかゝり、歌舞伎役者の所作より優りて、あつばれ見物事なり。

と云つてゐる。

この當時に於ける人形使ひの名人として、同じく「音曲道智論」に難波に藤井小三郎、桐竹三右衛門などのお上手あり。近頃吉田文三郎古今無双の達人なり、同じ頃に若竹東九郎、藤井、小八郎、すべて桐竹、吉田、豊松、若竹氏の中に上手多し。

之を要するに、操人形芝居といふものは、人形の製作の上から云つても、その技巧の上から云つても、乃至はその臺帳である淨瑠璃その者の劇詩的内容も、舞臺装置その他も、その總ての諸分科を通じて、享保時代に於て既にその發達の絶頂に達して了つた。何故ならば人形芝居に於ては今日に於ても其當時以上さう進歩したとも見えないからである。

ところで説は再び貞享にもさるが、例の貞享二年(西歷一七二五)義大夫によつて竹本座が創設されて後、自、時代に於ける竹本義大夫は、人形や舞臺装置

には余り意を用ひる余裕のなかつたほど、淨瑠璃中心主義であつた事は、座主たる彼の職業が淨瑠璃人形である以上是非もないところであるが、幸ひにして女を使ふ辰松八郎兵衛があり、男を使ふ吉田三郎兵衛があつて、かの會根崎心中の道行には、見物をうならせたが、此の時は一人が一個の人形を使ふのであつて謂ゆる突込手と云つて、人形の裾から兩手を差し込んで使ひ手の姿を隠し出遣等はほんの僅かな場面に限られてゐた。

こゝに竹田出雲の人形革命の時代が出現する。即ち彼は人形芝居中心主義で竹本座を経營した人形使ひにはおやま、辰松八郎兵衛立役の津山助十郎、津山金七等が好評を博し、國姓爺後日合戦には辰松の伴、吉田文三郎が錦紗を出遣ひして、その片手での天才的至藝は見物を深く驚かせたところだつた是れ、後年操芝居の爛熟期に殊勳を樹てた天才的人形使ひである。しかしこ

の時代には、また人形は突込手で使つてゐたのである。

女形の人形に足のないのは誰も知るころであるが、この當時は立役の人形にも足がついてなかつた。それは當時の人形が差込手で、即ち人形の裾から手を差入れて一人が一個の人形を使つたのであるから、手と足を同時に動かす事は絶対に不可能と考へられてゐた。従つて人形の足と云ふものは無用のものと思惟されてゐたのである。それが進歩して、元祿年中に初めて人形に足をつける事が工夫されたのである。

人形の進歩はその止るところを知らない享保十五年、豊竹座で並木宗輔の「桶正成軍法寶録」を上演した時に、人形使ひの近元九八郎が、初めて人形の眼玉の動くことを工夫した。同十九年竹本座で出雲の「芦屋道満大内鑑」を上演した頃には、人形使ひがく、いよ巧者になつて、奴の與勘平と彌勘平

の人形は三人がよりで使ふやうになつた。今日の如く人形を三人がよりで操ることはこの時に初めて行はれたものである。それから二年後の元文元年、竹本座で「赤松圓心縁陣幕」を上演した時、吉田文三郎の工夫によつて人形の眉の動くことが發明された。つゞいて元文四年、同じく竹本座で出雲の「ひらかな盛衰記」を上演した時、同じく文三郎の工夫で、梅ヶ枝の人形に長指尺を用ひるやうになつた。それは人形の手を自由自在に動かす爲の工夫である。「夏祭浪花鑑」の時、人形の衣裳に泥水をかけたのは前述の通りである。享保廿年、豊竹座で宗輔の「和田合戦女舞鶴」を上演した時、藤井小八郎の工夫で、板額を強いやうに見せる爲におやま人形を普通の人形の二層倍に大きく作つて見物をおごろかせた。元文二年、同座で宗輔の「釜淵双絨巴」を上演した時には、釜入りの五右衛門の顔がだん／＼赤くなるやうに工夫した

それは五右衛門の人形の首を澤山作つておいて、人形使ひが手早くさしかへるのであるが、その手際が如何にもうまかつたものだから、見物人の目にはほんとうに五右衛門の首が赤くなつたかのやうに見えて大喝采を博したと云ふ寶曆十年、豊竹座で「祇園女御九重錦」を上演した時には、例の三十三間堂のお柳のくだりで、柳の大木を車にのせ、子供の緑丸が花道を曳いてゆくところが機械仕掛けで非常に評判がよかつた。延享四年、豊竹座で「悪源太平治合戦」を上演した時に、若竹東二郎は立役の人形に屏風手といふ事を創めた、それは五本の指を並べて折り、それを皮で繋いで蝶番ひのやうにしたのである。要するにこれは指の屈伸を自在ならしめる爲で、屏風から工夫したので屏風手と呼ばれてゐたのである。人形使ひの名人としては、竹本座の吉田文三郎、及び之に對抗したる豊竹座の若竹東二郎の外に、竹本座側には

桐竹助三郎、山本伊平次、鳥野甚左衛門、吉田才次、桐竹勘十郎、吉田甚五郎、吉田彦三郎などの人々で、豊竹座側では藤井小八郎、藤井小三郎、近本九八郎等の人々が著名であつた。

人形の頭を打つ作人では、笹尾八兵衛が最も名高い。彼は竹本座の創設當時より優れた頭を打つたが、就中、國性翁、安體神、素戔嗚の三つは名作として有名で、それをいろいろの人形に轉用したのである。その後竹本豊竹兩座の對抗した時代に、男の方では檢非違使、素戔嗚、文七、由良之助、樋口天神、實盛、鬼一、蛇羅助、團七、一寸、六郎、釣舟、白太夫、正宗、源太、役行者、日蓮。女の方では娘、女房、傾城、累、御臺、老女、お福、なご云ふ種類が出来、使ひ手も分業になつて數十人の人形使ひが樂屋につめてゐた。かくて享保に至つて人形芝居の發達は其の絶頂を極めたが、續いて享保の末年より天文にかけては、もう既に技

歐米戯曲翻譯總覽正誤

大正十五年十月號（第五號の部）

- P.108—17 アンドレエフの Honor の發表年號 1612は1912の誤り。
- P.109—1 アツシュの生年 183は1883の誤り。
- 〃—29 ベツクの Les Corbeaux の發表年號 1822 は1882の誤り。
- P.110—1 ベナベンテの生國「伊」とあるは「西」の誤り。
- 〃—33 プロオクの見知らぬ女の所載誌「劇評論」は「演劇新潮」の誤り
- 〃—35 「愛と詩と國家奉仕に就て」—は築地小劇場上演臺本。
- P.111—8 コボオの生れた家—高橋邦太郎は中央美術社より出版。
- 〃—18 チャベツク—Czapek は Czaeck の誤り。
- P.112—1 「秋夕夢」の登場人物(男1:女7)とあるは(女9)に訂正。
- P.113—24 エフレイノフ—Eureinov は Evreinov 又は Yevre-ynoff.

昭和二年新年號（第二卷第一號の部）

- P.110—11 地平線の彼方—北村喜八—は原始社より上梓。「毛猿」同卷。
- P.112—17 アナトールの中Weihuachseinkaufe は Weihnachseinkaufe の誤り
- P.119—9 シュミットボン—Bonu は Bonn の誤り。
- P.114—7 Yov は You の誤り。
- P.115—1 Andreles は Androcles の誤り。(船坂書店出版)
- P.119—25 Three Sister は The Three Sisters の誤り。

(附記) 補遺を是非加えたいと思つたのですが、調べて行くとその数が益々増加してさうて二頁や三頁で収載出来ませんので、いづれ他日改めて大増補をしたいと思ひます。いろいろご御注意下さつた諸氏に厚くお禮申上げると共に此點お詫ひ申上げます。

巧の爲の技巧に墮し、内容も、形式も、次第に見たきて専一の風になり、徒らに繁褥で、その最初のやうな眞摯な、簡樸な味ひを失つて了つた。享保十七年版の「昔々物語」に

近年の操りは大將も大廣袖の伊達、小袖模様至極の伊達を盡し、人形の面を浮氣に拵へ、相伴ふ郎黨皆廣袖の小袖、大びやくま、はなし髪、女の人形は御所畫といふも皆おやま人形、投島田の髪にて、小袖も伊達を盡し、淨瑠璃は始めより終りまで、有るにもあらぬ色を盡し、不届千萬なる仕組、其上、木に竹を接ぎたる様に時代ちがひ、有るまじき所、出まじき者も出しあり、と見れば行方も知らぬやうに埒もなく作り、道に違ひたる筋なき戀を作り込めたり、これを幼少の子供、若き衆など見物して善き事と思ひ、浮氣になき人まで嘸り立ち、大好色になる、徳なき貝のなり、むかしの仕組は、命乞熊谷光陣問答など、皆道理つまりたる仕組ともなりしに、今様は埒もなり。

と云つてゐる。かくて竹本座は明和四

年を以て事實上に滅亡した。これ竹本義太夫が始めてこの座を開いてより實に八十年目のことである。豊竹座は竹本座に先立つこと二年、明和二年の八月を以て、竹本座と同じ道を辿つて遂に亡びて了つた。若太夫が元禄十五年にこの座を創めてから僅かに六十四年後のことである。

江戸操りに就ては、では述べない。

日本操人形芝居に關する近頃の文獻

- 坪内逍遙「我國の操り芝居に就て」
- 〔劇壇の最近十年〕米山堂發行
- 同「種類の偶人劇としての我操り芝居の研究」(同上)
- 三田村篤魚「蕪養人形」〔蕪魚隨筆〕春陽堂發行
- 同「淡路の人形座」(同上)
- 高野辰之「日本木偶劇の傳統」〔日本演劇の研究〕改造社發行
- 岡本綺堂「竹本劇とその作家」〔國史評習

會發行)

志方義秀「西の宮淡路京都の操の關係—及び傀儡、道齋坊、百太夫に就て」

〔國語と國文學〕第廿五號

副島八十六「阿波の人形芝居と就て」

〔早稲田文學〕大正十年四月號

吉井太郎「傀儡師の研究、特にこれの道祖神信仰に就きて」〔皇典講究雜誌〕大正元年號

安藤正次「久具都名義考」〔古代國語の研究〕附録

濱田青陵「古表八幡の傀儡子」〔藝文〕第二年

尾崎久彌「江戸軟派雜考」〔春陽堂〕

小宮豊隆「ハンクマンの見た文樂の人形芝居」〔演劇新潮〕本年一月號

吳文炳「日本演劇史論」

〔The Historical Development of Marionette Theatre in Japan. New York〕

〔劇壇縱橫〕文樂座號(大正十四年十月、松竹合名社發行)

〔大阪文樂座人形淨瑠璃芝居〕番附。

(大正十四年七月東京歌舞伎座發行)

水谷不倒「繪入淨瑠璃史」

(其他本文に見えたる諸書等)

編輯餘録

△創刊以來將に滿一年！どんな事があつても二年は繼續しよう、この意圖が今日實現されたのであるが、すぎ去つた跡をふり返つて見るにこんな小さな仕事にも可成な苦勞のあつた事——不愉快な「世間」といふものが絡みついて來た事を感じる。今日まで本誌を見ずして、本誌の成長の爲めに深い好意を寄せられた誼友並びに一般の讀者諸氏に心からのお禮を申上げると共に今後引續いて倍舊の御後援に與らん事を眞先に懇願申上げる。本誌は讀者諸賢に對して充分御期待に添ひ得たことは自惚れない、併し最善の義務だけは果し得たと思つてゐる。

△本誌をもつて一ヶ月の預約購讀の契約の切れる二百餘の誼友諸氏、誌中の誼友カードに再び御記名下さいましたら、どんなにか有難い事です。本誌によつて繋がれた私共の御好誼を今後ともに續け得ますれば何と云ふ幸でせう！

△本誌に國民座の堀正旗君からその處女脚本「邪宗門挿話」を送つて貰つたが、これは次號に悲劇脚本ばかり集めたいと思つて

ゐるので割愛させて貰つた。作者並に讀者諸氏に一寸お断り申上げて置く。

△木谷蓬吟氏、石松太郎氏には御多用中に御無理を申上げたにか、はらす直ちに御執筆下さつた御好意を、此處に改めて謝しあげます。

△尙過日新歸朝の大毎の伊東恭雄氏からは「チャップリンに就て」また逍遙選集編纂中の大村弘毅氏からは「古代のマリオネツト」の原稿を頂戴する豫定の處、兩氏とも目下甚ださき多忙の爲め、遂に本誌を飾る事の出来なかつたのは何とも残念である。又劇評も西田、京極兩氏にお願ひしたがこれは次號に一旦お断りして總評を書いて貰ふ事に變更した。

△小寺氏の人形芝居、これは是非とも愛讀が願ひたい。「人形座」あたりで演出するに好個な脚本ではないかと思ふ。尙「殿られ同志」短い物ながらさすがはモルナルださうなづかせるものがある。モルナル通の鈴木氏の譯筆に敬意を表したい。

△次號文献としては舞臺藝術に關するものを集める豫定、大方の御叱正を仰ぎたい。

(豊岡)

| | |
|----------------|-------------------|
| 『劇』第一卷第二號 | |
| 昭和二年二月廿五日印刷 | |
| 昭和二年三月一日發行 | |
| 編輯兼發行人 | 豊岡佐一郎 |
| 大阪府西區京町堀通丁目三番地 | 大矢大吉 |
| 印刷所 | 電話六一六二番 立清舎印刷所 |
| 大阪府下箕面村櫻井 | |
| 『劇』發行所 | |
| 大阪府此花區堂開町・幸英館 | |
| 『劇』事務所 | |
| 電話土佐堀七七七八番 | |
| 振替大阪七七六七番 | |
| 大阪府北區曾根崎上三丁目 | |
| 發賣元 | 大同書院 |
| 電話北一六三五番 | |
| 振替大阪三一九七二番 | |
| 頒隔 | 一ヶ月金貳圓五十錢(郵稅共) |
| 費(月) | 一部金四拾錢(郵稅) |

肉衛・豫防・治療

世界的に最も信頼さるゝ(完全腫殺菌錠)

セモリ

(六回用壹圓五十錢・十二回用貳圓八十錢)

●使用久しきに亘るも局部障害を來さず

腔内ニテ持續性强殺菌泡ヲ發生シ其擴大力ニヨリ最深部ニ浸徹シ微生物ニ最モ完全ナル障壁ト殺菌ノ重複作用ヲナス●花柳病豫防ニ用ヒラル

◆説明書進呈

洗滌を要せず速効を誇こせる

女性生殖器病殊に白帶下治療

スプーマン

膣挿入用

(六回用壹圓二十錢二十回用貳圓五十錢)

無脂肪性ナルガ故ニ不快ナラズ……桿狀ノ最新式錠劑ナリ……無痛……可溶性ナルト腔内ニ於ル特殊反應トニヨリ子宮疾患ニ對シ原因的治療ヲナス

獨乙政府專賣特許
三三市トルボト社製

輸入元大阪南四町尾村商店

大阪東區三丁目三番地 店商
大阪東區四丁目三番地 店商
大阪東區五丁目三番地 店商

大阪東區三丁目三番地 店商
大阪東區四丁目三番地 店商
大阪東區五丁目三番地 店商

本日名物 仁丹三品



四博士責任劑
ボケット必携

完全なる
懐中藥

金言 正直ニ考ヘ眞實ヲ以テ
行ヘ フランクリン

齒學界の權威

四博士創製
科學的優秀
高貴料配合

仁丹のハミカタ

丸罐入は別製せる優良品

にして清涼味特に強
く口中殊に氣持よし。

●最良の体温計は家庭の名醫
仁丹の体温計

北里、金杉、高松、吉武四博士顧問
侍醫頭入澤博士外廿博士實驗推獎

顧問 醫學博士 理事博士 長井長義先生

監督 大阪海軍校長 海軍博士 大槻 式 先生

協同 日本齒學會會長 大槻 式 先生

處方 ル・ド・サ・ド・クトルム 高島多米治先生

教授 日本齒科醫學專門學校 二村領次郎先生



昭和二年二月廿八日印刷納本
昭和二年三月一日發

臨時定價 拾錢